

第6章 平原地区

第1節 調査概要(第1図)

平原地区は、野間地区の西側に、水田のある谷を挟んで広がる東西100mの台地である。標高は野間地区と変わらない。現状の水田区画ごとに東からA～G区とした(第3章第5図参照)。A区からD区までは比較的平坦で、B区付近を最高所とする(第1図)。A区の大半・B区西半・C区の大部分・D区東半はすでに1910年代の水田開発によって削平されていて、まったく遺構を残していなかった。

残された部分を調査した結果、A区で掘立柱建物跡4棟、土坑1基、溝1条を検出し、B区で土坑1基、D区で土坑1基を発見した。さらにE・F区では土坑3基と溝6条を検出した。そのうち縄文時代の土坑3基がまとめてE区から発見されたほかは、奈良時代と近世以降の遺構であった。

奈良時代 平原地区で最も高いA・B区に集中して掘立柱建物跡4棟と大型の廃棄土坑2基が直接して発見されたほかは、D区で建物群以前と思われる炭が堆積し壁面が焼けた土坑を検出したのみである。小規模な建物群が短期間この場所つまり最高所に存在していたものと考えられ、その立地は注目される。出土遺物は須恵器・土師器の生活用土器のほかには北部九州からの搬入品である焼塩用製塩土器が出土した。また須恵器の時期からみて平原地区に建物群が出現するのは、8世紀中葉ごろと考えられる。つまりこの地区に宅地が広がるのは上野第1遺跡の奈良時代集落の存続期間の後半の段階にあたる。

近世・近代 A区で1910年代の水田化時に完全に埋没した畠地の境界溝を1条発見したほかは、B～D区からは近世の畠地境界溝を発見されなかった。これはおそらく存在しなかったのではなく、耕地整理による地形変化が著しいために、その多くが削平消失したものと推定される。一方台地の肩にあたるE・F区では削平が一部に限られていたため、重複する畠地境界溝が6条検出された。しかも台地の平坦面上ではなく、谷の斜面に下降する場所であるために畠地境界溝の末端部分の状況を観察することができた。

第2節 平原A・B区

2-1 A・B区の概要(第2図→図版68・69上・中)

奈良時代の一単位の宅地と推定される遺構群と、近世の畠地境界溝が1条発見された。

奈良時代の遺構は、梁間2間桁行3間で床面積26㎡の51号掘立柱建物跡を中心に、4棟の掘立柱建物跡と201・203号土坑を検出した。51建物と201土坑は近接し、かつ廃棄物の投棄の方向が51建物側であることから、住居とゴミ捨て穴の関係であろう。203土坑も建物群に付属する廃棄土坑と考えられる。52建物と53建物は重複しているので同一地点で建て替えられたものであるが、直接の切合関係はなく前後は不明である。この地区も掘立柱建物のみから構成される一単位の宅地と思われるが、建物の軸方向は東原・野間地区の建物群とは異なっていて、南北や東西方向に建物の向きを揃える観念はうかがえない。しかし4棟の建物の方向は真北から東に20度前後振った方向で、おおよそ一定しており、ひとつの建物群として意識されていたものと推定される。

表面採集の遺物(第3図) 現水田除去時および水田化以前の畠地耕作土中から出土したものと

台地上

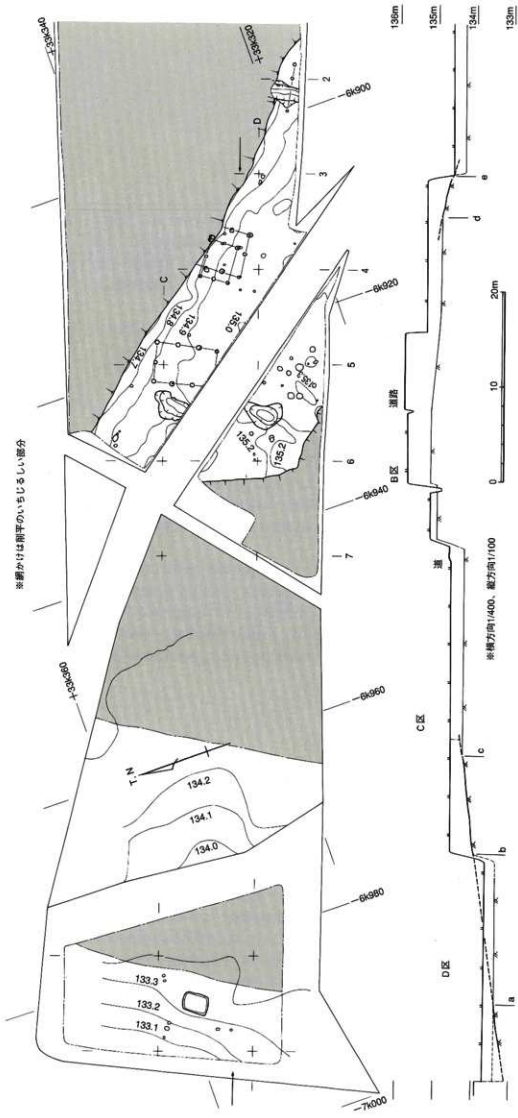
水田下による削平

残された遺構

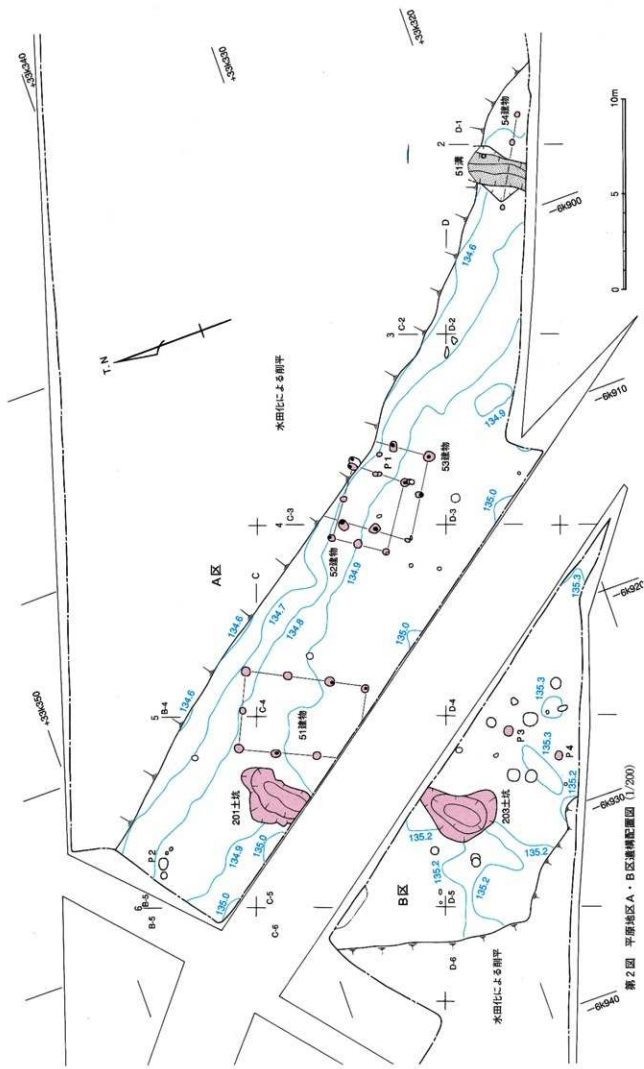
奈良時代の小建物群

畠地の区画

掘立柱建物と土坑



第1図 平野地区A・B・C・D地区の調査区 (1/400)

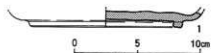


水田化による雨平

水田化による雨平

第2図 平原地区A・B区建物配置図 (1/200)

採集遺物 して、黒曜石小片・須恵器甕壺坏などの破片と土師器の細片などがある。そのうち図示できるのは1点のみである。1は須恵器の大型坏身の底部片で、胎土に石英粒子を多く含む日田郡域外からの搬入品である。



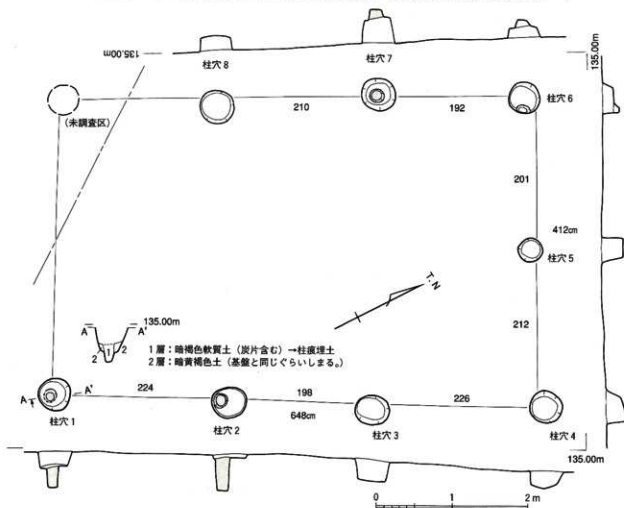
第3図 平原地区A区 表面採集遺物 (1/3)

2-2 奈良時代の遺構と遺物 (第2図)

① 掘立柱建物跡

51号掘立柱建物跡 (第4図→図版69下)

2×3間 掘立柱建物 南西隅を削平されていた梁間2間桁行3間の南北棟の掘立柱建物跡である。東柱のない側建物で、南北長軸の方位角は26度である。柱間寸法は心心距離で南北長約648cm、東西長約412cmである。床面積は約25.3㎡で、側建物としては中型に分類される。柱間距離の1単位が216×206cmのほぼ正方形となるI類である。検出された8本の柱穴はすべて円形であり、北の梁間の柱穴5がやや小さいほかは柱穴の大きさ深さともによく揃っているA類掘立柱建物である。その掘形は径40cmほどで、柱穴5のみが径30cmほどである。柱穴1・2・7から径15~20cmほどの円形柱の痕跡を検出した。柱を固めた掘形埋土はよく締まっていた。柱穴1の埋土中から精製胎土Aの土師器坏の小片が出土したほかに出土遺物はなく、埋土の土質と色調から奈良時代の遺構と認定した。



第4図 平原地区A区 51号掘立柱建物跡 (1/50)

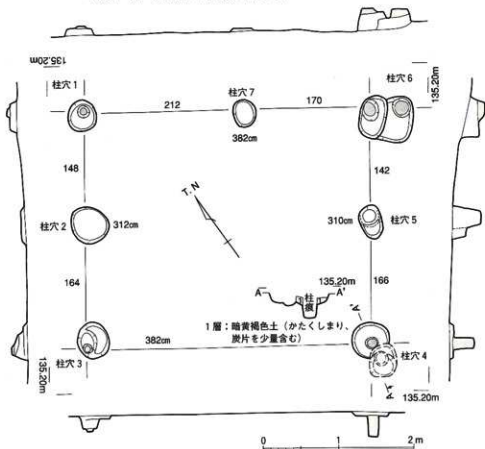
52号掘立柱建物跡 (第5図、写真1→図版70上)

梁間2間桁行2間と推定される掘立柱建物跡である。53建物と重複しているが直接の切合関係はない。東柱のない側柱建物で、東西長軸の方位角は114度である。柱間寸法は心心距離で東西長約382cm、南北長約310~312cmである。床面積は約11.9㎡で、側柱建物としては小型に分類される。柱間距離の1単位が191×156cmのタテナガ長方形となるⅡa類である。検出された7本の柱穴はすべて円形であり、4本の隅の柱穴がより深くかつ大きく掘削されているB類掘立柱建物である。その掘形は隅柱が径40~50cmほどで、ほかは径30cmほどである。四隅の柱穴4本から径10~20cmほどの円形柱の痕跡を検出したが、小さく不揃いである。柱穴埋土内からの出土遺物はまったくなく、埋土の色調と土質から奈良時代の遺構の可能性が高いと考えた。

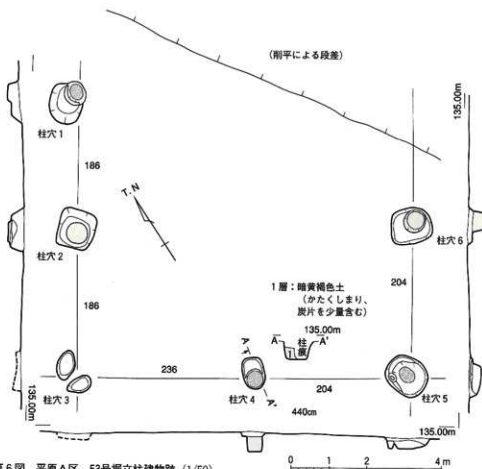
2 × 2 間
側柱建物
柱 穴



写真1 52・53号掘立柱建物跡 (北から)



第5図 平原A区 52号掘立柱建物跡 (1/50)



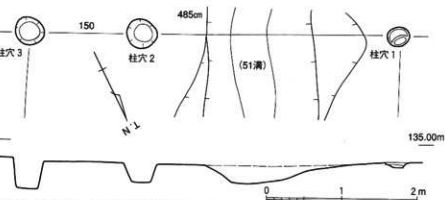
第6図 平原A区 53号独立柱建物跡 (1/50)

53号独立柱建物跡 (第6図、写真1→図版70上.)

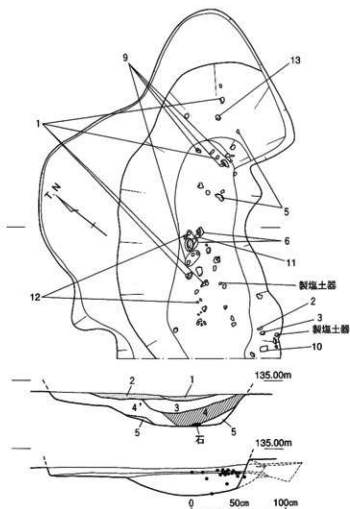
2×2+間側柱建物 北半が削平された梁間2間桁行2間以上の南北棟と推定される独立柱建物跡である。52建物と重複しているが直接の切合関係はない。東柱のない側柱建物で、南北長軸の方位角は33度である。柱間寸法は中心距離で南北長約372cm以上、東西長約440cmである。床面積は約13㎡以上で、寸法とも考えあわせると大型の側柱建物になる可能性が高い。柱間距離の1単位が186×220cmのヨコナガ長方形となるⅡb類である。検出された6本の柱穴のうち柱穴2・4・6は方形である。南の梁間の柱穴4がやや小さく、柱穴3が明確に検出できなかったほかは、柱穴の大きさ深さともよく揃っているA類独立柱建物である。その掘形は方形柱穴で一辺約50cm、円形柱穴は径50~60cmほどで、柱穴3のみが30×40cmほどである。柱穴3を除く柱穴から径20~30cmほどの円形柱の痕跡を検出した。柱穴2・3・5の埋土中から通常胎土の土師器の細片が出土したほかには遺物はなく、埋土の土質と色調から奈良時代の遺構と認定した。

54号独立柱建物跡 (第7図)

1+×3間 北側の大半が削平された梁間1間以上桁行3間の東西棟と推

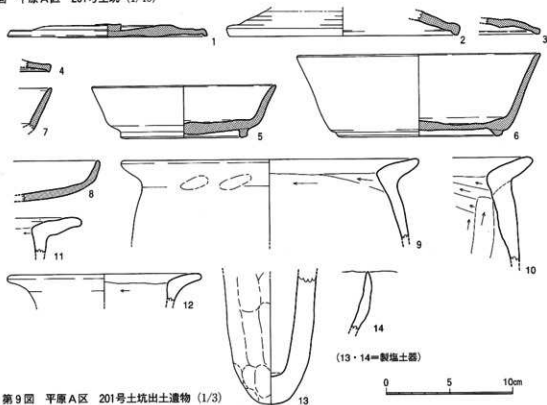


第7図 平原A区 54号独立柱建物跡 (1/50)



- 1 層：黒色土
 2 層以上は、再度上方から掘られたか、
 2 層：黒褐色軟質土）または、地表面に残った凹みへの自然堆積
 3 層：黄褐色土→人為的な腐葉層
 4 層：暗灰褐色土（4'層に比べて、焼土・炭片・土器片を多量に含む）
 4'層：暗灰褐色土（焼土・炭片・土器片を含む）
 5 層：暗黄褐色軟質土

第8図 平原A区 201号土坑 (1/40)



第9図 平原A区 201号土坑出土遺物 (1/3)

定される掘立柱建物跡である。近世の51溝により柱穴が一本失われたと考えられるが、柱穴の規模からみて東柱のない掘立柱建物であると推定される。東西軸の方位角は109度で、柱間寸法は心心距離で東西長約485cmである。寸法からみて小型の掘立柱建物に分類される。検出された3本の柱穴はすべて円形である。柱穴の大きさと深さが不揃いのC類掘立柱建物である。その掘形は径30-40cmほどで、柱の痕跡は検出できなかった。柱穴2などの埋土中から精製胎土Aの土器器環の小片や、須恵器甕の胴部小片が出土したほかに出土遺物はなく、埋土の土質と色調から奈良時代の遺構と認定した。

掘立柱建物

② 土坑

201号土坑 (第8・9図→図版70中上・87)

平原A地区で発見された南端が 大型土坑

未調査の不定形の大形土坑で、底面は平坦でなく断面半円形の皿状をなすE1類土坑である。51建物の西側に隣接する。その規模は検出面を基準に測って最大長370cm以上、幅210～280cmで、深さは最も深いところで検出面から約30cmである。上半は1910年代の水田造成時にかなり削平されていて、本来はさらに深かったものと考えられる。

一括廃棄

粗土は五層に別れ、4・4'層に焼土炭片と土器片を多量に含む一括遺物廃棄が認められる。とくに炭と焼土の多い4層は、東側から流れこみ、多量の土器片とともに51建物方向から投げ捨てられたような出土状態で検出された。土坑自体の掘形には整えられた形跡がないので、生活用の掘立柱建物跡つまり住居に付属する廃棄物処理土坑として掘られたものと推定される。

廃棄土坑

出土遺物は残留した縄文土器底部片のほか、須恵器の坏・甕・土師器の坏・甕の小片、円礫、小鉄片や焼土ブロックが出土した。

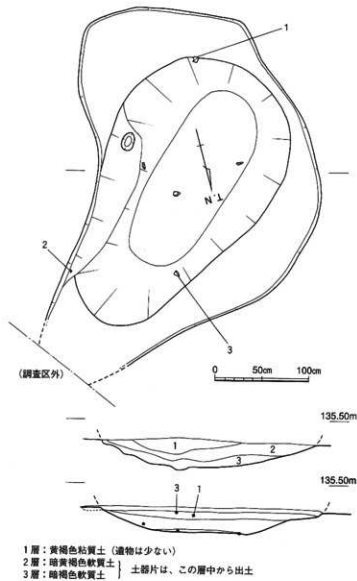
廃棄遺物

図示できるのは以下のとおり。1～7は須恵器で、1はつまみつき坏蓋、2～4は坏蓋の口縁部片。5～7は高台付きの坏身。1・5・6は完形に近く復元できた。8～14は土師器で、8は精製胎土Aの坏身口縁部片である。9～11は通常胎土の甕で、12は小型の鉢。13は碗弾形の六連式焼塩用製塩土器の下半。14は逆錐形の焼塩用製塩土器の破片。前者の六連式は2ないし3個体分の破片が出土している。以上の土器のうち須恵器すべてと8の精製胎土の土師器、13・14の製塩土器は、日田郡域外からの搬入品である。

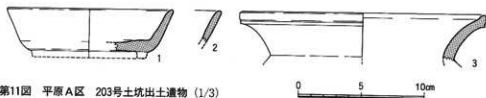
203号土坑 (第10・11図→図版70中下)

大型土坑

平原B区で発見された長円形の大形土坑で、底面は平坦でなく断面半円形の皿状をなすB1類土坑



第10図 平原A区 203号土坑 (1/40)



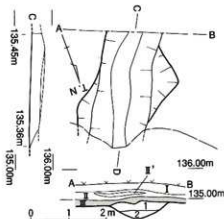
第11図 平原A区 203号土坑出土遺物 (1/3)

である。上下に2段に見えるが上段はあいまいである。下段の規模は検出面を基準に測って最大長310cm、幅190cmである。深さは最も深いところで検出面から約25cmである。上半は1910年代の水田造成時にかなり削平されていて、本来はさらに深かったものと考えられる。埋土は三層に別れ、どの層も比較的きれいな黄褐色土だが、遺物は少なく自然埋没の状態である。廃棄土坑に転用されないまま自然埋没した可能性が高く、土取り用に掘られた可能性もある。

自然埋没

内部からは安山岩の小石片のほかに須恵器杯・甕、通常胎土の土師器甕・精製胎土Aの土師器の小片が20点ほど出土したが、図示できるのは少ない。1～3はいずれも須恵器で、1と2が高台付きの杯身、3は甕の口縁部である。いずれも搬入品である。

出土遺物



- I層：環状作土（水田）
 II層：黄褐色土→水田少上げ時の底土
 III層：茶褐色土→水田造成時の客土の一部
 IV層：暗赤褐色土→水田化初期の底土
- 1層：黄褐色土（暗黄褐色のブロック含む）
 →水田造成時の整地層
 2層：暗茶褐色土（均質で、まざりものはない）
 →農土の流入土
 ※溝は、黄褐色の基盤土にはりこまれ、溝底は礫層に達する。

第12図 平原A区 51号溝 (1/100)

2-3 近世以降の遺構と遺物 (第2図)

① 溝

51号溝 (第12図→図版70下)

奈良時代の遺構である54建物を切って南北に延びる畝地境界溝である。3.1m分を検出した。北方向の延長は1910年代の水田造成で削平されている。残存部の幅は約150cmで、断面はU字形をなし、深さは最も深いところで検出面から約30cmほどである。底面の絶対高は南から北にいくほど低くなり、地形の傾斜と一致する。埋土は上下二層からなり、下層（2層）は畝の耕作土で、上層（1層）は近代の水田化時に埋め戻した整地土である。埋土の土質から近世以後の遺構と認めた。

畝地境界溝

1910年代に埋没

2-4 ビット (第2・13図)

A区ではビットは少なく、B区の203号土坑東側でまとまって検出されているが、遺構を構成しない。しかし奈良時代の遺物のみを出土したビットがあり、203号土坑東側に何らかの奈良時代の施設があった可能性は高い。A区ビット1から土師器の小片、ビット2からは近世陶器碗片が出土し、B区ではビット3から土師器杯片、ビット4からは1の須恵器杯蓋片が出土した。

奈良時代のビット



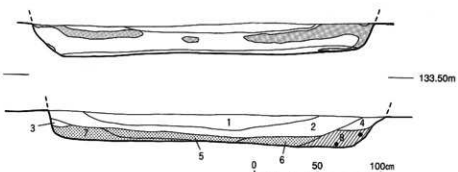
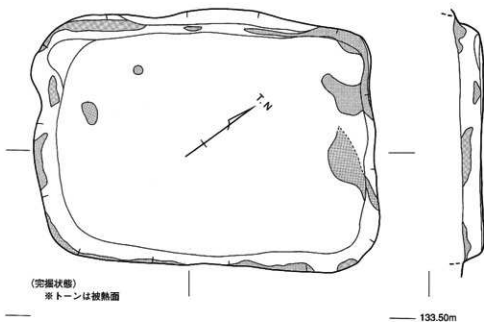
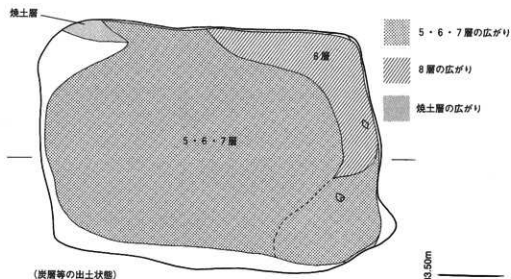
第13図 平原B区 ビット出土遺物 (1/3)

第3節 平原C・D区

3-1 概要 (第1図→図版68・71上)

第1図下の地形断面図からわかるように、平原C・D区は最高所のA区から次第に低くなる緩斜面に位置する。1910年代の耕地整理による削平が著しく、わずかに盛り土のおこなわれた水田面の西側のみが旧地形を保存していた。表土除去時の出土遺物もきわめて少なく、時期不明の土師器細片を10点ほど採集したにすぎない。遺構はD区で204号土坑を1基検出したのみであった。

水田化による削平

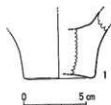


- 1層：暗褐色土（焼土片・炭片と少量の黄色土ブロックを含む）
 2層：暗黄褐色土（焼土・炭片を含む）→→道の土層中最も明るい→間層
 3層：暗褐色土（焼土・炭片を含む）
 4層：暗褐色土（炭と焼土小ブロックを多量に含む）
 5層：暗褐色土（*と*を*）
 6層：暗褐色土（*と*を*）
 7層：黒褐色土（炭・焼土ブロックを多量に含む）
 8層：黒灰色土（炭・焼土ブロックを多量に含み、特炭片は多く、1つ1つが大きい。）

第14図 平原D区 204号土坑 (1/30)

204号土坑 (第14・15図→図版71中)

平原D区において単独で発見された隅丸長方形の大型土坑で、底面は平坦になるC2類土坑である。規模は検出面を基準に測って東西長270cm、南北幅200cm、深さは最も深いところで検出面から20~25cmである。削平状況からみてさらに深かったものと考えられる。長軸の方位角は35度である。四周の側面とそれに連続する底面の一部が焼けて赤変しさらに硬化している。しかし底面全体に被熱のあとが広がるわけではない。そのかわり



第15図 平原D区
204号土坑
出土遺物 (1/3)

方形土坑

壁の被熱
炭の堆積

底面には炭化した木片や焼土のブロックが非常に多く(4~8層)、かつ敷かれたように堆積しており、おそらくそれは炉床の構造の一部であろう。その上には炭片や焼土片を多量に含むやわらかい土が充満していたが、何ら遺物をともなわなかった。何らかの炉として構築され、その使用後すみやかに埋没あるいは埋め戻されたものと推定される。

円隴1点と残留した弥生時代前期の壱底部片(第15図1)と焼土と炭片以外の遺物はまったく出土しなかった。野間L区の40号土坑とよく似ているので、奈良時代の可能性があるが、所属時期を推定するそれ以上の手がかりはなかった

時期不明

第4節 平原E・F・G区

4-1 概要 (第16・17図→図版71下・72上・74下)

この地区は上野台地の最西端にあたり、斜面にかけてを全面調査した。調査の第1の目的は、上野第1遺跡の奈良時代集落の西端を確認することにあつた。しかしE~F区では奈良時代の遺構はまったく検出されず、水田化による削平を考慮してもこの地区には遺構は存在しなかったものと考えられる。したがって平原地区の奈良時代建物群はB区ないしC区で終わっていると考えられる。そのかわり近世・近代の畝地境界溝を確認し、この台地の土地利用の在り方を示す遺構を検出した。

台地の肩

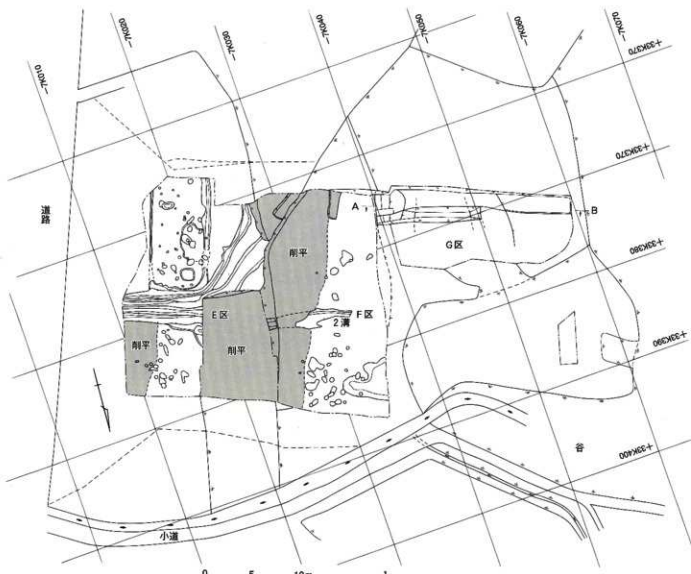
縄文時代 E区では3基の浅い不整形の土坑が発見され、縄文時代後晩期の土器片が若干出土した。

土坑

近世・近代 E・F区は台地が平坦な地形から斜面へと変換する場所にあたる。E区・F区それぞれ東半分は1910年代の水田化による削平で溝の下部を除いて、遺構は消失しているが、逆に西半分は埋め立てられているため遺構の保存状態は良好であった。

耕作土の充満した断面U字形の溝を5条検出した。溝はそれぞれ切りあっており、畝地の境界を拡張しながら作り直されていく状況が観察される。まず1・3・6号溝は同時期の掘削で、L字型の1・3溝に6溝を付設して長方形の区画を作り出し、北側に並行して斜面に直交する2号溝が作られている。この状態が最初の形態である(第1期)。次に1・3・6号溝が廃絶して4号溝が掘り直されており、長方形区画が不整形の区画に変化している(第2期)。次に5号溝が4号溝の外周を廻るように掘られ、この時点で4号溝は埋没し5号溝に交替する。この拡大の際には2号溝はすでに埋没しており、5号溝は2号溝の上に重なるように作られている(第3期)。このようにまず第1期の畝地境界溝の設定時には、台地の地形を考慮しながらかなり人為的に方形を意識して区画がなされているが、第2期ないし第3期になるにしたがって、耕作の状況等に応じて畝地の区画が不整形に変化する様子が認められる。第1期の時期は明確にすることはできないが、近世陶磁器の量が18世紀後半から増加し、19世紀のものが最も多い状況からみて第1期の畝地境界溝の設定時期はその頃であろうかと推定される。なお第3期の終わりつまり5号溝の廃絶時期は、溝が水田

溝の変遷



※網かけは原平のいちじるしい部分

第16図 原平 E・F・G区的位置 (1/400)

1層：環状土
2層：水田造成時の埋土 4層：黄色土
3層：黒装土

造成時の造成土によって一気に埋没している状態から1910年代であると押さえられる。

なおG区は現状では水田になっていたが、トレンチ調査の結果、耕地整理時に埋め立てたものであり、その底は谷になっていたので本調査はおこなわなかった。

採集遺物

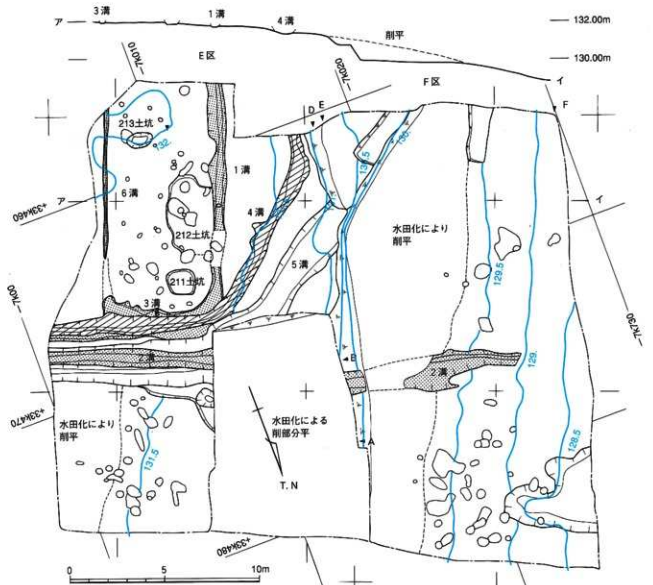
表面採集と試掘時の遺物 (第18～20図→図版88) 表面採集されたものは数点の縄文土器と土師器の細片を除くとすべて近世の陶磁器である。1～7は肥前産の染付で、1はいわゆるくらわんか碗、4は端反碗、5は小型の湯呑み碗である。18世紀後半から19世紀末までのものである。8は陶器土瓶である。

試掘トレンチ

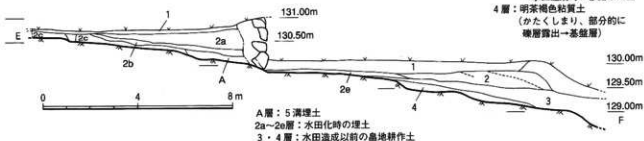
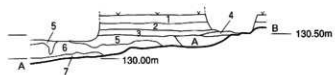
試掘時のトレンチ出土遺物も、小国産黒曜石の小片を除くと近世の陶磁器である。1は17世紀後半の福岡産の陶器皿である。2～6は肥前産で、2は18世紀の青磁碗、3は染付皿、4は18世紀後半の染付碗、5は18世紀後半から19世紀中ごろの白磁紅皿、6は1820～60年代の染付小型湯呑碗である。7は明治年間の染付碗で、8は明治年間以降の瀬戸美濃系と思われる染付小杯である。9は明治20年代以降の銅版転写の染付皿である。10は色絵碗、11は磁器碗、12は磁器瓶か。13は肥前産染付皿、14と15は磁器。16は白磁小杯、17と18は鉄軸の陶器である。19は18世紀後半以降の鉄軸の肥前唐津産陶器摺鉢である。

G区の遺物

G区は表土から近世の陶磁器が出土した。1～6はいずれも肥前産陶磁器で、1は18世紀後半代



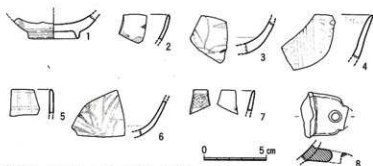
- 1層：現水田耕作土
- 2層：現水田床土
- 3層：暗褐色土（黄色土ブロックを含む）水田化時の（基盤層を削った土）盛土
- 4層：混砂礫黄褐色土（基盤層を削った土）盛土
- 5層：暗褐色土→水田化以前の農土
- 6層：暗褐色土（基盤の礫を多量に含む）→農作時の地山
- 7層：黄褐色砂礫土→基盤層の一部
- A層：暗褐色土→2溝の埋土



- A層：5溝埋土
- 2a~2e層：水田化時の埋土
- 3・4層：水田造成以前の農地耕作土

第17図 平原E・F区 遺構配置と層序 (1/200, 1/80)

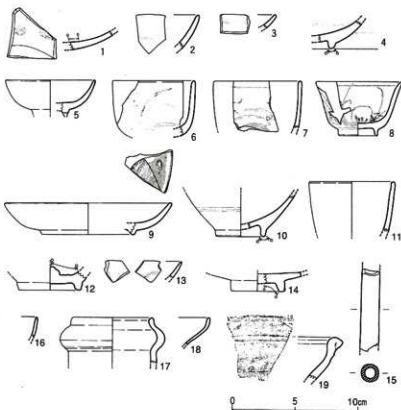
の染付碗である。2は18世紀後半から19世紀中ごろの白磁紅血である。3は幕末ごろの染付端反碗、4と5は幕末以降の染付湯呑碗である。6は幕末以降の陶器碗である。以上のうち3～6は志田焼の可能性が高い。7と8は瀬戸美濃産と推定される磁器で、9は肥前産磁器壺、10は陶器碗である。



第18図 平原E・F区 表土出土遺物 (1/3)

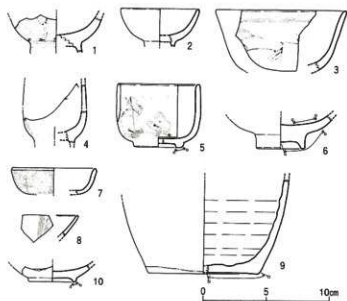
4-2 縄文時代の遺構と遺物 (第17図、写真2)

耕地整理時の削平が比較的少なかったE区の平坦面で、浅く不明瞭な形態の土坑が3基検出され、その周囲は浅いピットや凹みが多かった。いずれも埋土が基盤層とよくなじみ、正確に掘り上げるのは不可能であった。内部に縄文土器の細片のみが含まれていたことから縄文時代の遺構と認定した。縄文土器の細片と213号土坑の打製石斧片から、おそらく縄文時代後期ないし晩期に、上野台地の縁片に居を定めた集団がいたことを示していると考えられる。



第19図 平原E・F区 試掘トレンチ出土遺物 (1/3)

縄文後晩期



第20図 平原G区 出土遺物 (1/3)

① 土坑

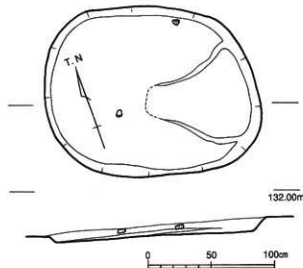
211号土坑 (第21図→図版72左中)

やや不整な長円形の土坑である。底面は平坦になりB1類土坑に分類される。規模は検出面を基準に測って最大長172cm、幅133cmで、深さは最も深いところで8cmである。上半は現代の水田造成時にかなり削平されていて、本来はさらに深かったものと考えられる。最初の検出作業の際にはわからなかったほど、埋土は地山に馴染んでいた。内部からは安山岩の剥片が1点出土したのみであるが、埋土の土質が212号土坑と酷似していたので縄文時代の遺構と推定した。用途は不明である。

不整長円形



写真2 縄文時代土坑群の配置 (南から)



第21図 平原E区 211号土坑 (1/30)

時にかなり削平されていて、本来はさらに深かったものと考えられる。最初の検出作業の際にはわからなかったほど埋土は地山に馴染んでいたが、底面の一部に被熱した部分があり、埋土中にも被熱した小礫や炭・焼土片を含み、何らかの炉として機能したと推定される。内部の1層中からは打製石斧の小破片が1点出土し、それよりも新しい遺物はまったく出土しなかったこと、埋土の土質が212号土坑と酷似していたので縄文時代の遺構と推定した。

4-3 近世以降の遺構と遺物 (第17図)

すでにふれたように、検出された近世遺構は畝地境界溝のみである。周辺に散在した不定形なピットはいずれも樹木の根や浅いもので、人工的な柱穴や構造物の存在を匂わせるものは発見できなかった。この部分は近世に畝地として開発され、少なくとも2度畝地の境界が移動し、その後1910年代に水田化されている。

212号土坑 (第22図→図版72下)

不定形の大型土坑で、底面が平坦なE2類土坑に分類される。規模は検出面を基準に測って最大長380cm、幅200cm以上で、深さは5~15cmである。上半は1910年代の水田造成時にかなり削平されていて、本来はさらに深かったものと考えられる。最初の検出作業の際にはわからなかったほど、埋土は地山に馴染んでいた。内部からは数点の縄文土器の細片と黒曜石片2点が出土し、それよりも新しい遺物はまったく出土しなかったため、縄文時代の遺構と認定した。ただし用途を考える手がかりはなく、土器が細片のため時期を細かく特定することはできなかった。

不定大型

出土遺物

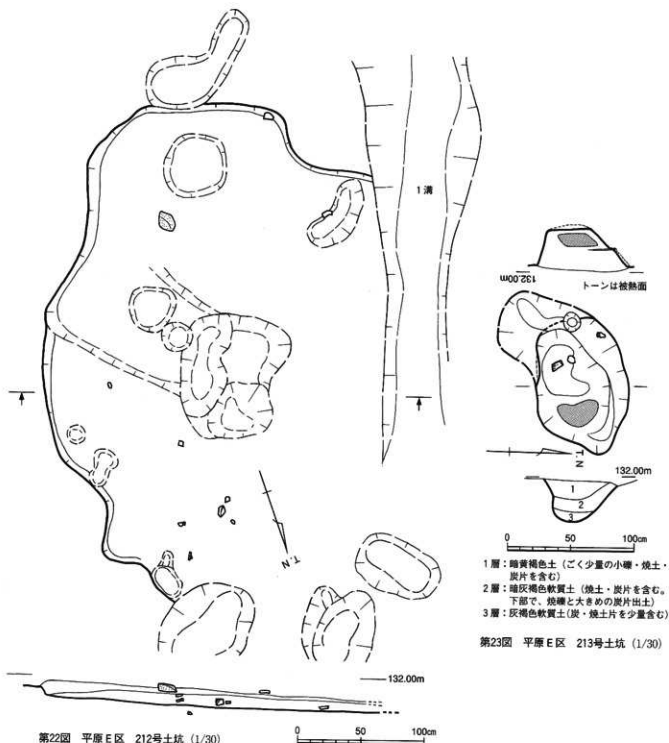
213号土坑 (第23図→図版72右中)

不定形の小型土坑である。底面は断面が皿状をなしE1類土坑に分類される。規模は検出面を基準に測って最大長143cm、幅74cmで、深さは最も深いところで33cmである。上半は1910年代の水田造成時にかなり削平されていて、本来はさらに深かったものと考えられる。最初の検出作業の際にはわからなかったほど埋土は地山に馴染んでいたが、底面の一部に被熱した部分があり、埋土中にも被熱した小礫や炭・焼土片を含み、何らかの炉として機能したと推定される。内部の1層中からは打製石斧の小破片が1点出土し、それよりも新しい遺物はまったく出土しなかったこと、埋土の土質が212号土坑と酷似していたので縄文時代の遺構と推定した。

不定小型

被熱痕

畝地境界溝



- 1層：暗黄褐色土（ごく少量の小礫・焼土・炭片を含む）
 2層：暗灰褐色軟質土（焼土・炭片を含む。下部で、焼礫と大きめの炭片出土）
 3層：灰褐色軟質土（炭・焼土片を少量含む）

第23図 平原E区 213号土坑 (1/30)

第22図 平原E区 212号土坑 (1/30)

① 溝

1・3・6号溝 (第24図→図版73上)

- 1 溝 1溝は南北に延びる島地境界溝である。13m分を検出した。北方向の延長は屈折して3溝となる。残存部の幅は約50~100cmで、断面は浅いU字形をなし、深さは最も深いところで検出面から約20cmほどである。底面の絶対高が南から北にいくほど低くなる点は、6溝と同じである。
- 3 溝 3溝は東西に延びる島地境界溝である。4溝にほとんど破壊されていたが、9m分を検出した。西方向の延長は屈折して1溝となる。残存部の幅は約150cmで、断面はU字形をなし、深さは最も深いところで検出面から約10cmほどである。底面の絶対高は東から西にいくほど低くなり、地形の傾斜と一致する。

6溝は南北に延びる畝地境界溝である。8m分を検出した。北方向の延長は3溝と直交して接続する。残存部の幅は約20~30cmで、断面はU字形をなし、深さは最も深いところで検出面から約10cmほどである。底面の絶対高が南から北にいくほど低くなる点は、1溝と同じである。

埋土は濃淡はあるものいずれも暗褐色のやわらかい土の単一層である。近代の水田造成でかなり削平されている。埋土中からは近世以後の瓦の小片が出土している。この3つの溝に囲まれた長

6 溝

長方形区画

2号溝 (第25・26図→図版73上・74上・88)

斜面を真っすぐ降りていくように東西に延びる畝地境界溝である。5溝にほとんど破壊されていたが、底部の25m分を検出した。西方向の延長は谷の急傾斜地に向かって消滅している。残存部の幅は約100~200cmで、断面はU字形をなし、深さは最も深いところで検出面から約60cmほどである。底面の絶対高は東から西にいくほど低くなり、地形の傾斜と一致する。埋土中から近世の陶磁器の破片が出土した。1は18世紀後半の肥前産染付皿で、底部は鈍の目凹形高台、見込みに松竹梅紋がある。

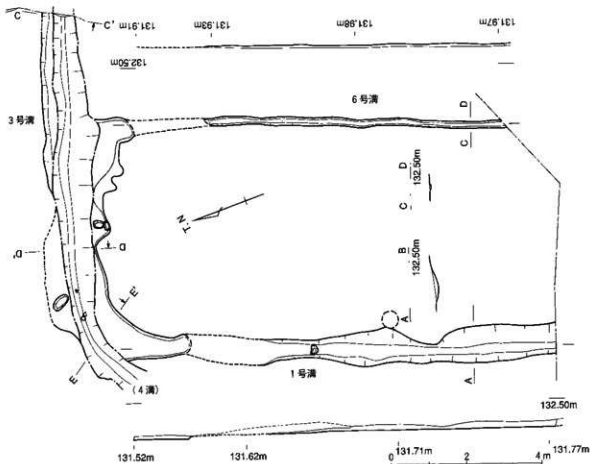
畝地境界溝

肥前染付

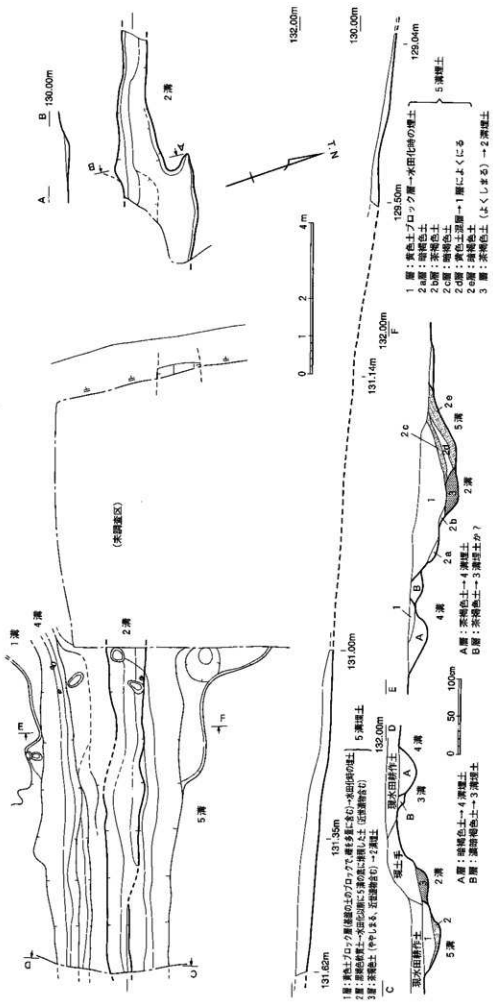
4号溝 (第27・28図→図版73・74上)

3溝を切って途中までは重複し、その後南に屈折する畝地境界溝である。5溝に一部を破壊されている。約21m分を検出した。残存部の幅は約70~120cmで、断面はU字形をなし、深さは最も深いところで検出面から約50cmほどである。底面の絶対高は東から西さらに南にいくほど低くなり、地形の傾斜と一致する。埋土は暗褐色の単一層で、埋土中から残留した縄文土器細片・黒曜石片や1の中世土師質土器環のほか、近世の陶磁器の破片が出土した。

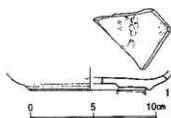
畝地境界溝



第24図 平原E区 1・3・6号溝と区画 (1/100)



第25回 平塚E区 2号溝 (1/100, 1/50)



第26図 平原E区
2号溝出土遺物 (1/3)

5号溝 (第29・30回→図版73中・下・74上・88)

2・4溝を切って途中までは重複し、その後南に屈折する
高地境界溝である。約19m分を検出した。残存部の幅は約15
0~250cmで、断面はU字形をなし、深さは最も深いところ
で検出面から約50cmほどである。底面の絶対高は東から西さ
らに南にいくほど低くなり、地形の傾斜と一致する。埋土は
上下二層からなり、下層(2層)は島の耕作上で、上層(1
層)は近代の水田化時に埋め戻した整地土である。埋土から
みて、1910年代まで機能していたことになる。埋土中から残
留した黒曜石片のほかに、小鉄片や近世の陶磁器の破片が出土した。1は幕末から明治前半の肥前
産白磁紅血で、形打ち成形によるタコ唐草紋がある。2と3は福岡産とみられる鉄軸の陶器皿であ
る。

高地境界溝

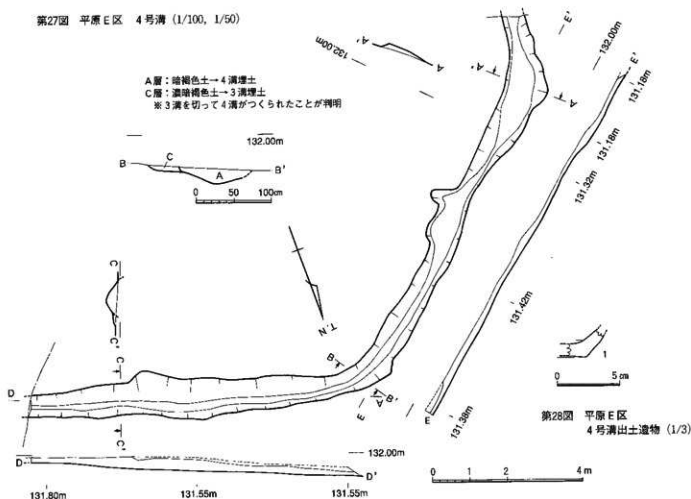
1910年代に
埋土

4-4 小結—近世島地区画の変遷—

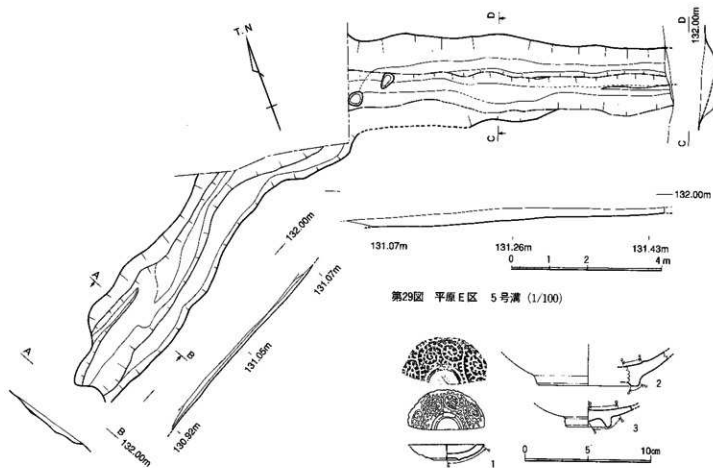
すでに概要の項で近世溝の変遷についてまとめておいたが、島地区画の変遷の観点から再度まと
めると、まず2溝によって南北の大区画に平坦面と斜面全体が分割され、南側の大区画内の平坦部
に1・3・6溝に囲まれた長方形の小区画耕地が作られ、斜面部の耕地と分割される。その際3溝
と2溝の間の空間は南大区画内の道に相当し、平坦面から斜面部の小区画耕地に向かうことにな
る。

島地区画の
変遷

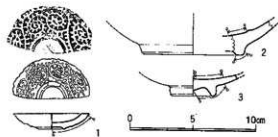
第27図 平原E区 4号溝 (1/100, 1/50)



第28図 平原E区
4号溝出土遺物 (1/3)



第29図 平原E区 5号溝 (1/100)



第30図 平原E区 5号溝出土遺物 (1/3)

- 第1期 なる。この状態が第1期の畠地形態で、18世紀後半には遅くとも成立していたと推定される。次の第2期は絶対年代不明であるが、2溝による南北大区画は維持されたまま、南大区画内の畠地が変化する。まず1・3・6溝による長方形の小区画耕地がなくなり、3溝の位置を踏襲しながら平坦部の畠地が斜面部に拡大するように4溝が掘られる。南大区画内は平坦部と斜面部の畠地に東西に二分されたことになるが、2溝と4溝の間は第1期間様道として残されている。次の第3期の改変の年代は不明だが、出土遺物から幕末前後と思われる、その際大きく改変されている。2溝と4溝が埋没し、平坦部の2溝を掘り直しながら南に大きく屈折する5溝が掘られている。南北の大区画の形態が大きく変化する。南大区画内の小区画がなくなっている。5溝は幅が2m前後と広く、溝自体が道の役割を果たしていたと推定され、第2期の南大区画の斜面部の畠地が、北大区画の畠地に合筆されたものと考えられる。そこではおそらく畠地の売買がおこなわれたものと推定される。そして最後に1910年代の耕地整理でこの場所は4枚の水田に整理されている。その際平坦部の5溝の南側肩が水田の境界となっていることから、5溝そのものは北大区画の所有者の土地とみなされていたことが推定される。

1910年代の
水田化

第7章 米田地区と上野第2遺跡A・B地区

第1節 調査概要 (第1図)

上野第1遺跡の西につづく、上野第1遺跡米田地区と上野第2遺跡A・B地区は、小さな谷と尾根とが交互に連続する地点である。上野第1遺跡との関連遺構の有無と、現在の水田がいつまでさかのぼるかを検討することを目的に調査を実施した。

米田地区は日田市大字上野字米田にあたり、上野第1遺跡の一部として調査したが、地形的には上野第1遺跡と上野第2遺跡をへだてる谷の底にあたる。谷を南にさかのぼると、八手状に広がる広い谷がひらけ、その谷の先端の二カ所に湧水点がある。調査区の中央を流れる水路は、その谷の水が流れ下るものである。水路の東西は現在水田として利用されている。

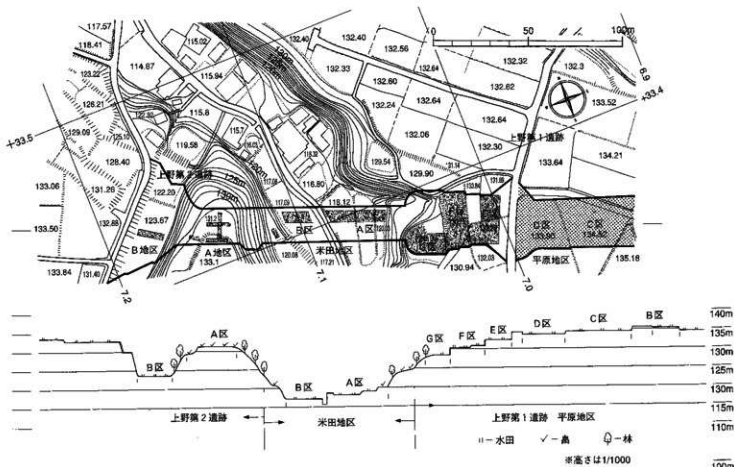
上野第2遺跡のうち、尾根の先端をA地区、小さな谷をB地区とした。A地区にはかつて建物が存在していたとの話があり、近世の居住遺跡を念頭において調査をおこなった。

調査の結果、上野第1遺跡米田地区と上野第2遺跡双方の谷水田は、いずれも1910～20年代の水田化によって開発されたもので、それ以前は一部畠地として利用されていたことが判明した。また上野第2遺跡A地区の尾根上の平坦面も、水田化による削平であることが判明した。

水田の時期

米田地区

尾根と谷



第1図 上野第1遺跡 米田地区と上野第2遺跡の調査区 (1/2,000)

第2節 米田地区 (第2図)

谷底地形 この地区は上野第1遺跡と上野第2遺跡の立地する台地を分かつ谷底の地形である。現状は谷の中央に小川が走りその両側に水田が開かれている。野間地区で湧水を利用した奈良時代水田が検出されているので、この地区での水田がいつ開発されたものかを検討するため、水田遺構の有無を調べる調査をおこなった。その結果現在の水田は1910年代の古地上の水田化時に引いた水路からの落ち水を利用して作られたもので、それ以前の谷の地形は小川に向かって落ちる緩斜面をなし、高地あるいは山林として利用されていたと推定された。なお現水田の下層には水田遺構または明確な遺構を残す高地等は発見できなかったため、本調査はおこなわず以下のような確認調査に止めた。

現水田の時期

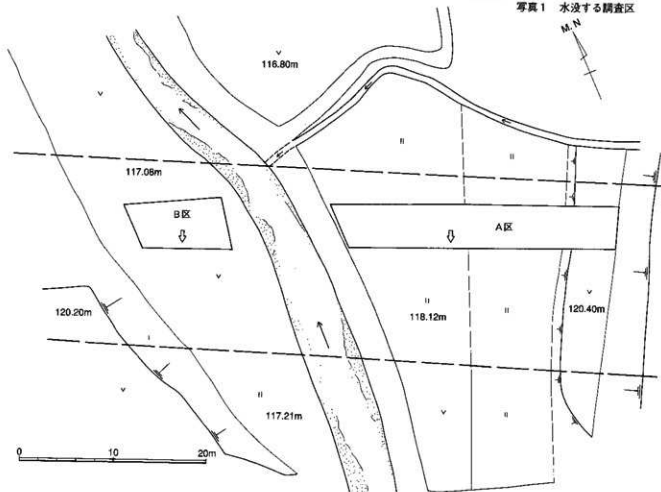
2-1 米田A区 (第2~4図、写真1→図版75・88)

米田A区は水路西側に設けた幅5m、長さ20m弱のトレンチで、谷底の水田の形成過程を見極めるために谷を横断する東西方向に設定した。同時に水田面より一段高い帯状の畝地にまで、トレンチを延ばし、畝地と水田の関係をみることにした(第2図)。

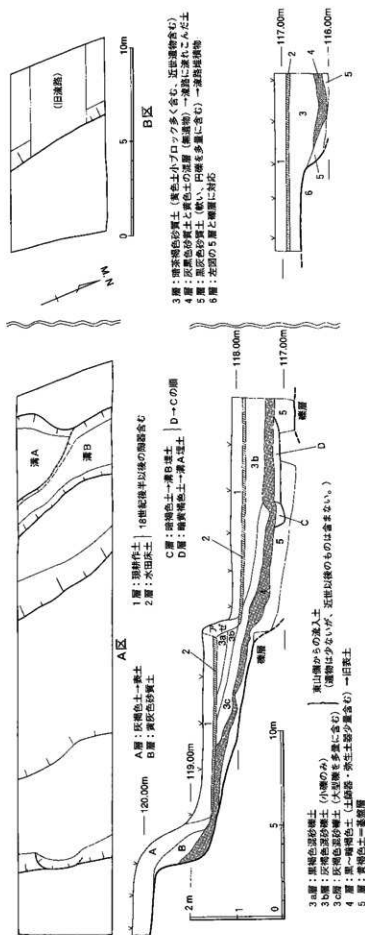
層序 現在の水田と高地の耕作上を取り除いたの



写真1 水没する調査区



第2図 米田地区 調査区配置図 (1/400)



第3図 米田地区の調査区 (1/200, 1/80)

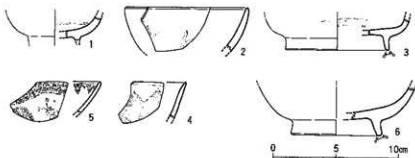
ち、さらに掘り下げ、基盤層(5層)を露出したのち、念のため基盤層まで掘り下げた。現水田の耕作土と床土である1・2層中から第4図に示したような18世紀後半以後の乗付磁器あるいは陶器の破片が出土した。その下の3層は大量の礫を含む流入土で、谷東側の台地斜面や谷の南側奥から流されて堆積したものと考えられる。しかし遺物は黒曜石の小片が2点含まれていたのみで、土壌自体は自然堆積層と考えてよい。その下の基盤層上には、淡い黒褐色の4層が覆っており、数点のハケメ痕の残る弥生土器あるいは土師器の小片が見つかった。おそらく3層の堆積が始まる以前の弥生・古墳時代までは、谷底は自然状態で、何ら人為的な開発を受けず、腐植土が堆積する状態であったと推定される。その後上流の開発などで3層がいつしか堆積し、谷が埋没しつつあった近世、遅くとも18世紀後半ごろに谷の緩斜面を3段に造成し最上段は畝に、水の引ける2段は水田開発されたものと考えられる。したがって当初可能性を考えた中世あるいは、それ以前の水田は存在しなかったと考えられる。なお4層の下からは溝が二条検出されたが、いずれも自然流路の跡と考えられる。

3層に残留した黒曜石片 出土遺物

谷の埋没

耕 地 化

が数点出土した以外は、すべて1・2層出土の近世陶磁器であった。1～5はいずれも肥前産で、1～3は18世紀後半の染付磁器碗。4は幕末から明治初期の染付端反碗。5は明治初年～10年代の型紙摺りの染付碗。6は福岡産とみられる鉄胎陶器碗。



第4図 米田A区 出土遺物 (1/3)

2-2 米田B区 (第2・3図)

米田B区は現水路の西側の水田中に、A区トレンチの延長線上に設けた調査区である。現水田は水路東側の水田より一段と低く、その下からA区3層に対応する流入土が堆積し、その下にすぐ自然礫層が露出した。さらにその礫層を掘り込んで幅5mを超すと推定される旧水路を検出した。しかし3層中より近世陶器の細片が出土したのみで、それから下の流路堆積土中はまったく無遺物であった。現水田が最も低い位置に作られている点からみると、現水路が現状に固定する以前の旧水路であろう。

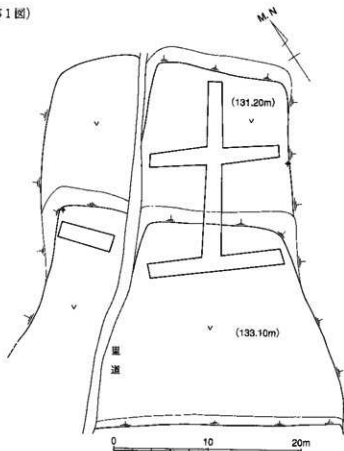
第3節 上野第2遺跡 (第1図)

A・B地区

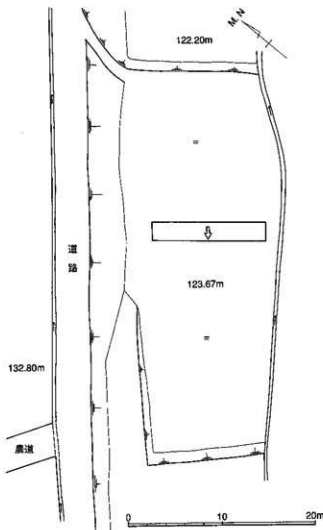
A地区は上野第2遺跡の所在する向原台地の東端にあたる尾根の上、B地区は台地上に入る谷の部分で、いずれも現状は水田になっていた。この現水田は1920年代に畠地から水田に耕地整理されたものである(註1)。この地区以西では従来弥生時代の遺物が採集されており、そのことを念頭において試掘調査をおこなった。その結果A地区ではすでに1920年代の水田造成時に削平されており遺構はまったく検出されなかった。B地区の谷部水田は上流に湧水もなく現在の水田はきわめて新しいもので、それ以前は水田としては使用されていないことが判明した。

C地区

なおB地区以西の上野第2遺



第5図 上野第2遺跡A地区 試掘坑配置図 (1/400)



第6図 上野第2道路B地区 調査区的位置 (1/400)

第6図 上野第2道路B地区 調査区的位置 (1/400)

現状では畠になっていたが、以前は水田として利用されていた尾根の先端部である。水田開発の時期あるいはそれ以前の土地利用の痕跡を明らかにするため、上下2段の現地地形に直交または横断するトレンチを設定して掘り下げた。しかしすべての場所で、耕作土を除去するとすぐに基盤層となり、まったく何らの遺構遺物も存在しなかった。現水田の開発は1920年代の耕地整理によるものであるから、その際尾根上をかなり削平したものと考えてよい。以上の調査から遺跡は残されていないと判断して、本調査はおこなわなかった。

跡C地区では、2000年度に本調査がおこなわれた。その結果弥生時代の小兒壺棺墓群とともに、奈良時代の掘立柱建物跡が数棟発見され、上野第1遺跡と同時期の集落遺跡が、隣接する台地上にも存在したことが判明した(註2)。

《註および参考文献》

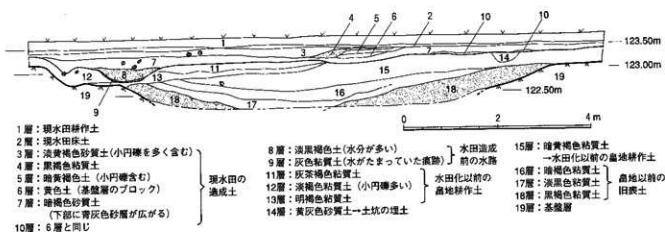
註1 『日田市史』602頁第36表によれば、1925(大正14)年設立の上野原耕地整理組合(組合長安心院義造、組合員29名)によって、1925年に工事着手、1932(昭和7)年完了で、水田面積は約13町4反であった。

註2 大分県教育委員会調査。調査担当松本康弘氏が。

3-1 A地区(第5図→図版76上・88)

現状では畠になっていたが、以前は水田として利用されていた尾根の先端部である。水田開発の時期あるいはそれ以前の土地利用の痕跡を明らかにするため、上下2段の現地地形に直交または横断するトレンチを設定して掘り下げた。しかしすべての場所で、耕作土を除去するとすぐに基盤層となり、まったく何らの遺構遺物も存在しなかった。現水田の開発は1920年代の耕地整理によるものであるから、その際尾根上をかなり削平したものと考えてよい。以上の調査から遺跡は残されていないと判断して、本調査はおこなわなかった。

尾根の先端

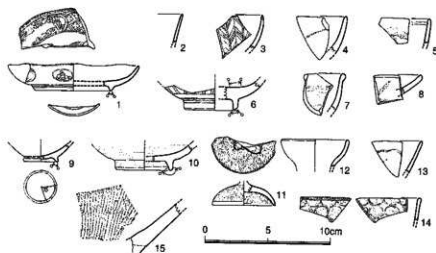


第7図 上野第2道路B地区 調査区南壁断面層序 (1/80)

3-2 B地区
(第1・6~8図
→図版76中・下)

谷地形

尾根のA地区の西に南方向に通っていく谷であるが、両側の斜面は緩いといってもよいほど急である(第1図)。その谷の水田面の中央部に、谷を横断する位置に、1本のト



第8図 上野第2遺跡B地区 出土遺物(1/3)

レンチをいれた(第6図)。水田は現水田1枚のみで、その下には水田造成のために掘めた整地層(3~10層)があり、それを取り除くと、浅い谷状の1920年代の耕地整理直前の地形があらわれた。浅い谷の底には幅1mほどの水路がある。さらにその水路が流れた地山そのものが、長期間利用されたと考えられる畠の耕作土壌であった(11~15層)。第8図に示す出土遺物はすべてこの畠地耕作土中から出土した。遺物の時期は17世紀から19世紀の近世から明治時代のものである。その下は畠地利用以前の谷底に堆積した自然堆積層で、遺物をまったく含まないが黒色化していた。

出土遺物

畠地耕作土上から出土した1~8の遺物はいずれも肥前産で、1は17世紀後半の染付皿。2は1690年代から18世紀前半の白磁小杯。3~8は18世紀後半の染付碗と皿。9は19世紀前半~中ごろの瀬戸美濃系染付小杯。10は明治前半のクロム青磁の碗。11は関西系とみられる全面鉄釉の磁器蓋。12は肥前産とみられる磁器瓶。13は瀬戸美濃系とみられる染付小杯。14は染付。15は陶器損鉢である。

以上の調査結果から、上野第2遺跡B地区の谷地の開発は、近世の畠地化に始まると考えてよく、それ以前は自然状態における樹木の利用などが考えられるものの、地形に手を加えるような開発はまったくおこなわれていなかったと推定される。そして1920年代に水田造成をおこなって今日に至っているのである。この所見から人工的な遺構は希薄であると判断して、本調査はおこなわなかった。

第4節 小結

第7章としてまとめた上野第1遺跡米田地区と上野第2遺跡A・B地区は、奈良時代の集落遺跡が広がる上野第1遺跡東原・野間・平原地区の西側にあたり、現状では谷と尾根の連続であるが、いずれも水田として利用されていた。現水田が1910~20年代の耕地整理による開発によって造成されたことはすでに明らかであったが、上野第1遺跡野間地区の谷部の水田が奈良時代に遡ることが判明したため、現水田の下に古い水田遺構が存在する可能性を検討する必要が生じたのである。ところが野間地区の谷水田とは異なり、いずれの水田も20世紀前半の開発によって初めて水田化したもので、それ以前は一部畠地として利用されていた場所があるものの、ほとんどは未開拓の自然状態で山林原野として利用されていたと考えられる。このことはかえって上野第1遺跡野間地区の谷部水田が奈良時代に遡る古さを際立たせる結果となった。

開発のしなさ

20世紀の水田

第8章 自然科学的分析

プラント・オパール分析から見た上野第1遺跡野間地区の水田開発

大分短期大学助教授

佐々木 章

はじめに

上野第1遺跡は台地上に営まれている。一帯は水田化されているが、大正時代までは畑地帯であった。西側にある石井地区は、古代の石井駅の比定地である。野間地区の南方に湧水点がありそこから北西に延びる浅い谷地形が認められる。トレンチ断面で水田土層と考えられる堆積が観察された。この場所は、「しょうやのた」と呼ばれ、古くから水田があったと伝えられている。この谷地形を挟む東西で、古代の掘立柱建物、竈穴住居、土坑が検出され、湧水点付近の水場遺構と、そこに向かう道状遺構も検出された。掘立柱建物には、総柱で倉庫と考えられるものや、周溝をもつものもある。遺物では転用硯や「豊馬豊馬」と読める刻書石製品が出土している。これらの建物は8世紀前葉にあらわれ、中葉ころまで数度建て替えられたのち姿を消している。なお、集落建設直前の土坑が検出されており、そのうち2基は炭焼坑、1基は粘土探掘坑と推定されている。

水田状土層を大きく分けると、現在の耕作土（Ⅰ層）と犁床層（Ⅱ層）の下に近世の遺物を含む暗褐色土（Ⅲ層）がある。その下の黄褐色土（Ⅳ層）は無遺物に近く、中世の遺物が含まれる。しかしⅣ層の上部には近世の遺物、最下部には古代の遺物も混じる。その下に古代の遺物の小片を含む黒褐色土（Ⅴ層）が認められる。トレンチの東部では直下に地山があらわれるが、西部には古代のやや大型の遺物を含む層（Ⅵ・Ⅶ層）がある。この層は西にやや厚く、西端近くでは円礫を含み流水があったことがうかがえる。さらに西端は、同じ時代の遺物と共に炭化物を含む斜面驚堆積層を覆っている。驚堆積層中に炭化物が含まれることは、炭焼坑の検出との関わりで興味深い。

今回、これが水田土層であることを確認するとともに、これが水田である場合は開発史を明らかにする目的で、プラント・オパール分析をおこなったので報告する。

分析方法

トレンチの西部（A地点）と中央部（B地点）では水田状堆積層の全土層を、両地点の中間部（C地点）と東部（D地点）では、古代の水田と考えられるⅤ層を採取した。試料採取位置を後の発掘調査で明らかになったⅤ層水田状遺構の平面図に重ねて示す（図1）。採集にあたっては、各層をさらに細分し、細分した層ごとに試料を採取した。明確に細分できない場合は層を上下に分けて採取

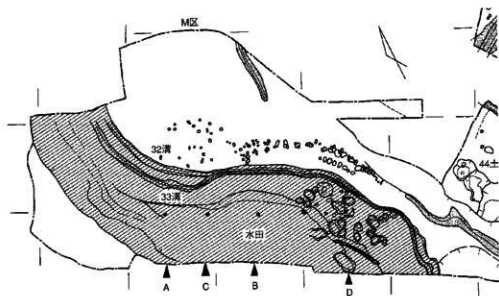


図1 試料採取位置

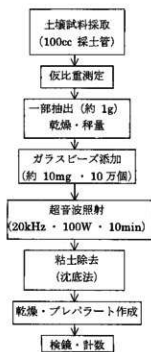


図2 プラント・オパール
定量分析手順

した場合もある。プラント・オパールの大きさは $50\mu\text{m}$ と微小なため、土壌試料採取にあたっては試料が汚染されないように細心の注意が必要である。試料は採土管につめたまま研究室に持ち帰り図2に示す方法によって定量分析をおこなった。

分析結果および考察

土壌試料のプラント・オパール分析結果を給源植物中の珪化機動細胞密度(表1)によって植物体重に換算して図3~6に示す。単位は広さ 10a ($1,000\text{m}^2$)深さ 1cm の土壌中に埋没した植物の地上部乾物量(t)である。いずれもV層以上でイネ機動細胞プラント・オパールが多量に検出さ

表1 植物体中の珪化機動細胞密度

プラント・オパール 分析分類名	代表植物	植物体中密度 (10^4 個/g)	
イネ	イネ	<i>Oriza sativa</i>	3.40
ヨシ属	ヨシ	<i>Phragmites communis</i>	1.44
タケ亜科	ゴキダケ	<i>Pleioloblastus Chino</i> var. <i>virides f. pumilis</i>	20.83
ウシクサ族	ススキ	<i>Miscanthus sinensis</i>	2.79

れている。B地点では、ごく少量だがVI層やVII層でも検出されている。各地で発掘されている水田遺構土壌のプラント・オパール分析結果から、イネ初量に換算して $1\text{t}/10\text{a}/\text{cm}$ を超える場合は水田遺構の可能性が高いことを経験している。B地点のVI層やVII層は量が少なく、水田化されていたとは考えにくい。それに対しA地点のV層中部には、 $0.7\text{t}/10\text{a}/\text{cm}$ を示す層があり水田作土層の可能性が高い。断面ではV層の表面に明らかに畦畔と思われる高まりは観察できないが、D地点以東まではほぼ水平に堆積している。このことは、水田化していないと考えられるVI層・VII層には比較的に大型の遺物が含まれるのに対して、小片になった遺物が多いことも矛盾しない。8世紀前

後に建物が作られた後、遺物が残された谷地形の部分に水田が形成されたことが考えられる。B地点ではIV層下部に $1.1\text{t}/10\text{a}/\text{cm}$ を示す層がある。A地点でも比較的に下部のイネ密度が高いことと対応する。多少の断続はあるかもしれないが、建物が放棄された後も水田が作り続けられていたであろう。またA地点ではIV層上部からIII

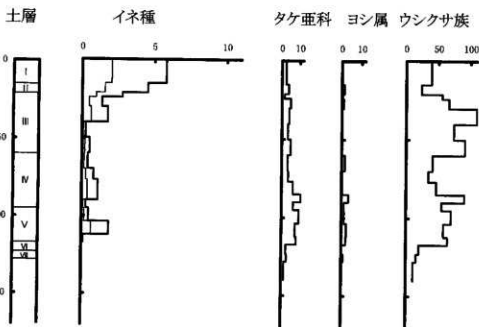


図3 A地点のプラント・オパール密度から推定した植物量 ($\text{t}/10\text{a}/\text{cm}$)

層下部にかけて、B地点ではIV層上部に最もイネ密度が低くなり、それ以上では、上層ほど密度が高い傾向がうかがえる。

機動細胞はイネ科植物の葉身に含まれており、珪質化したイネ機動細胞が化石として残ったものがプラント・オパールである。イネの収穫を推測りでおこない、葉身を含めたイナワラが圃場に残される場合は、機動細胞もそのまま残って

イネ機動細胞プラント・オパールとなる。しかし、株刈で収穫しておれば、主要な葉身はイナワラとして圃場外に持ち出すので、残される機動細胞は極端に少なくなり、分析結果も一桁小さくなる。IV層で上層の方が少ないのはこのような理由も考えられる。

埋没水田土層が使用されていた期間中の総収量について検討してみよう。

プラント・オパール分析結果を植物体重に換算して示した図2～7の横軸に土層厚を乗せると、その層に含まれる植物体重を推定することができる。このようにして求めた推定総初収量を表2に示す。各層ごとに見るとA、

B両地点に食い違ひが見られるが、全層にわたる合計は71 t / 10 aと等しい。これは、A、B地点とも同じような使われ方をしており、洪水による堆積の度に新しい作土層を形成しながら上層へ上層へと耕作されたため、分層ごとに使われた年代が異なるが、合計は同じになったと見るのが適当だろう。また洪水による作土の流亡があった場合は、たとえ近接

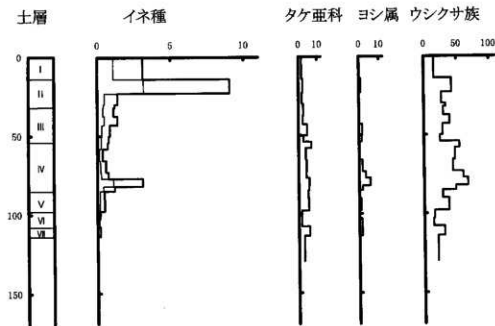


図4 B地点のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t/10 a/cm)

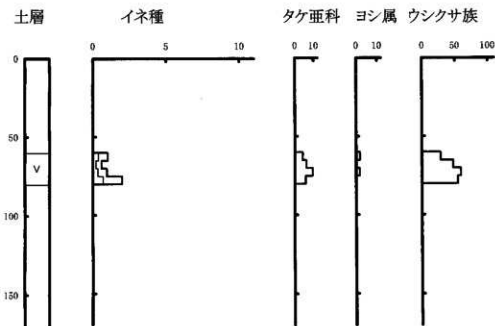


図5 C地点のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t/10 a/cm)

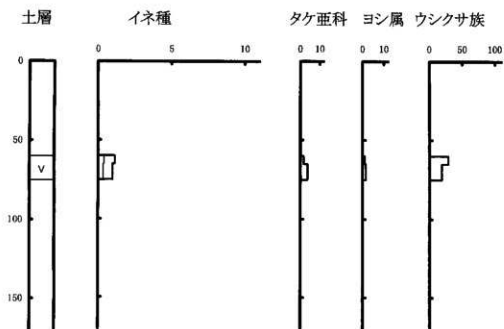


図6 D地点のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t/10a/cm)

はじめにIV層が使われていた期間を考える必要がある。IV層の遺物は少ないが上部に近世の遺物が、最下位に古代の遺物が混じっている。詳細は不明だが、仮に9世紀から16世紀に及ぶ600年間連続して使われたとすると、年間収量は17kg/10aと計算できる。断面での観察や分析結果からは、長期の休閑期間があったとは考えにくいので、この時期の途中では株刈に移行していたとしておきたい。全部が株刈であったなら年間収量はその10倍以上おそらく200~300kg/10aと計算される。やや高すぎる感があるので、一部には穂刈や高刈が残っていたことも考えられる。つぎにV層について同様に計算してみよう。IV層最下部には古代が混じるのでV層の下限を9世紀と考えたい。水田が作られたのを8世紀前葉としても、使用期間は100年余りであろう。150年とすると年間収量は40kg/10aと計算できる。ほは、建築物が存在した期間に相当する50年間とすると、年間収量は120kg/10aになる。初春歩合を75%として玄米になおすと90kg/10aと計算できる。

奈良時代から場合によって中世にかけて、穂刈に関連すると思われる「束」という単位が使われており、「頭稲」が「穀稲」と区別して用いられ、「春米」の語も見える。これらから、穂刈がおこなわれていた可能性が高いと考えられている。特に、早稲や晩生などの品種を区別する必要のある種初の出芽や、穀稲を入れる倉のドに敷くために後世まで頭納があったといわれる。この場合、収穫道具の主力は鉄製の鎌になっていたと考えるが、

小型の鉄鎌は穂首刈にも使用できる。

プラント・オパール分析結果では、いずれの層もウシクサ族が比較的が多い。ウシクサ族には、スキ・チガヤなど路肩や堤防、草原などに普通のイネ科植物が含まれる。古代の石井駅の具体的な場所は、まだよくわかっていない。周囲に多量のウシクサ族植物が生育していた上野第1遺跡は、水場もあるので馬を飼育するにも便利であったと予想できる。駅に関連する施設であった可能性についても検討する必要がある。

表2 各層で生産されたイネ初推定値

層	t/10a				
	A地点	B地点	C地点	D地点	平均
I	30.4	15.3			22.9
II	9.5	32.8			21.2
III	14.7	8.0			11.4
IV	9.0	11.3			10.1
V	7.2	2.2	7.9	5.5	5.7
VI	0.0	0.5			0.2
VII	0.0	0.4			0.2
合計	70.9	70.5			71.7

第9章 調査の成果と課題

第1節 奈良時代以前

1-1 旧石器時代

調査中に各所で旧石器時代に属するとみられる石器を採集した。しかし野間地区に基盤層調査区を設定して包含層の有無を調べたが、包含層は存在せず基盤層の4・5層は中位段丘1面の基盤そのものであった。おそらく旧石器時代の生活面は、その後の侵食や耕作によって消失したものと推定される。

採集された石器の種類は、ナイフ形石器、角錐状石器、台形石器、剃片尖頭器、形器と石核で、時期の異なるものが含まれ破損したものも多い。石材も腰岳産黒曜石と西九州産ヌカイト製が主で、1点ずつだが那珂型と小国産黒曜石が含まれていた。全体として必ずしも多いものではない。

おそらく中位段丘2面の地形の基本はすでに旧石器時代にできあがっていたと考えられるので、この付近まで狩猟採集の対象地になっていたものと見られる。

1-2 縄文時代

東京C区、野間J区、平原E区で不明瞭な土坑が検出され、その周辺に少量の土器片と石器が発見されている。特に野間地区では遺構検出面上の旧島地土中に、後晩期の土器片や石器が散見され、形態の明瞭な39号土坑が唯一発見されている。

① 遺構と縄文土器

遺構としては東京C区11号土坑、野間J区39号土坑、平原E区211・212・213号土坑が発見された。いずれもその性格を考える手がかりを得るほどの保存状態ではなく、わずかに39号土坑が円形で比較的深く底面が平坦であるので貯蔵穴の可能性を指摘できること、213号土坑が炉施設ではないかとみられる程度である。別に基盤層調査区で包含層の探索を試みたが、なにも残されていない。

出土した土器は上記の土坑出土遺物を除いて、すべて奈良時代以後の遺構に残留したものか、表土中より出土したものである。土器の種類としては深鉢の破片が大多数で、東京A区2号土坑残留の深鉢底部、東京C区2号竪穴残留深鉢底部片、東京B区3号溝残留の深鉢底部、東京C区ピット111出土の深鉢底部、野間J区39号土坑の深鉢など、時期の判別するものは晩期前半のものが多い。浅鉢は野間M区で同じ時期のものが採集されているにすぎない。縄文時代の晩期ごろに上野第1遺跡の野間地区を中心に、土器の Usage がぐりかえされたようである。おそらく湧水の存在と無関係ではないと考えられる。

② 石器

ほとんどが採集品であるが、縄文早期と後晩期のものが多い。野間I区9号竪穴残留の縄文早期チャート製鉄形鏃は完形の大型品で、野間I区11号竪穴残留の縄文早期の腰岳産黒曜石製鉄形鏃は返りの片方を欠いている。同時代の押形文土器は1点も採集されていないので、おそらく狩猟の際に立ち寄ったものと思われる。ほかに石鏃は東京C区7号溝残留の腰岳産黒曜石製、野間G・H区採集の姫島産黒曜石製、野間G区ピット19残留の腰岳産黒曜石製、野間I・L・J区採集西九州産ヌカイト製、野間I区30号掘立柱建物に残留した姫島産黒曜石製、野間J区45上坑残留の金山産ヌカイト製などがあり、完形の場合もあれば返りを欠いたものもあり、石材の産地も多形である。

扁平打製石斧は東京A区採集と野間G・H区採集、野間基盤層②グリッドから安山岩製のものが発見され、いずれも先端部を欠いており、実際に使われて破損したものと考えられる。ほかに地元

で産出しな結晶片岩製のものが2点野間M区で出土しており、ともに完形で一方は分銅形であった。金山産サマカイト製で完形の石匙が野間M区ピット4から、安山岩製の凹石が道路状遺構の土坑21に残留し、野間地区基盤層②グリッドからは同じく凹石と叩き石が出土している。

石 材 打製石器の石材は黒曜石が多く、腰岳産・小国産・姫島産があり、それにサマカイトが加わる。石斧と凹石や叩き石には地元で産出する安山岩製がほとんどであるが、扁平打製石斧の一部に結晶片岩が使われている。おそらく近隣では甘木朝倉など筑前地方で産出されており、外部からもたらされたものであろう。

③ まとめ

縄文早期から後期にかけては、旧石器時代に引きつづき、狩猟採集の途中に立ち寄る場所として利用されていたことが、湧水の存在から考えられる。しかし縄文晩期になると、土器を持ち込み土坑を掘るなどの一定の生活のあとを見ることができ、扁平打製石斧に代表される原始的な耕作具が持ち込まれるのもこの時代と見たほうがよい。湧水の周囲がそのような生活に有利な環境を提供したものと推定される。明らかにそれ以前とは異なる生活が縄文晩期前半に上野第1遺跡でおこなわれたと考えられる。

1-3 弥生時代

調査された範囲のなかでは、弥生時代の遺構は発見されなかった。しかし上野台地の北辺とくに現在の**近くに集落**の上野集落周辺では、弥生時代の上器をかなりの頻度で採集でき、また耕作中に出土するほか、上野第1遺跡の西に隣接する上野第2遺跡では、弥生時代前期から中期の小児壺棺群が発見されており、この台地上の一角に弥生時代の集落が存在していたことは間違いない(註)。

前中期の壺 壺と磨製石斧 遺物は新しい遺構に残留したが、表面採集されたものである。土器は野間G区19土坑残留の弥生時代中期の器台片を除いて壺の破片がほとんどで、底部片が多く、その時期も弥生時代前期末から中期前半のものが多い。東原A区2号溝残留の壺底部、野間I区8号竪穴建物残留の壺底部片、野間J区15号溝残留の壺底部片、野間M区上層残留の壺底部、野間M区水田下層出土の中期壺、水田上層出土の壺底部、平原D区204土坑残留の壺底部などである。いずれも被熱した実用品であるので、おそらく湧水点の水を利用するために集団の一部がこの付近を訪れたものと推定される。

磨製石斧 石斧はほとんど発見されていないが、磨製石斧の破片が採集されることがある。野間E・F区で緑色結晶片岩製給刃石斧の先端部が、道路状遺構の土坑24に残留した結晶片岩製で先端部が破損したものである。また採集された石鏝の中には弥生時代のもが含まれている可能性がある。

おそらく上野台地西北部に居住区を設けた弥生集団の水汲み場のひとつであった可能性があり、そのためこの周辺を訪れる機会が多く、その際壺をたずさえてきたのではなかろうか。同時にその周辺はなお森林であった可能性が高く、石斧は木材の伐採などに使われたものと考えられる。

《註および参考文献》

註 大分県教育委員会2000年9月から12月にかけて調査。奈良時代の掘立柱建物跡等とともに、弥生時代の墓地进行している。

1-4 古墳時代

野間I区20号溝に残留した古墳前期初めの壺底部以外には出土遺物はまったくなく、わずかに小児壺。小児壺 小児土器棺第1基が東原B区で知られたのみである。東南に頭を向ける小児墓で、まったく単独に埋葬されている。現在の**単独埋葬**の上野集落付近に古墳時代初頭まで続く集落が存在した可能性があるが、それにしては居住区からは大きく離れている。集団墓地の一端とも考えがたいので、単独埋葬と考えざ

るをえない。このような埋葬例があるということを確認しておきたい。

第2節 奈良時代

奈良時代は上野第1遺跡発見の遺構の大半と遺物のほとんどを占める。ここでは遺構と遺物を個別にまとめ、それらの相互関係を遺構と遺物の両側面から明らかにした上で、奈良時代の遺構の編年を行い、最後に集落の性格にふれておきたい。

2-1 遺構各説

掘立柱建物、堅穴建物、土坑、道と水場の順で検討し、柱穴列は掘立柱建物のなかでふれる。ピットについての検討は割愛する。

① 掘立柱建物跡 (第1表)

今回の調査で発見された33様の掘立柱建物を対象に、いくつかの角度から分類をおこない、掘立柱建物の性格付けの材料としたい。なお柱穴掘形の平面形では、27号掘立柱建物のみが方形柱穴で構成され、13・14・53号掘立柱建物に一部方形柱穴が認められるが、そのほかはすべて円形柱穴であった。

柱穴構造 (第1図)

柱穴の平面形状だけでなく、規模と柱穴掘形の深さに注目して分類をおこなった(註1)。その結果次のABCの3分類が可能であった。なお掘立柱建物の四隅のコーナーにあたる柱穴を「隅柱」と表記する。

A類は柱穴掘形の平面規模が同一で、掘形底面の高さが同じに描えられている掘立柱建物跡である。多くの場合梁間の柱穴は規模が小さく浅めに掘られている。柱裏は明確で柱の太さは掘形の規模に関係なく同じ場合が多い。掘形埋土には黄色土をいれて突き固めたと考えられる水平堆積が認められる。方形柱穴をもつ例はすべてA類であった。

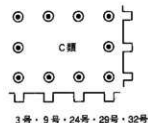
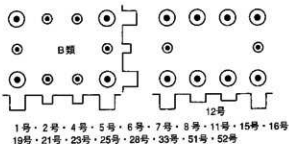
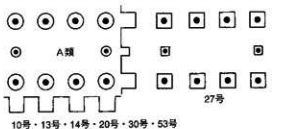


図1 柱穴構造による分類

柱穴の形

深さに注目

A 類

B 類

る。多くの場合梁間の柱穴は規模が小さく浅めに掘られている。柱裏は明確で柱の太さは掘形の規模に関係なく同じ場合が多い。掘形埋土には黄色土をいれて突き固めたと考えられる水平堆積が認められる。方形柱穴をもつ例はすべてA類であった。

この構造は2×3間およびそれ以上の規模の掘立柱建物で観察され、床面積でいえば20㎡以上の中型・大型・特大型の掘立柱建物で採用されている(第4図)。上野第1遺跡唯一の総柱の2×3間掘立柱建物である26号掘立柱建物もA類にあたる可能性が高いが、調査が不十分で除外している。

B類は4本の隅柱の柱穴掘形の平面規模がほかの柱穴より大きく、かつ深く掘られている掘立柱建物である。平面規模は変わらないが、四隅の柱穴が深く掘られた12号掘立柱建物は、A類とB類の双方の特徴を備えているが、隅柱のみを深く掘る点を優先してB類に含める。A類と同じく柱裏は

明瞭で、柱の太さは掘形の規模に関係なく同じ場合が多い。掘形掘土には黄色土をいれて突き固めたと考えられる水平堆積がしばしば観察される点も、A類と同様である。B類の掘立柱建物はすべて円形柱穴をもつ。なお東原C区の1号柱穴列も構造的にB類にあたる。

この構造は1×2間・2×3間および3×4間の規模の側柱建物と、2×2間の総柱の掘立柱建物で観察され、床面積でいえば10~20㎡の小型がほとんどB類で、中型・大型の掘立柱建物のなかにも存在する(第4図)。2×2間総柱の掘立柱建物はほとんどがB類である。

C 類

C類は柱穴の平面形状が小形円形で、隅柱を含めて大きさに差がなく、深さに一定の約束がない。柱裏の多くが不明瞭で、掘土にも黄色土で固めた痕跡はない。例数が少なく、全体の規模がわかるのは3・9号掘立柱建物の2例にすぎないのははっきりしないが、必ずしも床面積の狭い掘立柱建物に限られるものではないようである。

まとめ

以上から次のようなことを指摘しうる。①A類の構造は中型以上のより大型の掘立柱建物に採用され、B類は小型の掘立柱建物に採用されていることが判明する。その場合A類は柱筋がとおり、寸法も揃う傾向がある。②高床倉庫と考えられる総柱の掘立柱建物も、2×3間の26号掘立柱建物がA類になる可能性が高いのに対し、ほかの2×2間の例はB類である。③側柱建物と高床倉庫の双方にA類とB類の構造があり、それぞれ建物の規模に対応することは、掘立柱建物の建設の技術に、規模に応じた二通りの建て方が存在したことを暗示する。④C類は規模の大小ではなく、簡易的な用途の建物とみてよい。

柱穴配置(第2図)

柱穴の平面配置

掘立柱建物の平面形式による分類である。まず総柱掘立柱建物には2×2間と2×3間の二種類があり、側柱建物には2×3間が大多数で、1×2間、3×4間と3×5間の例が一例ずつある。他に周溝建物の20号掘立柱建物は1×3間に棟持柱を配する特殊な建物である。以下床面積と関連させて建物の性格を検討する。

高床倉庫

2×2間総柱の掘立柱建物は床面積小型規模の高床倉庫とみてよく、柱穴の構造はB類に対応する。2×3間総柱の掘立柱建物も床面積中型規模の高床倉庫と考えられ、柱穴の構造はA類に対応する可能性が高い。

側柱建物

2×3間の側柱建物は床面積小型と中型規模の掘立柱建物の大部分を占め、のちに見るように堅穴建物の床面積の小型と中型に対応するので、通常の居住用の掘立柱建物であると考えられる。柱穴の構造は小型規模はB類がほとんどで、中型規模になるとA類が多くなる。3×4間の側柱建物は23号掘立柱建物のみで床面積は大型規模であるが、堅穴建物のなかにも同規模の床面積の例があり、居住用とは異なる建物と考える必要はない。ところが床面積が広いにも関わらず柱穴の構造はB類である。なお1×2間の唯一例である25号掘立柱建物は、床面積は最小だが小型規模の範囲に含まれ、対応する規模の堅穴建物も多いので、やはり居住用と考えられる。柱穴の構造はB類であった。

10建物

以上、掘立柱建物のうち倉庫と居住用の建物と考えられるものを見てきたのであるが、東原C区で発見された3×5間の掘立柱建物である10号掘立柱建物のみは、床面積が飛び離れて広く特大型に分類され、柱穴の構造もA類である。もちろん都衙などに建てられる官衙的な掘立柱建物の規模や構造に比べれば小さなものだが、その規模に対応する床面積をもつ堅穴建物の例はないので、居住用だとしても一世帯規模のものではないであろう。また桁行5間以上の掘立柱建物はそれ以下の建物と比べて構造と格の違いが歴然としているという指摘(註2)もあり、今のところ特殊な用途の建物と考えておきたい。ところで底付の掘立柱建物としては21号掘立柱建物と29号掘立柱建物があるが、後者は柱穴の構造がC類であるのでやや不安が残るが、前者は柱間寸法が広くおそらく桁行3間以上で、床面積は大型の規模になると推定される。おそらく東原C区の10建物に対応する野

2×2間 総柱

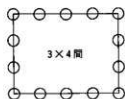


4号・8号・16号・17号

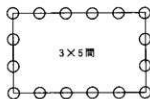
2×3間 総柱



13号・14号・26号

1号・3号・5号・6号・7号・12号・15号
24号・27号・28号・30号・51号

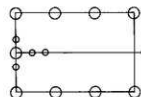
23号



10号



25号



1×3間 棟持柱

20号

第2図 柱穴配置による分類

の21号掘立柱建物は、もともと居住用とは異なる性格の掘立柱建物であろう。⑤1×3間棟持柱の20号掘立柱建物は、祭祀施設である。

基本寸法 (第3図)

掘立柱建物の柱穴間の距離を測ってみると、柱間寸法の規格には基本的に二種類があることがわかる。第3図左のように4本の柱穴配置が正方形となるⅠ類と、長方形となるⅡ類である。これは当たり前の分類であるが、竪穴建物の柱穴配置がⅡ類にあたるので、竪穴建物と掘立柱建物の建築技術に共通するものがあるのではないかと考えたからである。Ⅱ類のうち桁行方向が長い場合をⅡa類とシタテナガ長方形と称し、梁行方向に長い場合をⅡb類としヨコナガ長方形と称した。

Ⅰ類は3・6・28・30・33・51号掘立柱建物が相当する。掘立柱のみで、床面積が小型と中型規模の掘立柱建物に一定数存在する。2×2間の総柱建物の中にⅠ類がないことは意外であった。

Ⅱa類は1・2・4・7・8・9・10・16・17・23・27・32・52号掘立柱建物が相当する。2×2間の高床倉庫はすべて含まれる。なお2号竪穴建物の柱穴配置を、カマドの面を梁間とみなすとⅡa類となる。

Ⅱb類は5・12・20・24・25・26・53号掘立柱建物が相当する。

間Ⅰ区を中心施設のひとつと推定される。したがって居住用ではない可能性が高い。

最後に1×3間に棟持柱を配する20号掘立柱建物であるが、本文で述べたとおり、崩壊がめぐり、内部の3分の2をしめる大規模な土坑をともない、入口が1ヶ所に限られる特殊な建物である。床面積も柱が少ないわりには大型の規模にあたり、祭祀施設と呼んでよい建物である。文献資料では「社」と表現されるものにあたる可能性もあるが、建物群の消滅と同時に廃絶したことが明らかであるので、移転した可能性が高い。

以上の検討の結果、次の点を指摘しうる。①2×2間総柱と2×3間総柱の掘立柱建物は高床倉庫であるが、規模と柱穴の構造に違いがある。②1×2間、2×3間の面柱建物は、竪穴建物同様本来そこで日常生活を送る居住用目的の建物である。規模の違いはおそらく生活する世帯の規模の違いを反映しているであろう。③3×4間の大規模の面柱建物についても、対応する規模の竪穴建物があるので、居住用目的と考えられる。④3×5間の面柱建物である10号掘立柱建物と東庇

棟持柱建物

「社」

まとめ

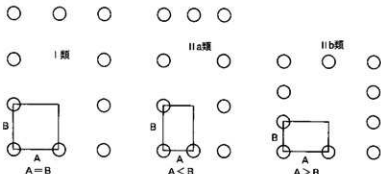
Ⅰ 類

Ⅱ a 類

Ⅱ b 類

ま と め

はじめはA類の柱穴構造または大規模な掘立柱建物とⅠ類との対応、その逆にB類の柱穴構造または小規模な掘立柱建物とⅡ類との対応があり得るのではないかと予断をもって臨んだが、見事に裏切られた。そうはな



第3図 基本寸法による分類

らないのである。床面積が大型や特大型になる掘立柱建物は逆にすべてⅡ類であった。少なくとも指摘できるのは、①2×2間の小型の高床倉庫はすべてⅡ類に当たり、柱穴の構造もすべてB類である。②小型高床倉庫の柱穴配置は、4本柱の竪穴建物の柱穴の配置と一致する可能性がある。

床面積 (第4図右)

掘立柱建物の柱穴の心中心距離を計測して床面積をはじき出した。それを縦に並べると、高床倉庫が2群、側柱建物が4群に別れることが判明した。

高床倉庫

総柱掘立柱建物の高床倉庫は、床面積8~9㎡に4棟が集中し、いずれも2×2間で、柱穴の構造はB類と、寸法はⅡ類と対応する。これを倉小型の規模とする。つぎに2×3間の26号掘立柱建物1棟しか例がないが、床面積12㎡のあたりを倉中型の規模とする。

側柱建物

側柱建物は、床面積14㎡を中心に11~17㎡に集中する10棟を小型の規模とする。ほとんどが2×3間の建物で、1×2間の25建物も含まれる。柱穴の構造はほとんどがB類で、C類の9建物も含まれる。次の中型の規模は21~25㎡に分布する5棟で、すべて2×3間の建物である。この規模から上では柱穴の構造はA類が多くなる。大型の規模は3×4間の23号掘立柱建物の32㎡のみである。最後に10号掘立柱建物は床面積43㎡で、この1棟を特大型とする。

なお棟持柱建物の20号掘立柱建物は床面積31㎡で、大型の規模に対応する。

ま と め

以上から以下の諸点を指摘しよう。①倉は小型も中型も床面積としては小規模なものである。②居住用の側柱建物には小型・中型・大型の3クラスがあるが、大半は小型と中型で、2×3間の形式である。③3×5間の10号掘立柱建物は群を抜いて広い。④祭祀施設である20号掘立柱建物は大型の規模に対応する。

(注および参考文献)

- 註1. 東原地区発掘中に現地を視察された松村恵司氏(当時文化庁)から、掘立柱建物のコーナーの柱が深くなる傾向がある旨の助言をうけ、調査中特に注意しながら掘り上げたものである。
- 註2. 松村恵司「大型建物の系譜と性格の変遷」公開セミナー古代の大型建物跡記録集」かながわ考古学財団1999

② 竪穴建物跡 (第2表)

今回の調査では15棟の竪穴建物が発見されている。調査に失敗した30号土坑をいれれば16棟になる。拡張や造り直しの例が2・5号竪穴建物で知られているので、実際の検討例は18例である。その場合は新古で表現する。竪穴建物の竪穴部分の平面形はいずれも方形あるいは長方形である。特異な地床炉と考えられる1号竪穴建物を除けば、例外なくカマドを付設する。そこで炊飯をともなう日常生活がおこなわれていたことは、床面積に大小があっても標準規模のカマドをひとつだけ造りつける点でまったく同一であることから、容易に推定しよう。以下いくつかの角度から竪穴建物を検討する。

方 形 竪 穴

柱穴配置 (第5図)

堅穴建物の柱穴配置の平面形式は大きく3群に分けることができる。4本柱穴をA類、柱穴のない無柱穴をB類、2本柱をC類とする。

A1類は方形で4本柱の堅穴建物で、2号堅穴建物1例である。柱間寸法は掘立柱建物というII類にあたる。

A2類は方形変則2本柱の4号堅穴建物1例である。C類としなかったのは、柱穴の位置がカマド側に偏り、本来4本柱の構造であったと考えられるからである。A類の変則例とみる。

B類は方形無柱穴の堅穴建物で、上野第1遺跡の大半の堅穴建物が該当する。1・3・5古・6・7・8・9・10・12・13・14・15号堅穴建物の12例である。床面積とは無関係で、小型の規模の堅穴建物に限られているわけではなく、最大規模の8号堅穴建物もB類である。すなわち大中小の規模にそれぞれ対応できるような建築様式として無柱穴構造の建屋が成立していたと考えてよい。

C類は長方形2本柱であるが、通常の二本柱ではない。5新・11号堅穴建物の2例が知られ、30号土坑も可能性が高い。いずれも柱間寸法が3mを超え、壁際に柱を寄せている。おそらく無柱穴構造に棟持柱が加えられた上屋構造で、入母屋造りであったと考えられる。

以上から次の点を指摘する。①柱穴の数と床面積は比例しない。②B類無柱穴の堅穴建物は、ひ

A 1 類

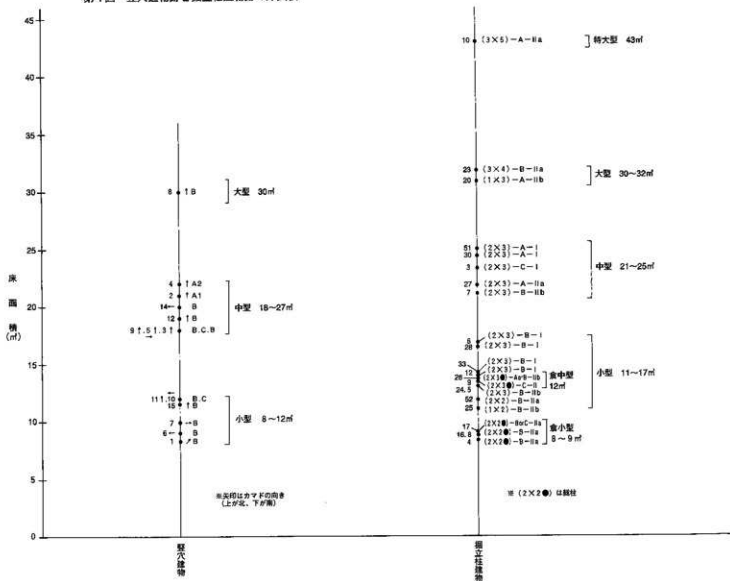
A 2 類

B 類

C 類

入母屋造り
まとめ

第4図 堅穴建物跡と掘立柱建物跡の床面積



とつて建築様式として成立しているもので、床面積の大小に対応する。③C類二本柱は、上屋の構造が異なる。④A類・B類・C類は規模の大小とは無関係で、建築様式の異なる3種類の竪穴建物と考えられる。

カマドの位置

長方形の竪穴の場合、長辺側の中央付近にカマドを造るのが一般的である。例外は1号竪穴建物の地床炉で、竪穴のコーナーに造られている。

北カマド

カマドを竪穴の北壁に造り付ける北カマドは、2号・2新・3・4・5号・8・9・11・12・15号竪穴建物の

東カマド

10例である。竪穴の東壁に造り付ける東カマドが5新・7号竪穴建物と30号土坑の3例である。竪穴の西壁に造

西カマド

り付ける西カマドが6・10・13・14号竪穴建物の4例である。以上ですべてである。南にカマドを設ける例はなく、おそらく風向きと日当たりの関係から南カマドは避けられたと見られる。

竪穴建物の規模との関係を調べると、中型規模以上では北カマドが圧倒的なのに対し、小型の規模の竪穴建物には東西にカマドを造る例が多いので、北カマドの傾向はより大きな竪穴建物ほど顕微することがわかる。

切り合いと
方向

ところで同じ場所に重複して建てられ、切り合う場合にはカマドの方向を同じにする傾向がある。切り合いの例では、野間I区の9号→8号→15号竪穴建物の場合は北カマドを踏襲する。12号→11号竪穴建物の場合も北カマドである。切り合い関係にはないが、ごく近くに隣接して同時存在とは考えられない例では、東原C区の2号と3号竪穴建物の場合がやはり北カマド、野間E区の13号と14号竪穴建物が西カマドである。あるいは5号竪穴建物と30号上坑も東カマドでこの例にあげられるかもしれない。いっぽう切り合うことなく周囲に、接近する竪穴建物がない場合には、カマドの方向は一定しない。4号竪穴建物が北カマド、6号竪穴建物が西カマド、7号竪穴建物が東カマド、10号竪穴建物が西カマドである。

まとめ

以上をまとめると、①竪穴建物のカマドの方向は北カマドが原則で、南カマドにはしない。②東西に設ける例が小型規模の竪穴建物に多い。③時期を異にしながらも、同じ場所に竪穴建物を建設する場合には、カマドの方向を前の住居と同じにする傾向がある。その場合北カマドが踏襲されることが多い。④してみるとカマドの方向は自然条件や居住者の好みで決まるのではなく、最初のその場所に建てられた竪穴建物のカマドの方向に規制されている。⑤しかし単独で建設される場合にはカマドの方向に原則はない。

カマドの構造 (第6図)

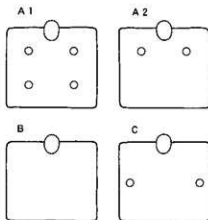
7 竪穴例

竪穴建物廃絶時にほとんどカマド祭祀がおこなわれているので、カマドの上部構造は破壊されている。さらに奈良時代の生活面自体は畚地耕作や水田化による削平を蒙っている。そのためカマドの構造を復元する手がかりは乏しい。そのなかで比較的保存状態のよい7号竪穴建物と8号竪穴建物例をもとにカマドの構造を復元してみよう。

まず壁面を半円形に削りこみ、燃焼部となる基底部分を皿状に掘り円める。袖は竪穴掘削時にその基礎を掘り残して基礎部分とする例が8号竪穴建物と12号竪穴建物で知られているが、ほかの例はすべて袖を床から構築するようである。なお2号竪穴建物ではカマド構築以前に床下の上を入れ替えてカマドの基礎構造とする床下土坑が知られている。

煙道

次に袖と天井および煙道を構築するわけであるが、煙道は奥壁の上部から斜め上方に向かうように構築されていたことが7号竪穴建物で観察されている。燃焼部の内部には中央に必ず1カ所の円

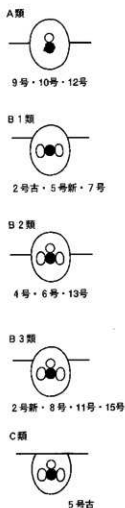


第5図 竪穴建物跡の分類

形の被熱面が残され、多くの場合その被熱面を挟むように長円形の掘形が両側に見つかる。また被熱面の奥にはやはり小さな円形の掘形が1ヵ所見つかる例が多い。前者はカマド側石を立てるための掘形で、後者は土器の底部を支える支石を立てるための掘形と考えてよい。

ところでそのカマド側石の使用法であるが、興味深い事実が9号竪穴建物例で明らかになった。調査当初側石の掘形と袖部の位置関係が明らかでなく、側石掘形は袖部の中心に位置し、側石はカマドの袖の内部にぬり込む、いわば芯として使うカマドの構築材であるという思い込みがあり、そのような目で調査をすすめたが、地山掘り残しの袖部が残る9号竪穴建物のカマドの調査によって考えを改めた。すなわち側石掘形は袖の部分ではなく、被熱した燃焼部側面の内側に掘られていたのである。側石は燃焼部の側面に、石材の片面を露出するように立てられていたと考えるとよい。そうするとカマド側石の用途も構築材ではなく、カマドの火力を外に逃げないようにしたり、火を落としたりとも温度を保ったり熱効率をよくする効果をわらった保温材として利用されたと考えられる。こう考えるとカマドの特徴の多くを説明できる。被熱面と側石掘形がほとんど接するようにつかる例が多いこと。側石石材の激しい被熱による赤変と劣化。さらに石材が安山岩の粒子の粗い板状の石に限られることなどが、無理なく理解される。

さて最後に土器をかける穴の位置について考えてみる。支石掘形の位置は被熱面の中央奥に位置する例がほとんどで、側石掘形からも等距離の位置にある。火力の集中する被熱面の直上ではないことに注目すると、被熱面直上と支石直上の2ヵ所に土器をかける穴があり、それは炊き口からみて縦に並んでいたものと推定される。



第6図 カマドの分類

燃 焼 部

側石の使用法

保 温 材

竪 穴

右脇の小土坑

以上でカマドの復元をおえるが、カマドに関連する施設としてカマドと同時に掘られた円形のあまり深くない小土坑が、カマドの右脇に存在する例が、4・6・8・12号竪穴建物で知られている。性格は不明であるがカマドの構築と同時に掘られ、廃絶時まで使われていたことが調査で明らかになったので、カマドに関係することは疑いない。

次にそのカマド平面形式を分類しておきたい。まず側石掘形の有無でA・B類の2種類に大きく分類される。B類は支石掘形の有無と、竪穴壁面との位置関係でさらに細分した。

A類は側石の掘形がないカマドで、支石掘形のある10号竪穴建物とそれのない9・12号竪穴建物にわかれた3例である。すべて無柱穴のB類竪穴建物である。

B類はカマドの奥壁が竪穴の壁から外に突出し、側石の掘形が左右に認められるもの。支石掘形の無い例をB1類とし、支石掘形のあるもののうち、壁面を大きく掘り込み被熱面の位置が壁面ラインに近いものをB2類、わずかに突出し被熱面が手前になるタイプをB3類とした。

なおC類としてカマドを竪穴壁面の内部におさめ外に突出しないものを分類した。5号竪穴建物の改修以前のカマドがこれにあたるが、竪穴建物改修時に拡張された可能性があり、意味のあるものではない。このほかに1号竪穴建物では地床炉として報告した炉がある。あるいは別様式のカマドである可能性も残る。

以上のカマドの検討から以下の点が指摘し得る。①カマドの構造は、燃焼部の側面に側石を1枚ずつ両側にはめ込んで、熱効率をよくする造りである。②土器の受け口を縦に2個配置する例が推定でき、その場合手前が強火、奥の支石の上が弱火と見られる。③構築方法には地山掘り

平 面 形

A 類

B 類

C 類

ま と め

出しを袖に利用するタイプと、床面から築き上げるタイプがある。④カマドの規模はほとんど変わらない。カマドは竪穴建物の床面積や柱穴の配置とは無関係である。⑤つまり一単位の居住生活にとしての必需品として、大規模な竪穴建物にも小規模な竪穴建物にも必ずひとつ、標準的なカマドが備わっている。

カマド祭祀

竪穴建物廃絶時の移転の儀礼のひとつとして、ほとんどの竪穴建物でカマド祭祀がおこなわれた痕跡を観察している。その具体的な状況を最大公約数的に再現すると、次のようになる。

- カマド破壊** まずカマドを破壊する。その際カマド側石の石材は再利用のために抜き取られ、上部構造物はきれいに取り除かれ、燃焼部の灰や炭も清掃される。次に精製胎土の土師器坏や壺と通常胎土の土師器壺や鉢を用いた煮炊きをとまなう飲食儀礼がおこなわれる。その際塩が用いられたことが製塩土器の伴出から判明している。儀礼の場所はおそらく竪穴の内部ではなく、周囲の別な場所である。
- 飲食儀礼**
- 塩の使用** 祭祀に使用した土器を破砕して、その破片の半分ほどを破壊したカマドの内部に焼土や灰とともに埋め置く。そのときの焼土や灰炭などは飲食儀礼の時に排出したものであろう。儀礼の遺物をカマドに返す際にカマドの跡にビットを穿ったり、周囲に小土坑を掘って遺物を廃棄する例も多い。またその中に土器片だけでなく、カマド側石の石材を廃棄する例もある。最後にその上に白粘土などを混ぜた土で被覆して祭祀を終了する。
- 土器片埋置**
- 白粘土**

以上が調査から復元される竪穴廃絶時の儀礼である。この習俗をカマド祭祀と呼ぼう。この一連の行為の過程を復元してみると、祭祀の習俗にはやや違いがある。特に特徴的な例をまとめると、

ビット まず破壊したカマドに土器を埋置する前にビットを穿つ例が、8号竪穴建物と12号竪穴建物で知られている。この2例はそれだけでなく、袖を削りだす点と右脇に小土坑をとまなう点も一致している。まったく同一のカマド祭祀がおこなわれた竪穴建物といえる。

- 側石埋置** 次にカマドを埋めた土の中に土器だけでなくカマド側石の破片を多量に混ぜる例が5号竪穴建物と11号竪穴建物で知られている。この2例は変則二本柱穴のC型竪穴建物であるのみならず、カマド祭祀に廃棄されたカマド石材が接合して、5号竪穴建物から11号竪穴建物へとカマド石材が再利用されたことが判明している。カマド祭祀の習俗もまた伝えられたと推定される。
- 祭祀の継承**

- 側石残置** 最後に祭祀時に上器片と石材片だけでなくカマド側石の本体そのものを破壊したカマドに残す例が11号竪穴建物と12号竪穴建物で知られている。両者は同じ北カマドで、切り合い関係から12号竪穴建物から11号竪穴建物に推移したことが判明している。ここでも祭祀の習俗が継承されていると考えられる。ところでそうすると11号竪穴建物は、5号竪穴建物と12号竪穴建物の両者の習俗をあわせて継承したことになる。きわめて興味深い。

- 祭祀の土器** さてカマド祭祀に使われた土器は、埋置された上器片の器種構成から、精製胎土の土師器坏や壺と通常胎土の土師器壺や鉢さらに製塩土器に限られていたと考えられる。しかし当時の日常土器としては須恵器が多用されているのであるから、おそらくカマド祭祀に用いる土器は赤色や白色の土器でないといけないという習慣が存在したものと推定される。もちろんこの習慣が厳密に守られていたとは限らない。事実10号竪穴建物では廃絶時に壁面に立て掛けられた須恵器坏蓋が出土している。

- 須恵器の排除** その坏は口縁部を欠いて、カマドとは離れた位置に置かれていた。おそらく儀礼には須恵器が使われることが方便として許されていたとしても、それをカマドを被覆する際に「供える」ことはばかれたと考えられる。

- 儀礼の場所** ところでカマド祭祀となる竪穴建物廃絶時の儀礼はどこでおこなわれたのだろうか。野間H区の周溝建物の周溝や19号土坑・30号土坑では、内部からカマド石材や土器片・灰・焼土等が多量に廃棄されており、破壊されたカマドの残骸と推定される。さらにそこに廃棄された遺物のなかには相互に接合したり、離れた竪穴建物と接合した土器やカマド石材が多かった。おそらく祭祀施設であ

る周溝建物の北側にあたる野間H区周辺で、廃絶儀礼の一過程がおこなわれた可能性を指摘できる。

以上をまとめると、①ほとんどの堅穴建物でカマド祭祀がおこなわれている。②祭祀の儀礼には土師器の坏と甕に製埴土器が使われる。③祭祀の習俗には特徴的なものがある。④その祭祀習俗は継承される。⑤祭祀の儀礼は堅穴外でおこなわれ、H区の周溝建物付近と推定される。

堅穴の埋没状態

堅穴建物は廃絶後、堅穴跡として地表に残る。引き続きそこに生活するものにとって残された堅穴跡を、どうするかは様々な場合がある。上野第1遺跡では以下の3つのパターンが観察されている。

ア、廃棄土坑化 一般的に観察できるのは、まず堅ぎわに斜め堆積が始まり、次第に埋没したことを示すレンズ状堆積の層序である。このような場合の堅穴埋土は総じてやわらかい。その埋没の過程にともなって周辺から様々な廃棄物が捨てられる。焼土や炭・土器片が埋まり込む。このように自然埋没の過程に便乗して人間が廃棄物の処理に堅穴跡を利用することがおこなわれる。以上をゴミ捨て穴に転用されて廃棄土坑化したと表現する。この例は1・4・7・8・9・11・15号堅穴建物で観察された。その中でも4・5号堅穴建物では大量の祭祀に用いられた遺物が廃棄されて埋没している。短期間の廃棄土坑化である。

イ、埋め戻し 土層の観察から基盤層の土が多くブロック状に入り、ときには盛り上がるような層序が認められるもので、おそらく廃絶後周堤を掘り崩して埋め戻したと考えられる例である。しかし土層自体は堅く締まっている。6号堅穴建物と10号堅穴建物で観察された。

ウ、整地 埋め戻すのみならず埋土を固めたと考えられる層序で、水平堆積の状態が観察され、しかも非常に締まっている。2・3・12・14号堅穴建物で観察された。この場合2号堅穴建物のように自然崩壊の斜め堆積が一定程度進行した段階に整地した例と、3・12・14号堅穴建物のように斜め堆積がほとんどなくカマド祭祀の被覆の直後からおこなわれた例があり、後者は立ち退きがおこなわれたともいえる状態である。本文のなかでは強制廃絶と表現した。

ところで整地された堅穴建物の場合それなりの理由があると考えねばならない。事実2・3・12号堅穴建物の場合は、その上に掘立柱建物が建設されている。12号堅穴建物はおそらく掘立柱建物群の南に広がる広場として整備されたからであると推定される。

以上をまとめると、①廃絶後の堅穴建物は廃棄土坑化する。②その場合通常長時間使われる。③祭祀遺物など大量の一杯廃棄で一気に埋まることもある。④なんらかの事情で埋め戻される場合がある。⑤掘立柱建物を立てたり、広場として整備するために、埋め戻しながら整地されることがある。⑥整地の場合、強制立ち退きがおこなわれた可能性がある。

床面積 (第4図左)

堅穴建物底面を計測して床面積をはじき出した。カマド部分は壁を直線でむすんで計測した。その結果を縦に並べると、堅穴建物は3群にわかれることが判明した。

床面積8~12㎡に集中する6棟を小型の規模とする。ほとんどが無柱穴構造のB類堅穴建物で、カマドの方向も様々である。次の中型の規模は18~22㎡に分布する7棟で、無柱穴構造のB類堅穴建物のみならず4本柱のA類や変則二本柱のC類もある。カマドの方向はほとんど北カマドである。最後に8号堅穴建物は床面積30㎡で、この1棟を大型の規模とする。やはりB類堅穴建物で北カマドであった。

以上から以下の諸点を指摘しよう。①堅穴建物は小型・中型・大型の床面積にわかれる。②床面積の広狭に関わらず、標準的なカマドが付設されている。最小の1号堅穴建物にも炉がつき、特に床面積が小さいわけではない。③したがって、いずれの堅穴建物も特殊な用途のものではなく一世帯の居住用である。④居住用の堅穴建物の大半は小型と中型であり、柱穴の構造とは無関係である。

まとめ

堅穴の凹み

廃棄土坑化

埋め戻し

整地

強制廃絶

まとめ

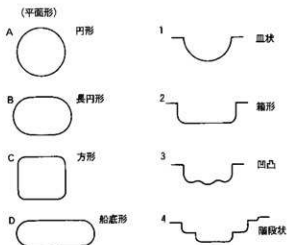
小型

中型

大型

まとめ

	<p>③ 掘立柱建物と竪穴建物 (第4図)</p>
共通性	<p>さてここで異なる建築様式である掘立柱建物と竪穴建物の共通性について触れておきたい。</p> <p>まず第一は、床面積の分布がほぼ同一であることである。総柱掘立柱建物の高床倉庫と棟持柱建物の20号掘立柱建物という明らかに性格の異なる掘立柱建物を除くと、側柱建物は小型・中型・大型と特大型に、竪穴建物は小型・中型・大型にわかれることはすでに指摘した。特大型の10号掘立柱建物は3×5間の形式で、一世帯の日常生活の居住用とは考えにくいので別にすると、大中小の3種類である。どうして両者は三つに別れるのであろうか。居住する人数に正確に比例するならば、このような分布の集中は起こらない。おそらく掘立柱建物なり竪穴建物なりに、規模の大まかな規格が存在しているのである。それが大中小の床面積としてあらわれると考えたい。そうすると大型の竪穴建物もカマドをもつ居住用であったように、側柱建物の大型まではおそらく本来居住を目的とした掘立柱建物であったと考えられる。</p>
床面積	
三分類	
居住用の規格	
	<p>第二に掘立柱建物と竪穴建物の床面積を小室規模同士、中型規模同士と比較していくと、掘立柱建物の方が3〜4㎡ずつ必ず広いことに気が付く。これはどうしてだろうか。竪穴建物の床面積を測る際に残された竪穴部分のみを対象にしているからであると考えられる。竪穴建物の場合、壁と屋根の間に空間を残し、棚などの収納施設を造る例が知られている。反対に掘立柱建物はそのような収納の空間をすべて建物内の床面空間で補うために、実際に使える床面はひとまわり小さいものと推定される。つまり竪穴建物の床面積は実はひとまわり広いのである。そう考えてよければ同規模の床面積を比較して掘立柱建物が必ずひとまわり大きくなるのはなぜか、という疑問は解消される。</p> <p>そうすると、掘立柱建物と竪穴建物の小型・中型・大型という床面積規模の3種は、より正確に対応することになる。掘立柱建物と竪穴建物はまったく異なる建築様式であるが、本来一世帯の生活が営まれる場合には、同一規模の世帯であれば、ほぼ同一の床面積規模の掘立柱建物ないし竪穴建物が建設されるという、規模の法則があると考えなければならない。</p> <p>もちろん規模の法則に当てはまるからといって、掘立柱建物のすべてが居住用に実際に使われたといえるわけではない。たとえば野間E区の27・28号掘立柱建物は倉庫群のなかにあり、周囲に廃棄土坑をともなっていないので、実際に一世帯の住人が居住したかどうか疑わしい。しかし掘立柱建物としては居住用の規格なのである。</p>
規模の法則	
まとめ	<p>以上をまとめると、①特殊な性格をもち用途が異なると推定される掘立柱建物を除くと、側柱建物と竪穴建物はすべて、一世帯の日常生活がおこなわれることを目的とした建物である。②掘立柱建物の小型・中型・大型の3種と竪穴建物の小型・中型・大型の3種はかなり正確に対応する。言い換えれば規模の法則を掘立柱建物と竪穴建物が共有する。③居住用建物の規格として掘立柱建物と竪穴建物に共通する広さが3種類あることを、奈良時代の上野第1遺跡の住人は意識していた。④しかし居住用に実際に使われたかは別問題である。</p>
	<p>④ 土坑 (第3表、第7図)</p>
用途追求	<p>土坑とは便利なことばである。性格の不明な穴はすべて土坑である。以下は上野第1遺跡で発見された土坑を分類し、その用途を少しでもわかるようにと、考えたものである。まず一般的にいうて、無目的に人が穴を掘ることはないという前提から出発する。発掘調査では土坑の中から廃棄物である土器や石・焼土や骨などの廃棄物が出土する。しかしだからといってその廃棄物を捨てるためだけに掘られた穴は、実は数少ない。つまり厳密な意味での廃棄土坑はまれである。実際には別の目的で掘られた穴が用途みとなって廃棄土坑化したり、または始めから一石二鳥をねらって廃棄土坑にも使うことを視野にいれて掘られた場合もある。そこでそれらを弁別するために以下の分類をおこなった。</p>



第7図 土坑の分類

分類基準1 平面形

- A 類円形 掘形がおおよそ円形になるもの。
 B 類長円形 掘形がおおよそ長円形になるもの。
 C 類方形 掘形がおおよそ方形になるもの。長方形も含む。
 D 類船底形 非常に長い長円形になるが、中央部が膨らむ。
 E 類不定形 分類不能のいわゆる言い難い形態のもの。
 F 類 そのほか溝状など

平面形

分類基準2 底面あるいは断面形態

- 1 類皿状あるいは半円形 底面をし

底面形状

っかりと造っていない形態である。

- 2 類平皿箱形 これは底面をしっかりと造り出したものである。
 3 類凸凹不定形 いわゆる掘りっぱなしのような形態。
 4 類階段状 2段あるいは3段に、一部あるいは全部がなっているもの。

この基準を用いて奈良時代の土坑がどれにあたるかを検討した。なお機能と形態が明確な土坑を参考のために加え、野間M区の水田下土坑群は省略した。なお括弧内の数字は長さで、規模の目安として表示した。

A 3 類円形凸凹 野間G区23号土坑 (193)

B 1 類長円形皿状 典型的な廃棄土坑の形態であるが、掘立柱建物に付設されたものが多く、それは比較的大型である。例は東原A区1号土坑 (224)、東原B区4号土坑 (300)、東原C区9号土坑 (185)、東原D区15号土坑 (121+)、野間E区53号土坑 (145)、平原B区203号土坑 (310) である。おそらく土坑の大小は隣接する掘立柱建物の規模に関係があるとみられるが、検討はしていない。

野間G区25号土坑 (115)、野間G区60号土坑 (100)、野間G区61号土坑 (93)、野間H区26号土坑 (85) などの小型の土坑はほとんどが、野間H・G区の祭祀建物である周溝建物の北側で見つかることが多い。

B 2 類長円形箱形 断面形が箱形なのは調査時の掘りすぎの可能性が高く、B 1 類に含めてよい。野間G区19号土坑 (450)、野間E区52号土坑 (350)、野間G区20号土坑 (107)、野間G区24号土坑 (94) などである。

B 3 類長円形凸凹 廃棄土坑として掘られた可能性が高く比較的大型である。東原C区13号土坑 (144)、野間E区54号土坑 (170)。

B 4 類長円形階段状 土取りを目的にして掘られた可能性が高く、大型でかつ深いものが多い。東原C区10号土坑 (294)、野間I区102号土坑 (170)、野間J区38号七坑 (263)。

C 2 類方形箱形 明らかに用途の明確な土坑である。野間G区30号土坑 (435-堅穴建物)、野間J区40号土坑 (170-炉)

C 4 類方形階段状 土取りを目的にして掘られた可能性が高く、大型である。東原B区3号土坑 (195)。

D 1 類船底形半円形 特異な形態で、野間H・G区の祭祀施設である周溝建物の北側で見つかつ

A 3 類

B 1 類

B 2 類

B 3 類

B 4 類

C 2 区

C 4 類

D 1 類

ている。おそらく祭祀に関わって掘られたものと考えられる。規模はかなり大きなものである。野間G区62号土坑(200+)、野間G区28号土坑(172)、野間H区31号土坑(416)。

- E 1 類 E 1 類不定形皿状 野間L区44号土坑(236-須恵器埋納坑)。平原A区201号土坑(370)はB 1 類としてもよく廃棄土坑であろう。
- E 2 類 E 2 類不定形箱形 断面形が箱形なのは調査時の掘りすぎの可能性が高く、E 1 類に含めてよい。野間E区55号土坑(230)、野間G区22号土坑(220)。
- E 3 類 E 3 類不定形凸凹 東原C区8号土坑(285)・14号土坑(520)、野間L区45号土坑(307-粘土採掘坑)があり、おそらく当初の目的は土取りである。

上野第1遺跡の土坑は以上のなかにすべて分類できる。本文ではA 1 類・C 4 類等と表現した。方形箱形のは当然ながら堅穴建物など明確な用途をもって計画的に掘られていることが明瞭で、4 類階段状は多くの場合建物用の壁土などの材料を採取する土取り穴と考えられる。底面が皿状になるものは多くは、おそらく凸凹なものを発掘時に綺麗に掘りすぎた可能性が高いので、実際は凸凹であろう。廃棄土坑として使われているが、掘立柱建物の周囲にひとつだけ存在する場合は多く、切り合いがないのが特徴である。廃棄土坑ならばくりかえし掘られてもおかしくないのに、その例がないので、掘立柱建物建設時の土取り穴の可能性が高い。B 1 類小型や船底形の土坑は周溝建物の北側に集中する傾向が高く、祭祀用に掘られた可能性が指摘できる。

まとめ 以上から、①土坑はかならずしも廃棄土坑として掘られたものではない。②別な目的で掘られ廃棄土坑に転用されるか、両者の目的をかねている。③4 類階段状のものは明確な土取り穴の可能性が高い。④掘立柱建物の近くに存在する底面皿状あるいは凸凹の土坑は土取り穴の可能性が高い。⑤方形箱形以外で、断面形が箱形の土坑は、調査時の間違いと疑ってみる必要がある。⑥野間H・G区には他の地区に分布しない形状の土坑が集中する。

廃棄土坑と掘立柱建物

建物まわりの土坑

掘立柱建物の周辺に廃棄土坑化した土坑が、発見されることが多い。先に指摘したようにこれらは多くの場合掘立柱建物建設時の土取り用とみられ、それが廃棄土坑に転用されたものと考えられる。そのような土坑は特に東原地区でめだつ。東原A区の3号掘立柱建物と1号土坑、東原C区の7号掘立柱建物と9・10号土坑、10号掘立柱建物と14・15号土坑などである。ところが堅穴建物の周辺にはあまりなく、高床倉庫の周辺にもほとんどない。おそらく周辺に土坑を掘る必要が堅穴建物と高床倉庫にはないからである。建物建設に必要な土は堅穴建物の場合、堅穴そのものを掘ることで満たされ、高床倉庫の場合は基本的に土を必要としないからであろう。おそらく通常の側柱建物を建設する際には一定量の土を必要としたのであろう。東原C区の掘立柱建物が緩い斜面に立地することを考えれば、床を水平にするためにも必要であろうし、壁に使う土なども必要である。本来そのような土取り目的で掘られた可能性が最も高いと推定される。

土取り用

ところで以上のように東原C区の掘立柱建物群の周辺には七坑が数多く掘られているのに対し、野間I区掘立柱建物群の周辺にはほとんど掘られていない。それは掘立柱建物群の性格の違いに起因すると考えられる。一軒一軒のために土取り穴を掘る場合と、建物群すべての分を別な場所から供給した場合の違いである。

⑤ 道と水場と祭祀施設・・・および水田

三者の関係

道路状遺構と水場状遺構それぞれ周溝建物のそれぞれの性格と内容は本文にゆずるとして、この三者が一連の施設として機能したことを確認しておきたい。道路状遺構が水場状遺構とセットであることは、道路状遺構が終わるところで水場状遺構が始まり、道路状遺構の南端を起点に水場状遺構が扇形に掘られていること、水場状遺構の手前で土坑列はやや屈折し、その東側に道路からの排水を処理すると推定される浅い溝が延びること。また土坑列の南端から水場状遺構に降りる段差は周

囲より浅く、きわめて自然に降りることができる。以上の諸点から同時に計画的に建設されたことは明らかである。

一方祭祀施設と推定した周溝建物は、出入口が水場状遺構を向くように建設されている。同時に出入口の前の目隠し塀が水場状遺構の側面と平行することから、水場状遺構を前提に建設されたことは明らかである。しかも本文で述べたように、水場状遺構は道路状遺構から進入できるのみならず、西側では段差が高い部分は階段状にして降りられるように工夫されており、おそらく周溝建物側にも開放されていたと考えられる。そうすると周溝建物はまさに水場に向かって建てられた湧水を信仰の対象にした祭祀施設と考えられる。

その場合上野第1遺跡の居住者の信仰をあつめたことは当然としても、道路自体は集落の外と連絡していると考えられるので、周溝建物が道路と水場を前提としている以上、道路を通して水場にやってくる外界の人々を特に意識した祭祀施設と考えざるをえない。

このほかに野間Ⅰ・Ⅱ区の19溝は、道路状遺構とは性格が異なり、集落内の道と評価される。すなわち、野間Ⅰ区の建物が集中する場所から、水田に最短で降りる道である。降りる手前に須臾器甕を破砕埋納した44号土坑が掘られ、しかも道の分岐が連続する。道を通過する際に容易に立ち寄れる位置である。水田を目的とする道に付属する祭祀施設とすれば、水田あるいは水を対象とした信仰に関わる祭祀施設と考えられる。それが最後に破砕されて廃棄されたのは、水田がなくなったからではなく、集落が移転するために道が不要になったからであると考えられる。

ところでその水田は、上野第1遺跡の建物群が建てられはじめた当初から存在していたものではないことは、水田下に土坑群があることから明らかである。湧水の周囲に祭祀施設などが整備されたすぐそばに水田を開くこともそぐわない。おそらく祭祀施設が移転したのちに開発されたものと考えられる。

2-3 遺物各説

① 割書石製品一権一

12号掘立柱建物の建物の柱穴掘形埋土中より出土したもので、一部が欠けておりその欠けた破片は出土しなかった。建築時に偶然混ざり込んだが、不要となって廃棄されたものである。したがって12建物を建設する原のもので、使用されていたのは12建物以前ということになる。ところで後にふれるように12建物は上野2期にあたり、そのころはこの付近は高床倉庫が建てられた倉庫地区であった。12建物はその管理施設的な位置にあたる。

さてこの石製品は重りとしての「権」とみるのが最も有力であり、吉村精徳氏はこの石製品を錘=分銅としての権をし、この上野第1遺跡例を氏の分類のⅡ a-1 類にあたるとされ、7世紀中葉から9世紀初葉の流行する型式のひとつとした(註)。

しかしなお問題ををはらんでいる。すなわち上部の穿孔に頂上から側面に抜けるという特異な形状で、類例を知らない。この紐孔が上面から背面に穿たれている点に着目すれば、何かに着用する道具と想定することもできる。現在のところ、類品の存在する権=重り説が最も有力と考えているが、やや疑問があり、確定できない。類例の増加を待ちたい。

字体については「豊馬豊馬」と読むのが有力だが「豊」の下半の字画が不明瞭で、解釈の余地を残している。「典二馬」のような別の読み方の可能性も残されている。

〔註および参考文献〕

註. 吉村精徳「権衡に関する一考察—福岡県出土権状製品の検討と課題—」[九州歴史資料館研究論集]20、1995 九州歴史資料館

統一的配置

祭祀施設の位置

集落の道

祭祀坑

水田

12建物以前

〔権〕

紐孔

字体

② 須恵器

上野第1遺跡出土土器のなかで土師器について多い須恵器は、遺構の編年の最も有力な資料であるが、一活性の高い資料は少なくしかも破片資料がほとんどである。ここでは編年の問題は別にして、器種別の須恵器の出土傾向を中心にふれたい。

器種構成 須恵器類では壺坏と壺の破片の数量が圧倒的に多い。

坏 坏 口縁内面に返りのつく7世紀型の坏壺は1・2点が採集されたのみで、これをともなう遺構はなかった。坏壺は体部の高いものがほとんどで、8世紀前半から後半のものがすべてである。坏身は高台付きがほとんどで、高台が底部の端につく8世紀末の形態はほとんどない。

壺 壺 短頸の壺と長頸の壺があり、長頸壺は、口縁の先端が外反し、胴部が断面くの字形になる通常の形態の長頸壺Aと、胴部が丸くその肩部に三角の突帯が一条めぐる長頸壺Bがある。長頸壺Bは1個体のみ、M区17トレンチの奈良時代水田の下層から出土している。長頸壺Aは野間H区の祭祀場付近の遺構すなわち周溝建物、4号竪穴建物、31号土坑などに多く廃棄されている。壺蓋は返りのつくものが1点のみ19号溝から出土している。

甕 甕は大型と中型があり、祭祀坑である44号土坑では1個体が破砕して埋められていた。他に大型甕の破片は数多く、遺跡全体から出土している。

鉢 鉢は3個体出土し、いずれも鉢鉢模倣の形態で、底部は尖底気味のものである。1例は東原C区の14号土坑と野間H区の5号竪穴建物一括廃棄中と19号土坑とから出土し接合している。14号土坑は3×5間の10号獨立柱建物のそばに位置する。高坏は2個体しか出土していない。奈良時代にはめずらしい横瓶が周溝建物と31号土坑から破片で出土し接合している。

高坏 以上から、①壺坏と壺は遺跡全体から出七する。②壺なかでも長頸壺Aや鉢さらに横瓶は数が少なく、出土地点は野間H区の周溝建物周辺に限られる。③坏の形態は8世紀前半から後半のものがほとんどで、8世紀初頭と8世紀末の形態はほとんどない。

転用硯 転用硯 野間I区8号竪穴建物の竪穴建物廃絶時に、床面直上につまみを上にして置かれたように残されていた須恵器坏壺である。口縁の三方向を丁寧に打ち欠き、風字硯の形態に似せて調整されている。内面中央が広い範囲で摩滅し、打ち欠き残された口縁部の方向に向かうつまみの角と、その口縁部外面がすり減っている。そこから一方の打ち欠き残した口縁部を手前にして、裏返して斜めに置いて使用されたことが判明する。内面に残る擦過痕の方向から右利きの人物が使用したことが考えられる。

廃棄の理由 ところで転用硯が残された8号竪穴建物は上野4期の建物であった。この時点では野間I区の獨立柱建物群はすでに無くなっている時期にあたる。しかもこの転用硯は破損したり摩滅がひどくなったりして使えなくなったために廃棄されたのではない。まだ使えるのに置いていったのである。転用硯が不要になった理由はなんだろうか。仮に8号竪穴建物の居住者の所有物であったとすれば、彼らが文字を書く人物ならば、転磨の際にかならず持っていくであろう。それを竪穴建物廃絶時すなわち転居の時に置いていくのは、すでに竪穴建物の居住者にとっては役に立たない道具になっていたと考えられる。つまり8号竪穴建物の居住者は文字の読み書きのできない人々か、あるいは読み書きの必要のなくなった人々であると推定される。そのような居住者に転用硯が伝えられていたとみられるのである。そして廃棄の在り方をもう一度見直すと、カマド祭祀時の須恵器の廃棄方法と共通していることがわかる。つまりカマド祭祀の際の一環として転居時に廃棄していると見てよい。文字の読めない8号竪穴建物の居住者にとって、伝えられた転用硯は、すでに実用品ではなく祭祀のために供える呪物に転化しているといえまいか。

③ 土師器

3種類 出土した奈良時代の土師器にはおおづかみに3種類に分けることができる。1、後述する精製胎

土を用いた土師器で、各形式とも須恵器や通常胎土の土師器とは異なる形態である。精製胎土AとBの2種類がある。2、通常胎土つまり在地産の煮沸用の甕を中心とした土師器。3、胎土や焼成の方法はまったく通常胎土の土師器と同じだが、器形や成形調整方法が須恵器と同じ須恵器模倣の土師器である。4、郡城系の土師器は、周溝建物のピット3から一点のみ出土している。5、全体的な土師器の形式構成は、豊後国府を中心とする沿岸部ではなく、筑後の遺跡を共通する。

筑後と類似

胎土による分類を説明しておきたい。

精製胎土の土師器 精製された水こし粘土を用い、肌色に近い白色と桃色に近い橙褐色の部分が筋状になって、基本的に砂粒を含まない。精製胎土Aとする。その胎土に含まれる微砂粒をあえて示すと角閃石と長石と石英の微粒子に赤色の正体不明の微粒子をふくみ、さらに微細な雲母様の粒子を含む。精製胎土Bは以上の特徴をもつ精製胎土に混和材としてあえて砂粒を混ぜたものである。在地の胎土ではなく、ほとんどすべては筑後地方からの搬入品であろうと推定される。

精製胎土

器種構成には壺のなかでも小型壺が多く、高坏もある。坏または皿としたものが最も多く、なかには坏蓋や台付き皿がある。坏類の特徴はヘラによる暗文が認められないことと、底部外面には手持ちヘラケズリによる器面調整が施されている点にある。形式変化を追うことは難しいが、手持ちヘラケズリが明瞭なものから、ナア消されて不明瞭なものに変化するようである。

搬入品

器種と技法

壺と坏はカマド祭祀の際に使用される必需品であったらしく、すべてのカマドで出土し破片として埋め置かれている。

ほかに鉢、瓶、甕といったほとんどの品目がある。特に瓶や甕など煮沸形態に精製胎土の土師器があるのは不思議である。それらは通常胎土の土師器や須恵器でまかなえるのであり、実際多数出土している。精製胎土の土師器を好む集団がいたとも考えられるが、精製胎土の土師器は筆者で、長持ちするものではなく、特に瓶や甕は実用品には向かない。カマド祭祀に含まれることも多く、おそらく1回限りの儀礼用の土器と見られる。

鉢・瓶・甕

通常胎土の土師器 在地産の凝灰岩に由来する角閃石が目立つ胎土で、精製胎土の土師器とは容易に区別される。

器種構成は壺と小型壺・鉢の煮沸具を中心に瓶の把手がかなり出土し、高坏と碗が少量含まれる。この中で甕は頸部がすぼまる形態から、口縁部が広がる形態に変化するようであるが、破片が多く十分な検討がおこなえなかった。瓶の把手は体部に張りつける製作法ではなく、体部に差し込む方法で作られており、壺後の沿岸部の瓶の製作方法と異なっている。おそらくこの場合も筑後地方からの影響であろう。

器種構成

壺と鉢は煮沸具の典型で、おそらくカマドの構造に対応する。上野第1遺跡の竪穴建物のカマドは、ほとんどが縦に2穴の掛け口を並べる形態であろうことを推定した。一方が弱火一方が強火である。このカマドに普通の壺と小型壺それに瓶を併用し、鉢も今日の鍋に近い利用の仕方を用いられたと考えたい。以上は日常生活での使用であるが、他方カマド祭祀でも壺と鉢が使われていることが各竪穴建物のカマドの状況からうかがわれる。

壺と鉢

④ 製埴土器

いずれも胎土に大粒の砂粒を多量に含み、石英粒がめだつ。在地産の土師器の胎土とは異なっており、製埴土器は日田郡外からの搬入品である。以下の2種類がある。

焼埴用

A 逆錐形製埴土器 小型の焼埴用製埴土器である。体部がやや途中で外に屈折し内面に稜をもつことが多い断面Y次形のA1類と、直線状に開き断面がV字形のA2類に細分できる。竪穴建物のカマド祭祀のなかで発見される例がきわめて多い。それ以外では周溝建物や31号土坑など祭祀関連を推定させる遺構からの出土が多く、容器入りの埴として祭祀に使われたと考えられる。

逆錐形

B 六連式土器 内面に布目痕が残る形造り成形の砲弾形をした焼埴用土器で、外面は未調整の

六連式

	<p>まま指による成形痕をそのまま残す。わずか2個体が、野間B区の4号掘立柱建物と平原A区の201号土坑から出土しているのみである。</p>
出土状況と数量	<p>いずれも焼塩用の製塩土器であり、量的には圧倒的に逆錐形が多い。しかし1ヶ所に多量に出土することはなく、小破片が少しずつ含まれるのである。どの破片にも塩を焼き固めた痕跡である変色と劣化剥離が認められる。逆錐形が量的に多いのは、六連式が圧倒的な量後沿岸部とは異なる特徴である。これも筑前筑後の遺跡と共通する現象である。</p> <p>製塩土器の意味 ところで内陸の日田盆地は海岸から遠く離れており、製塩土器は塩の運搬用具を兼ねてもたらされた事は明らかである。しかし頑丈そうな六連式なら運搬用具にも適しているように、薄くて華奢な作りで、しかも焼き塩に使われて劣化した逆錐形の製塩土器がはるばる日田まで、かなり多量に持ち込まれているのはなぜであろうか。上野第1遺跡だけでなく日田盆地内の奈良時代末落遺跡では、この土器はごく普通に出土する。そこで注目されるのが堅穴建物での出土状況である。</p>
祭祀時の塩	<p>逆錐形製塩土器のほとんどの破片は、カマド祭祀時に塩を置かれた土器破片と共存する。カマド祭祀の儀礼が炊飯飲食をとまなうこと、それに使われるのは原則として土器であることは先に指摘したが、そのなかで塩が用いられているのである。ではなぜ塩だけではいけないのか。当時すでに散状塩が登場し、固形塩も固まりのまま流通していたことが、文献資料の単位記載から明らかである。すなわち散状塩は「斗・升・合」の単位で、固形塩は「罌」の単位で計られている。日常の炊事や工業用に使われる塩は、すでに奈良時代には散状塩や固形塩の形式で流通するのが一般的であったと考えられ、普通は焼塩用の製塩土器も産地で廃棄される。事実北部九州の製塩遺跡では膨大な出土が知られている。したがって土器をとまなうということは、逆に土器に入れられたままの塩に意味があると考えざるをえない。そしてその「土器塩」がカマド祭祀に多用されているのであるから、祭祀においてこそその意味があったと推定される。すなわち祭祀に使う塩は清浄でなければならず、産地から祭祀の時まで、ほかで使われたことのないことを示すために土器にいれられたまま運ばれたのではなかろうか。つまり「土器塩」は清浄な塩であることを保証し、塩の清浄さを象徴していたと考えられるのである。そう考えなければ華奢な逆錐形の製塩土器がはるばる運ばれてくることを理解できない。おそらく塩の産地であらかじめ祭祀用として作りわけられ、日常の塩とは別の扱いを受けて流通していたものと推定される。</p>
「土器塩」	<p>⑤ 鉄器</p>
刀子と鉄鍬	<p>奈良時代の遺構から出土し、この時代の鉄器と考えられるものは刀子と鉄鍬の2器種に限られる。刀子は「のかつぎ」の明確なA類とそうでないB類があり、鉄鍬は長頸鍬である。</p> <p>数量としては刀子が6点多く、鉄鍬は1点と少ないが、全体として鉄器の出土ははなはだ少ない。刀子はいずれも破損しており、消耗品として使われたのち最終的に廃棄されたものである。鉄鍬は完形品で10号堅穴建物から出土しており、出土状態が不明なのが惜しまれる。というのも古墳時代前期の堅穴廃棄時の祭祀行為に、鉄鍬が使われることが多いことが日田盆地内の小迫辻原遺跡で知られているからである。この鉄鍬がどういう風に廃棄されたかは不明だが、奈良時代まで下るころにはカマド祭祀やその他もろもろの祭祀に鉄鍬が使われなくなったことは、ほかに出土がないことから明らかである。</p>
	<p>⑥ 石製品</p>
紡錘車	<p>結晶片岩製の紡錘車が1点、野間H区の31号土坑から出土している。石材は日田郡では産出せず、おそらく筑後川を下った筑前南部からの搬入品と考えられる。</p>
石 錘	<p>石錘は3号堅穴建物2層中から1点出土している。石錘の出土はこの堅穴にそれを捨てた人々が、近隣の河川で網漁をおこなっていたことを暗示している。1点のみなので偶然の可能性も否定</p>

できないが、仮に石錘を捨てた人々が同じ上野第1遺跡の住人で、かれらが銅を所有していたと考えてよければ、この台地の南端の奥まった集落である上野第1遺跡の住人が、おそらく三隈川での網漁の権利を持っていたことを物語っている。8世紀初めにこの場所に移り住むまで保有していた網漁の権利を、移住後も引き続き保持していたことを示している。したがって上野第1遺跡に移住した集団あるいは家族の一部は、三隈川に近い集落からそれまでの近隣集団との関係と権利を維持したまま生活地を遷した人々であったのではないかを考えさせられる。

2-4 遺構の編年

カマド祭祀における土器の一括資料や、一括廃棄の土器が、土器の編年と器種構成を考える最良の資料であるが、完形に復元できるものが極めて少なく、セット関係も容易につかめない。土器の型式変化と一括資料から編年をおこなうのに困難を覚えたので、以下の5点を基準に上野第1遺跡の奈良時代の遺構群の編年を試みた。最終的には5期編年が可能であった。

① 遺構の切り合い関係

まず最も切り合い関係の多い、野間Ⅰ区を検討する。まず9号竪穴建物→30号掘立柱建物→8号竪穴建物→15号竪穴建物の関係は、実際には9号竪穴→廃棄土坑化→30建物→8号竪穴→廃棄土坑化→15号竪穴→自然埋没の過程をたどっており、7時期を経過する。そのうち15号竪穴の自然埋没時には集落は無くなっていると考えられるので省略すると6時期となる。結果的には9号竪穴が使用されていた時期が上野1期、9号竪穴が廃棄土坑化し埋没していた時期が上野2期、30建物が使用された時期が上野3期、8号竪穴が使用され廃棄土坑化して埋没するまでが上野4期、15号竪穴の使用時期が上野5期となるのであるが、まずこのように切り合い関係から小時期をわける作業をおこなった。

その結果、東原C・D区では2号竪穴建物→廃棄土坑化(整地)→7号掘立柱建物、3号竪穴建物(強制廃絶=整地)→7号掘立柱建物、8号掘立柱建物→10号土坑、8号掘立柱建物・12号掘立柱建物→10号掘立柱建物、13号掘立柱建物→14号掘立柱建物→15号掘立柱建物の切り合い関係から、少なくとも3時期を経過していることがわかる。

野間E・F区では、重複する14号竪穴建物(強制廃絶=整地)と27号掘立柱建物→28号掘立柱建物、4号竪穴建物→廃棄土坑化などの関係から、3時期を認めた。野間H・G区では周溝建物→7号竪穴建物→廃棄土坑化の3時期を、道路状遺構も作り直しがあるので、2時期あることがわかる。

野間Ⅰ・J・L区では、さきほどの9号竪穴建物以下の例の他に、25号掘立柱建物→24号掘立柱建物、23号掘立柱建物→10号竪穴建物(埋め戻し)、12号竪穴建物(強制廃絶=整地)→11号竪穴建物・102号土坑、32号掘立柱建物→33号掘立柱建物、45号土坑→廃棄土坑化→19号溝、40号土坑→水場状遺構の関係を明らかにした。

次に以上のようなそれぞれの地点で設定した時間軸の併行関係を明らかにするために、以下の点を検討した。

② 竪穴建物の整地の時期

竪穴建物の埋没状態を検討した際に明らかにしたように、竪穴建物を埋め戻して整地した例が野間C区での2・3号竪穴建物、野間E区での14号竪穴建物、野間Ⅰ区での12号竪穴建物で知られている。前三者ではその上に掘立柱建物が建てられている。以上の竪穴建物は強制廃絶の状況が多く、建てられた掘立柱建物とみると方向がほとんど一致し、それは周溝建物の20号掘立柱建物と平行するか直行している。この事実から竪穴建物の整地をともなうような大規模な建物群の建て替えが一斉におこなわれた時点があったと推定される。切り合い関係の中にその時点をもとめると、東原C区では7号掘立柱建物の建設時、野間E区では28号掘立柱建物の建設時にあたり、野間Ⅰ区では切り合いはないが後述する方向の一致から23・30号掘立柱建物の建てられた時点であることがわかった。

3住居の切り合い

東原C・D区

野間E・F区

野間Ⅰ・J・L区

竪穴の整地

建物建設

一斉建て替え

この時点以前に2時期が経過していることが、2号竪穴建物と9号竪穴建物の埋没状況からうかがえるので、廃棄土坑化による埋没が進んでいるので古く廃絶したことが明らかな2・9竪穴を上野1期、強制廃絶がおこなわれて直前まで使われていたことが明らかな3・14・12竪穴を上野2期とし、整地後に建てられた7・28建物を上野3期とした。さらにその後の切り合い関係から8号竪穴建物の時期を上野4期、15号竪穴建物の時期を上野5期とした。

上野3期

併行関係

これで併行関係の横のラインのひとつが明らかになった。次は切り合いのない単独の遺構と、以上の関係につながらない遺構を、つなぐ方法を検討した。

③ 建物の方向 (第8・9・10・11図)

編年を用いる前に建物群の方向の一般的傾向を述べておきたい。

方位の磁場

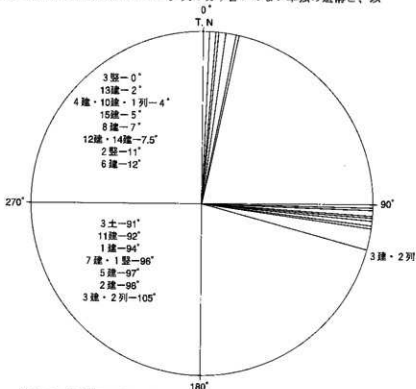
正方位の磁場 まず上野第1遺跡全体をみると東原地区と野間地区の掘立柱建物と竪穴建物には、東西南北の正方位を指向してやや東に振る傾向がある(第8・9・10図)。これに対し平原地区の掘立柱建物は、正方位をまったく指向しないことがわかる(第11図)。

正方位指向

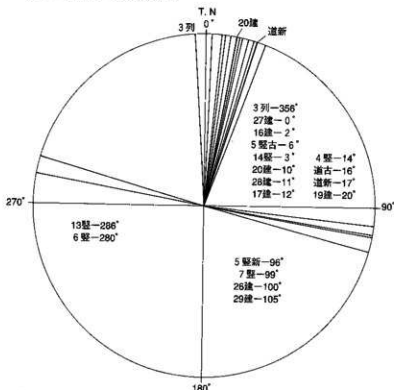
しかし平原地区の掘立柱建物群は時期が異なるかといえば、そうではない。隣接する土坑から出土する遺物を見るかぎり同時期である。これは東原地区と野間地区が正方位にあわせて建物を建てるという共通の約束に従っていたのに対し、平原地区にはその約束が及んでいなかったからと考えられるのである。いわば正方位の磁場がそこに作用しているのであり、それは原則として上野1期から上野5期まで一貫し

平原地区

上野1期

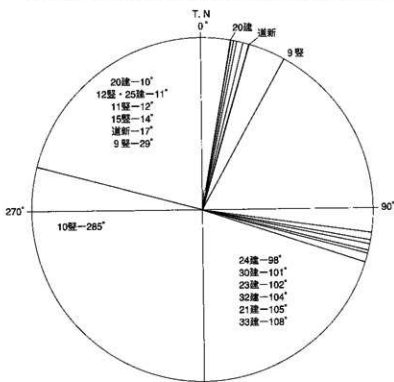


第8図 東原地区の建物の方向

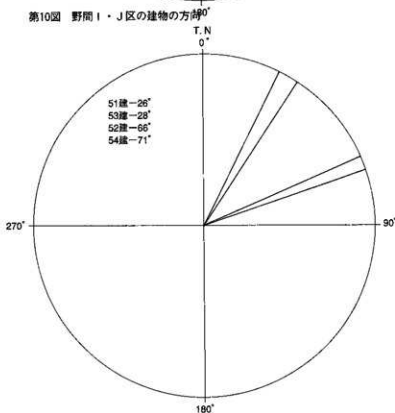


第9図 野間E・F・G・H区の建物の方向

て作用していると考えられる。その磁場の対象に平原地区は最後まで含まれなかったわけである。ただ例外として東原A区の3号掘立柱建物と野間I区の9号竪穴建物の方向が違うことがわかる(第8・10図)。9号竪穴は切り合い関係から上野1期となる最古の竪穴建物であり、しかも上野2期以後の建物はすべて正方位を指向するのであるから、おそらく上野1期に野間I区より西方では、正方位の磁場は作用していないと考えられる。また3建物は東原A区という最も東の調査区に所在する。ここにも正方位の磁場が及ばない時期があったのである。これに対して東原C・D区と



第10図 野間I・J区の建物の方向



第11図 平原地区の建物の方向

野間E・F区では上野1期以来正方位の磁場が作用する。おそらく上野1期においては東原C・D区と野間E・F区を中心に正方位の建物が建設され、東原A区や野間I区は周縁部にあっていて方位を考慮しないと考えられる。それが上野2期以後は東原・野間河地区全体に正方位の磁場が作用するようになっていったと考えられる。その中心はおそらく道路状遺構であり、上野3期以後は周溝建物となると想定される。

東への揺れ

なお正方位から東に振る例が多いのは、方位の観測に磁石を使用したためとも考えられる。磁北との偏差と一致するものと考えたい。

方向と柱筋の一致 次に図面に定規をあてて、正方位の建物群の細かい方向と柱筋を押さえていく。その際すでに切り合い関係と竪地との関係で明らかなものを基準とする。

東原地区

東原地区では、まず東原A区の1号掘立柱建物と2号掘立柱建物は柱筋が一致し、上野2期の建

物の方向にはほぼ同じ。4号掘立柱建物と1号竪穴建物は上野3期の建物の方向に一致する。野間C・D区では上野3期の7建物と直交する10号掘立柱建物と15号掘立柱建物、さらに平行する5号掘立柱建物があり、10建物和柱筋を揃える1号柱穴列を見いだした。以上の上野3期の建物の切られた3竪穴と14建物を上野2期とし、後者と柱筋がそろった8建物和12建物および方向が一致する2号柱穴列を見いだした。さらに上野2期に建物の切られたり、古いことが明らかな2竪穴と13建物を上野1期とした。

野間E・F区 野間E・F区では同じ方法で、上野3期の28建物を出発点に方向が同じ26号掘立柱建物と17号掘立柱建物と29号掘立柱建物を検出し、さらに4号竪穴建物もほぼ同じ方向である。28建物が整地された14竪穴が上野2期で、それと重複し28建物の切られた27建物を上野1期とすると、27建物の方向の一致する16号掘立柱建物を見いだせる。

野間I区 野間I区では上野3期の30建物和同一方向で柱筋のそろった23号掘立柱建物と21号掘立柱建物さらに33号掘立柱建物があり、整地がおこなわれた上野2期の12竪穴と方向の一致する25号掘立柱建物を見いだした。

④ 遺構の位置関係

次は、時期の特定された遺構と密接な関係があると見られる位置にある遺構を検出する。

東原地区 東原A区では1号土坑が3建物和組み合の上野1期に、東原B区の3・4号土坑は2・3建物和近く上野2期に、東原C・D区の9・10・14・15号土坑は上野3期の建物群の周辺に分布するので上野3期に、同じく9号掘立柱建物は1号柱穴列との位置関係から上野3期に推定した。

野間E区 野間E区の13号竪穴建物は上野1～3期の竪穴や建物を近すぎるので上野4期以後の可能性もあるが、隣接地に同じカマドの向きで存在する場合は建て替えの可能性が高く、13竪穴は上野2期の14竪穴以前の上野1期と考えたほうがよい。野間H・G区では6号竪穴建物は周溝建物和近すぎ、堀め戻しが周溝建物の建設の際のものと考えてよければ上野2期になる。道路状遺構は、9竪穴と8竪穴と15竪穴が存在した上野1・4・5期にそれらと共存していたとは考えられないので、上野2～3期に機能したと推定され、上野2期に改修前の古い土坑列が掘られ、上野3期に現状の道路状遺構が水場状遺構と周溝建物と同時に整備されたものと考えられる。

野間I区 野間I区では上野3期の掘立柱建物群の配置をみると、23建物和30建物の南側は水場状遺構まで広大な広場が現出することになる。切り合い関係からみて上野3期以後にあたる11竪穴と24建物が、その広場のなかに建てられるのはきわめて不自然である。おそらく再び竪穴建物が建てられる上野4期以後と考えられる。

⑤ 接合資料

これでもなお時期不明の遺構が残り、以上のように編年した遺構群も、微妙な方向や位置関係が根拠では心許ない。それで検証の意味も含めて接合資料の検討をおこなった。

土 器 土器 接合資料と、同一個体とみて間違いない例を東原地区から順次あげていこう。切り合いによって明らかに残留した資料は除いている。

接合資料① ①東原C区3土坑と4土坑出土の土師器壺（第4章第25図2）が接合。

接合資料② ②東原C区3土坑と2竪穴カマド祭祀の精製胎土Aの土師器壺（第4章第67図3）が接合。2竪穴が上野1期で3・4土坑が上野2期としたが、土器の一片がわずかに後に廃棄されても不思議ではない。

接合資料③ ③東原C区の2竪穴カマド祭祀と14土坑1層廃棄の精製胎土Aの土師器壺が接合（第4章第67図7）。上野1期の祭祀土器の破片が残留して、上野3期の土坑に廃棄されることは充分ありうる。

接合資料④ ④東原C区の3竪穴1層整地層と14土坑から出土した須恵器坏壺が接合（第4章第70図2）。上

野2期の3 堅穴が強制廃絶される時期と上野3期の掘立柱建物建設のため14土坑が掘られるのはほとんど同時であろうから、まさに同時性を示す資料である。

- ⑤東原C区3 堅穴と10土坑の複製胎土Aの土師器坏が接合。小片で図示せず。 **接合資料⑤**
- ⑥東原C区7 建物柱穴8と10土坑上層廃棄出土の須恵器坏身が接合(第4章第47図1)。両者はともに上野3期で、関係の深さを示している。 **接合資料⑥**
- ⑦東原C区8 建物柱穴3と10建物柱穴6出土の須恵器蓋片が接合(第4章第49図1)。上野2期の8 建物は柱痕出土資料で建物廃却時のものであるから、上野3期の10建物柱穴に入ることはありえることで切り合い関係とも矛盾しない。 **接合資料⑦**
- ⑧野間F区4 堅穴埋土、野間G区5 堅穴埋土一括廃棄、周溝建物周溝埋土、野間J区45土坑上層出土の須恵器大型甕は同一個体である(第51図20)。4 堅穴と周溝建物は上野3期であるから、孤立していた5 堅穴と45土坑が結びつくことになり、上野3期とする根拠のひとつを得た。 **接合資料⑧**
- ⑨野間G区5 堅穴埋土と野間H区31土坑一括廃棄出土の須恵器坏蓋(第5章第74図2)が接合。⑧の接合資料から5 堅穴が上野3期となりうることを示したが、31土坑ともつながることになる。 **接合資料⑨**
- ⑩野間G区5 堅穴埋土下層と19土坑下層廃棄出土の須恵器鉢が接合(第5章第51図22)。⑨と同じく19土坑は上野3期の5 堅穴と結びつく。 **接合資料⑩**
- ⑪野間G区5 堅穴埋土1層と周溝建物周溝埋土出土の須恵器坏蓋が接合(第5章第51図14)。この組合せは接合資料⑧でもあり、5 堅穴と周溝建物の同時性の可能性を示す。 **接合資料⑪**
- ⑫野間G区5 堅穴カマド祭祀と周溝建物周溝埋土出土の土師器甕が接合(第5章第44図28)。この遺構同士の組合せは3例目。同時性を示すのみならず、野間G区の周溝建物と5 堅穴の間の空間から土器が廃棄されることが多いことを示している。 **接合資料⑫**
- ⑬野間H区7 堅穴付近と31土坑一括廃棄出土の須恵器坏身が接合(第5章第74図4)。7 堅穴は上野5期であるが、31土坑では接合資料⑨が上野3期とした5 堅穴埋土から出土している。7 堅穴が上野3期の周溝建物を切っているの、そこからの残留の可能性が高い。 **接合資料⑬**
- ⑭周溝建物周溝埋土と31土坑一括廃棄出土の須恵器横甕が接合(第5章第43図11)。これで31土坑と結びつく資料は⑬⑭について3例目、周溝建物は上野3期である。 **接合資料⑭**
- ⑮周溝建物周溝埋土と野間I区30建物柱穴3出土の須恵器長頸甕が接合(第5章第43図10)。いずれも上野3期と推定したものである。同時性を示す。 **接合資料⑮**
- ⑯野間G区19土坑上層一括廃棄と61土坑出土の通倉胎土の土師器甕が接合しているが、小片なので図示していない。19土坑が接合資料⑭から上野3期と推定されるので、61土坑も結びつく。 **接合資料⑯**
- ⑰野間G区20土坑1層と道路状遺構土坑17埋土出土の須恵器甕が接合(第5章第62図1)。 **接合資料⑰**
- ⑱野間I区15堅穴埋土と野間M区水田中層下面出土の須恵器甕は同一個体(第5章第120図13)。15堅穴は上野5期である。 **接合資料⑱**
- ⑲野間I区11堅穴カマド祭祀と野間L区38土坑埋土出土の土師器甕は同一個体(第5章第128図5、第133図16)。11堅穴は上野4期であり、38土坑が上野4期以後のものであることを示す。
- 以上の土器の接合例から、5号堅穴建物とその周辺の19・30・31号土坑さらに45号土坑が上野3期であることが示され、上野3期と先に推定された30号掘立柱建物と周溝建物や4号堅穴建物などは接合資料より確実なものとなった。また基本的に矛盾する例はないことも明らかになった。

カマド石材 周溝建物や堅穴建物・土坑などから、ひどく被熱して脆くなった安山岩の礫が、廃棄された状態で出土した。これらの礫はまったく同じ種類の石で、ほかの内礫や角礫と容易に区別できるものである。その多くはカマド備石として使われ、そのため被熱の著しいものである。堅穴建物に付設されたカマドの多くは、廃絶時にカマド祭祀をおこなったうえで取り崩されており、その残骸のなから出土する場合もあるが、多くは堅穴や土坑の埋土廃棄物のなかに残されている。

カマド備石

この石材はカマド祭祀の様子を探る手がかりとなるだけでなく、破片を接合することで、遺構廃絶時期の同時性を導き、かつ各種遺構の関係をとらえる資料となりうる。

出土位置

まず出土位置を検討すると、野間G区の5壱穴・6壱穴・26土坑・19土坑・30土坑・周溝建物とビット9・40、それに道路状遺構七坑34、野間I区11・12壱穴から出土している。壱穴建物のカマドに残されることは、不自然ではないにしても、野間G区の上坑やビットなどに集中するのはどうしてであろうか。カマド祭祀時に取り除いた石材の多くがこの周辺に一旦待ってこられたと考えざるをえない。カマド祭祀にいたる、壱穴建物廃絶の儀礼がここで執り行われたのではないかと考える、ひとつの状況証拠である。

野間G区

さて接合作業をおこなったところ、遺構をこえた接合例が3例認められた。

接合資料A

A 野間G区5号壱穴建物のカマド祭祀時に廃棄された2片と、隣接する大型の19号土坑下層からの1片が接合した(第5章第52図39)。被熱の様子を観察すると19土坑出土破片の赤変の程度は、5壱穴建物の破片より軽い。19土坑の破片が打ち欠かれた後も、残された2片はなおカマドに使用されたと考えられる。実際5壱穴は北カマドから東カマドに改修されており、それに対応すると考えれば、5壱穴の東カマドで使われていたカマド燗石を、北カマドに用いる際に調整し、その破片を19土坑に廃棄したといえ、その後5壱穴廃絶時のカマド祭祀で割られて廃棄されたという推測が成り立つ。しかし同じ19土坑下層から出土した接合資料⑥の須恵器鉢がほとんど同じ地点で出土しているため、最終のカマド祭祀時に破砕された1片が廃棄されたものと単純に考えることもできる。

5壱穴と19土坑

いずれにしても5壱穴が使用されていた時点、特に東カマドの時点では19土坑が併存していたことは確実である。

接合資料B

B 野間G区5号壱穴建物のカマド祭祀時に廃棄された破片と、周溝建物の周溝内出土の破片が接合した(第5章第44図30)。5壱穴は剥片で周溝建物は燗石本体である。5壱穴東カマドの石材を取り外し、打ち削った剥片はカマド祭祀遺物とともに埋め置き、残部は周溝建物の周溝内に廃棄されたと考えられる。5壱穴と周溝建物が同時期に併存していた時期があることを示している。

接合資料C

C 野間G区5号壱穴建物のカマド祭祀時に廃棄された小剥片と、26号土坑に廃棄された2片の小剥片とが、野間I区11号壱穴建物のカマドに立てたまま残された燗石本体と接合した(第5章第128図9)。5壱穴のカマド祭祀層に含まれた剥片は意図的に埋置されたものであって、本来5壱穴の東カマドで使われていた燗石の一部とみられる。その剥片と11壱穴で使われていた燗石本体が接合するので、5壱穴東カマドの燗石を11壱穴に再利用したものであると考えられる。5壱穴と11壱穴は、変則二本柱の構造、カマド祭祀に石材を多く供える習慣など、類似する要素が多いことはすでに指摘した。おそらく5壱穴からやや離れた11壱穴にカマド祭祀が引き継がれたのである。したがって5壱穴が上野3期であるから11壱穴は上野4期と考えられる。

5壱穴と11壱穴

以上のカマド石材の接合例から、5号壱穴建物と19号土坑と周溝建物が同時期の上野3期、11号壱穴建物が上野4期となることが明らかとなった。

5壱穴の石材の移動

同時に接合資料ABCはすべて5号壱穴建物が関わっており、その廃絶時のカマド祭祀の様相が石材を通して見えてくる。すなわち東カマドの石材はカマド祭祀の際、Cは剥離されて11壱穴に再利用され、AとBは破壊されてその破片の一部はカマド祭祀のため「供え」られ、残された破片は19土坑や26土坑さらに周溝建物の溝に廃棄されたことになる。石材を破壊あるいは剥離するのは土器を破砕する点と共通している。おそらくカマド祭祀の儀礼は5壱穴の南から周溝建物の北の空間でおこなわれたものであろう。

⑥ 五期編年

以上の観点からおこなった編年案を以下にまとめるが、その前に実年代観を述べておく。

実年代観

まず集落の開始年代であるが、須恵器坏蓋の17線内面に返りの付く破片は全資料の中で1・2点

であって、まだそれが一定量残る8世紀の初頭の段階ではない。したがってその次の8世紀前半から建物群が建設され始めると考えられる。次に上野3期の遺構で数多く発見される須恵器長頸壺と鉢はその特徴から8世紀中葉の古い時期に、また須恵器の坏身には8世紀末葉の型式を含まない。したがっておおよそ次のように考えられる。上野1期は8世紀第1四半期後半、上野2期は8世紀第2四半期前半、上野3期は8世紀第2四半期後半、上野4期は8世紀第3四半期前半、上野5期は8世紀第3四半期後半である。わかりやすく言い換えれば上野1期は720年代、上野2期は730年代、上野3期は740年代、上野4期は750年代、上野5期は760年代の中に、各時期の時間の1点を共有すると表現できようか(註)。

上野1期

まず東原C・D区から野間E・F区に高床倉庫を中心に側柱建物と竪穴建物が配置される。この付近のみ建物は正方位を指向する。東原C・D区では2×3間の高床倉庫と推定される13号掘立柱建物が建設され、その南に2×3間の側柱建物である6号掘立柱建物と北カマド4本柱の2号竪穴建物が併設される。野間E・F区では、2×3間の方型柱穴の側柱建物である27号掘立柱建物を中心に、そのそばに西カマドの13号竪穴建物が、やや離れて2×2間の高床倉庫である16号掘立柱建物が建てられる。この高床倉庫と側柱建物と竪穴建物という組合せはその後も一貫して見られるので、おそらく倉庫と管理棟と管理に関わる人の世帯の住居であろう。この場所は倉庫地区と評価されるが、高床倉庫と側柱建物の規模は小さなものである。

一方倉庫地区の周囲にも素朴な「宅地」ともいいうる空間が、東原A区と野間I区の2カ所に存在するようで、建物が分布するようになる。東原A区では2×3間の側柱建物である3号掘立柱建物が建てられ、そばに1号土坑が掘られている。1号土坑が廃棄土坑化しているので3号建物は住居とみてよい。野間I区では9号竪穴建物が建設される。これも北カマドの住居である。9号竪穴の周辺では40号土坑の炉などがこの時期か次の上野2期に機能したようである。以上倉庫地区を取り巻く2カ所の住居は、建物の方向が正方位とは異なり、明らかに倉庫地区と区別された「宅地」であったと推定される。

ところで倉庫地区の北には未調査ながら建物群の中心部分が存在すると推定される。おそらく倉庫地区はその中心施設の付属あるいは周辺施設として整備されたものと考えられる。周囲の2カ所の「宅地」に居住した人々も、上野台地で独立して土計を立てたとは考えがたいので、その中心施設に関わる人々であったに違いない。なおまだ水田は未開発で、湧水は集落全体の水汲み場として機能していたと考えられる。

上野2期

東原地区と野間地区全体の建物が正方位にあわせるようになり、東原A・B区には大型掘立柱建物群が建設され、倉庫地区と「宅地」の再編があわせておこなわれる。その結果東原地区の最も高い位置に「豪族居宅」と考えられる施設が、その下方の西に倉庫地区が配置され、さらに西の湧水点周辺の低い位置に、3カ所の「宅地」が設定されている。加えて「宅地」の間には湧水に向かう南北道路が作られたようである。

すなわち東原A・B区には3号建物の住居のかわりに、正方位を指向した大型規模の側柱建物である1号掘立柱建物と2号掘立柱建物が柱筋を揃えて建てられ、その西の東原B区には廃棄土坑である3号土坑と4号土坑が掘られる。廃棄土坑の存在から一定の住居機能をあわせ持った掘立柱建物群と考えられるので、その一端を調査したにすぎないが、「豪族居宅」と評価したい。

東原C・D区の倉庫地区では建て替えがおこなわれる。高床倉庫の14号掘立柱建物が、以前高床倉庫であった13号建物と同じ場所に建て替えられ、管理棟はそれまでの6号建物の北側に同一形式同規模の側柱建物である2×3間の12号掘立柱建物に、2号竪穴は同じくその北の3号竪穴建物に建て替

720年代～
760年代

上野1期

倉庫地区

「宅地」

正方位の拡大

東原A・B区

豪族居宅

東原C・D区

倉庫地区	わり、高床倉庫の14建物と12建物の間には2号柱穴列が、塙として立てられる。さらに2×2期の高床倉庫である8号掘立柱建物が、12建物と3 堅穴に軒を接して建てられる。2 堅穴の跡の凹みはおそらく廃棄土坑となっている。建物の役割は上野1期とおなじで、12建物が管理棟、3 堅穴は管理人世帯の住居であろう。おそらく2 堅穴に住んだ世帯がそのまま移動したとみてよい。なお管理棟と推定される12建物を建設する廊柱穴に刻石製品が廃棄されている。これを惟つまり計りの道具とすれば、文字が書かれているところからみて、上野1期に管理棟である6建物に備えられていた可能性があり、そこで倉庫の品物を扱うのに使われ、おそらく使った人は文字の読み書きができたのであろう。ただしその人が倉庫の管理にあたった2 堅穴の住人と同一人物であるかどうかは別問題である。そして12建物に建て替える時点で、破損していたので廃棄されたと推定される。以上のように倉庫地区が建て直される。ほとんど同じところに同じ建物を建てるといふ一見無駄なことがおこなわれているが、おそらく集落全体を統一的に正方位にあわせるという建物群配置の原則の拡大がおこなわれたために、それにともない倉庫地区の再編がおこなわれたものであろう。
櫓の廃棄	棟と推定される12建物を建設する廊柱穴に刻石製品が廃棄されている。これを惟つまり計りの道具とすれば、文字が書かれているところからみて、上野1期に管理棟である6建物に備えられていた可能性があり、そこで倉庫の品物を扱うのに使われ、おそらく使った人は文字の読み書きができたのであろう。ただしその人が倉庫の管理にあたった2 堅穴の住人と同一人物であるかどうかは別問題である。そして12建物に建て替える時点で、破損していたので廃棄されたと推定される。以上のように倉庫地区が建て直される。ほとんど同じところに同じ建物を建てるといふ一見無駄なことがおこなわれているが、おそらく集落全体を統一的に正方位にあわせるという建物群配置の原則の拡大がおこなわれたために、それにともない倉庫地区の再編がおこなわれたものであろう。
野間E・F区	逆に野間E・F区では高床倉庫と管理棟がなくなり、以前あった13建物が14号堅穴建物に建て替えられる。同じ西カマドを踏襲し廊に建て替えられているので、同じ世帯の住居の建て替えとい
「宅地」化	てよい。ただし上野1期には倉庫の管理に関わっていたが、上野2期にはおそらく独立の「宅地」を与えられているので、別な仕事についていたものと推定される。ここでは倉庫地区の一角が、周辺の「宅地」のひとつに変わっているのである。
野間G区	野間G区では新たに西カマドの6号堅穴建物が建設される。ほとんど最小世帯の住居である。もしカマドの方向が世帯の系譜を示すものならば、同じ西カマドの上野1期の13堅穴あるいは上野2期の14堅穴から分出した世帯が、この位置にあつたに「宅地」を与えられたのかもしれない。
「宅地」の分出	
野間I区	いっぽう野間I区では「宅地」は引き継ぐものの、正方位にあわせた再編がおこなわれている。以前の9堅穴からはやや離れて北カマドの12号堅穴建物が建設され、そのそばには1×2期の側柱建物である25号掘立柱建物が作られる。そして9堅穴の跡は廃棄土坑として使われるようになる。
「宅地」道路建設	おそらく「宅地」の住居と、納屋にあたる平地建物であろう。9堅穴に居住した世帯がこの「宅地」に引き続き住んだかどうかは不明であるが、この時期に湧水に向かう最初の南北直線道路が設定されたらしく土坑列が遅れているので、道路のそばに堅穴建物を建てることをはばかって、やや離れた西に「宅地」内の建物を配置したと考えて良ければ、同じ北カマドであるので9堅穴の世帯が12堅穴に移ったと見ることも可能である。
「宅地」の規制	以上のように東原地区と野間地区全体が、「豪族居宅」とその倉庫地区の再配置を契機として、「豪族居宅」を中心にした建物規制が強まり、それとともなって「宅地」の割り替えや増設がおこなわれたものと考えられる。もともと「豪族居宅」に関係することで周囲に居住することになった「宅地」の住人は、野間E・F区の状況にみるように、上野2期の建て替えにとともなって豪族から与えられる地位や役割が変化すると推定される。またこの時期から湧水は単なる水汲み場ではなくなり、集落の外から人を導きいれるような重要な役割を担うようになったと考えられる。
大規模建設	上野3期 東原地区と野間地区の全体で正方位を踏襲しながら、「豪族居宅」を中心にした大規模な建設と再配置がおこなわれる。東原A区にあったそれまでの「豪族居宅」は東原C・D区に移転し、そこにあった倉庫地区は野間E・F区や東原B区に分転移され、野間E・F区の「宅地」はふたたび倉庫地区になった。さらに道路の改修と水場状遺構の建設にとともなって、野間G区の「宅地」は祭祀施設を中心にした祭祀場に生まれ変わり、そのうえ野間I区の「宅地」には水場状遺構から続く広場をともなう大規模掘立柱建物群が建設される。この建設作業は同時におこなわれた可能性が高く、堅穴建物を埋めて整地し、正方位もより厳密に一致するようになる。

東原A区は無住空間になり、東原B区には2×2間の高床倉庫である4号掘立柱建物と1号竪穴建物がセットで建てられる。後者は管理人の住居であろうが世帯で住んだかどうかは疑わしい。上野2期の倉庫機能の一部がここに分散していることになる。

東原B区
倉庫移転

東原C・D区は倉庫がまったくなくなり、3×5間の上野第1遺跡最大の側柱建物である10号掘立柱建物を中心に、その北には側柱建物の15号掘立柱建物が、10建物の南側面には3竪穴と2竪穴の門みを整地して、2×3間側柱建物の7号掘立柱建物が直交して建てられ、その背後には小さな2×3間側柱建物の5号掘立柱建物が建てられる。なお11号掘立柱建物も同時期の可能性が高い。一方西南側には目隠し塀の1号柱穴列があり、その背後に簡易な建物である9号掘立柱建物が隠されるように建てられていた。同時に建物の周囲には9・10・14号土坑などが掘られ廃棄土坑として使われている。竪穴建物をとまわず掘立柱建物のみからなり、しかも大型建物を中心にL字形に建物を配置している点からみて、「豪族居宅」であるといえる。周囲に廃棄土坑が数多くあり、一角に居住機能があったことは確実で、居宅と考える所以である。なおこの建物群を建設するにあたって、それまであった3竪穴は強制的に廃絶して整地されている。おそらく豪族の意志に従って移転したのであろう。以上のようにそれまでの倉庫地区を、管理人の世帯ごと移転させ、敷地を整地した上で、「豪族居宅」を建設している。

東原C・D区

豪族居宅

野間E・F区は、まず2×3間側柱建物の28号掘立柱建物を中心に、その北に2×3間の高床倉庫である26号掘立柱建物が建てられ、西には2×2間の高床倉庫である17号掘立柱建物が配置される。その北には北カマドの4号竪穴建物が建てられる。28建物が倉庫群の管理施設で、4竪穴が管理人世帯の住居であると見られる。28建物の南に、庇をもつ29号掘立柱建物があり方向が一致するので同時期と見られるが正体不明である。ところで4竪穴は北カマドで変則4本柱の竪穴建物である。カマドの方向の一致からすると強制的に廃絶された東原C区の3竪穴からここに移転した可能性が高い。そう考えてよければ、上野2期の倉庫地区をそのままここに移したと評価される。

野間E・F区

倉庫地区の
移転

野間G・H区では、6竪穴が埋め戻され、それまで空閑地であった場所に、北カマドの5号竪穴建物が建てられる。さらに道路状遺構が改修されて水場状遺構が設けられ、その東側に祭祀施設である棟持柱の20号掘立柱建物が建てられる。周囲には周溝をめぐらし、出入口を湧水に向けて目隠し塀の3号柱穴列を立てている。さらにその周溝建物から5竪穴にかけての空間には形態の異なる土坑や小土坑が集中し、カマド石材などのカマド祭祀に関わって廃棄された遺物が集中するところから、周溝建物とひとつになって祭祀場を形づくると考えられる。なお5竪穴はこの期間中に東カマドの変則二本柱の竪穴建物に改築される。道路・水場・祭祀場が一体となって整備されているのである。それまでの6竪穴の「宅地」は当然別の場所に移転したと考えられる。

野間G・H区
道路と水場

「社」建築
祭祀場

野間I・L区でも、大きな変化がおこなわれる。まず12竪穴が突然埋め戻されて整地され、上野2期の「宅地」は丸ごと調査区外の別な地点に移転したと推定される。かわって道路に面した東底の21号掘立柱建物を中心に、3×4間の側柱建物である23号掘立柱建物と2×3間の側柱建物の30号掘立柱建物が柱筋を合わせて建てられる。おそらく方向の揃う33号掘立柱建物も併存した可能性が高い。そして23建物と30建物の南側から水場状遺構までは広場となる。12竪穴が整地されたのもこの広場を整備するためであろう。広場から水場状遺構にはそのまま降りることができるように階段状に工夫されており、この建物群が水場状遺構と一連のものでもあったことが理解される。この掘立柱建物群の特徴は周囲に廃棄土坑をまったくともなわず、その点が東原C・D区の「豪族居宅」とは対照的である。その「豪族居宅」から見下ろされる位置にあるこの建物群は、「豪族居宅」を訪ねる人々を泊めたり、もてなすための「客館」の施設で、豪族の対外的活動をおこなう公的場と推定される。こうしてそれまでの「宅地」は豪族の「客館」になったと考えられる。この時期にこの建物群の西側では粘土採取がくりかえされたらしく45号土坑が掘られ、水田化以前の野間M区で

野間I・L区

南に広場

「客館」?

粘土採取	は、この時期まで水田下土坑の掘削がつづいていと見られる。 以上の上野3期の状態が、奈良時代の上野第1遺跡の最盛期といえる。
	上野4期
居宅の移転	以上の大規模に整備された掘立柱建物群の大半が姿を消し、急激に規模を縮小する、おそらく「豪族居宅」と倉庫群が上野台地から移転したらしく、野間G区の祭祀場付近と野間I・L区に「宅地」の一部が残されるが、その性格はがらりとかわり、野間M区では湧水を利用した水田が開かれ、それに降りる道と祭祀施設が設けられて、農村的景観に変化する。
農村へ	東原地区からは建物が一斉になくなり、同時に野間地区の周溝建物や道路や「客館」も一斉になくなる。道路はおそらく下部構造物まで抜き取られ、周溝建物の周溝は廃棄坑となり、4号堅穴の跡には須恵器等を大量に廃棄する一括廃棄がおこなわれて埋没する。
野間H区	野間H区の祭祀場のあとには、東カマド変則二本柱の30号土坑（堅穴建物）が、5堅穴の隣に建て替わる。おそらくそれまで祭祀場を管理した人の住居である5堅穴の世帯は上野第1遺跡に残り、二つの世帯にわかれ一方は祭祀場の跡に30号土坑（堅穴建物）を建て、分出した世帯は、そのまま隣の「宅地」に11号堅穴建物を建てて移っている。おそらくこの5堅穴から30号土坑と11堅穴に住んだ人々は棟持柱をもつ変則二本柱の住居を伝え、カマド祭祀の際には石材を「供える」という習慣を身につけた人々で、祭祀場の建設とともににはじめて登場したことを思えば、彼らは祭祀の執行に精通した人々であったと考えられる。
祭祀人の 残骸と分出	さて野間I・L区では、ふたたび堅穴建物を中心とした「宅地」が復活する。北カマドの8号堅穴建物がかつての道路のすぐそばに、5堅穴から分出した北カマドの11号堅穴建物がやや離れて、さらに32号掘立柱建物が建てられ、そばに38号土坑が掘られている。以前の「宅地」と異なるのは、規模が大きいことである。同一の「宅地」内に堅穴建物2棟と掘立柱建物が存在している。いずれも住居とみられるのである。そしてその「宅地」の西には水田に降りる道として19号溝が切り通されている。この「宅地」の規模が大きい原因は、野間M区の水田開発とその水田を耕作管理する役割を担ったからであろう。ところで再度設定された「宅地」の住人のうち11堅穴は5堅穴から分出した祭祀人の住居と考えられることは先にふれたが、水田開発にともなって掘られた44号土坑の祭祀坑に据えられた須恵器等を祭ることが、あらたな役割として与えられたものと推定され、そのため「宅地」内の祭祀坑に一番近い場所に住居を与えられたに違いない。その際カマドの方向を東から北にかえたのは、まさに招かれた先の「宅地」の習慣に従ったのであろう。いっぽう8号堅穴建物の世帯はどうだろうか。実は8堅穴は上野2期の「宅地」に存在した12号堅穴建物とそっくりなのである。北カマド、地山崩り出しの袖部、右脇の作り付けられた小七坑、カマド祭祀のピットなど、堅穴建物の作り方から、廃絶時の祭り方まで同一といっても良い。つまり上野3期に豪族の「客館」建設のため別の場所にいったん移転したその同じ世帯が、ふたたびこの「宅地」に戻ってきているのである。そして以前は豪族の居宅に間違って生活していたものが、今回は水田耕作と関わることになったわけである。おそらく「豪族居宅」が移転したのちも、この台地上の土地と湧水になお豪族の権利が残り、水田を開発したうえで、関係者の「宅地」をあてがって耕作と湧水の管理にあたらせたと考えられる。
道と祭祀坑	
水田開発	
住人復帰	
転用祝の 廃棄	さて上野4期にはこのように変化するが、建物の方向は依然正方位にあわせている。おそらく「豪族居宅」が設定された際の正方位のプランがお台地上では生きているのであろう。そして上野4期の終わる8号堅穴建物廃絶時に、その床面にまだ使える状態の転用祝が廃棄されるのである。豪族の居宅が移転した後、上野4期の「宅地」に住む人々に残された仕事は、水田耕作と湧水の管理、それにまつわる祭祀などにすぎなくなっていたと考えられることから、文字を使う必要がなくなっていると見られるのである。このような事態の変化を象徴するのが転用祝の廃棄ではあるまいか。

上野5期

野間M区の水田はやや拡大されるものほとんど変わらず、水田に降りる道と祭祀坑は維持されている。一方集落は建て替えが進む。野間M区では東カマドを踏襲して30土坑から7号竪穴建物に変わり、野間I区では「宅地」内に15号竪穴建物が、9竪穴と同じ場所から北カマドを踏襲して、そのそばには2×3間の側柱建物である24号孤立柱建物が建てられる。祭祀人の住居はなくなり、系譜不明の西カマドをもつ10号竪穴建物が建てられる。いずれも正方位にあわせて建てられており、上野4期の状態を維持している。すなわち湧水の管理とそれを祭る祭祀人の住居が7竪穴で、水田耕作とその管理をおこなう人々の施設が野間I区の「宅地」である。

こうして「家族居宅」と倉庫群が移転した後も2時期にわたって同一系譜の住人が集落に居住したものと推定されるが、その集落も770年前後にこの場所から移転してしまう。おそらく残されたのは祭祀性がなくなった湧水と、それを利用した水田のみであり、建物のあった場所は原野に戻るか、畠になったと推定される。

⑦ 建物の存続期間

以上の検討から明らかなことは建物の継続時間の短さである。掘立柱建物と竪穴建物は10年から10数年で頻繁に建て替わる。建て替えや引っ越しが頻繁におこなわれているのである。おそらくここに居住した人は一生のうち、上野台地への引っ越し、建物の建て替え、「宅地」の移転などをおとし、数度にわたり、移転を経験しているのである。われわれが考える以上に簡単に建て替わるのである。この点は特に集落研究において顕に止めなければならない。

注. 田崎博之「千湯遺跡出土土器の編年」『千湯遺跡』1980 福岡県教委

山村信榮「八世紀初頭の瀬戸問題」『大宰府陶磁器研究』1995 森田勉遺稿集・遺稿集刊行会

第3節 奈良時代以後

3-1 中世

奈良時代以後において継続的に利用されたのは、野間M区の水田谷を利用した水田のみである。それ以外の遺構はほとんどなく、わずかに遺物の内容から推測しうるにすぎない。

遺構としては野間I区22号溝のみで中国同安窯青磁碗片が出土し、13世紀ごろの遺構と推定される。ほかに中世には野間M区の水田が継続していたと推定される。集落から離れた谷の水田として耕作されていたと考えられる。

遺物は12～13世紀の遺物として野間G・H区採集の陶器四耳室片、野間G区13溝残留の毫泉窯青磁碗底部再加工品、野間M区上層水田出土の毫泉窯青磁蓋弁碗片、野間M区水田上層出土の中国玉縁口縁白磁碗と野間M区中層水田毫泉窯青磁蓋弁碗片2点などがある。

16世紀の遺物も認められる。東京C区8号溝残留の中国景德鎮染付皿片、野間E・F区採集の明染付や壺付きに胎土目のある朝鮮李朝白磁碗底部などが出土している。ほかに滑石製石鍋口縁部が野間G・H区で採集されている。

全体に12～13世紀の遺物と16世紀の遺物が多く、この二つの時期に、遺構は残していないもの水田耕作に関連して人々が頻繁に訪れる状況があったことがわかる。

3-2 近世以後

この台地上での奈良時代以来の大きな画期が訪れるのは近世である。集落が存在するわけではな

水田と道

「宅地」改修

その後

建物の短期性

水田

12～13世紀

16世紀

畠地整備

1910年代まで となる溝が掘られて、畝地の区画割りがおこなわれる。その際各所に道も整備されている。以上の区画と畝地境界溝は大きく変化することなく、1910年代の耕地整理による水田化まで用いられている。

① 畝地境界溝

18世紀 1888年頃の地籍図の地割りと基本的に一致する溝が多数発見されている。また調査によって明治中期つまり近代の耕地区画の起源が江戸時代中期に遡ることが判明した。

畝地境界溝の特徴

遺構と特徴を整理すると以下ようになる。

- 1、方形あるいは長方形の区画をつくり、周辺部は地形にあわせて矩形になっている。
- 2、溝に隣接して設けられた凹形土坑は、畝用の肥溜めである場合がある。野間H地区B号土坑などである。
- 3、溝は境界であるとともに、道として機能している。谷に降りる溝には階段状に削りだすのが水場状遺構付近の12号溝で知られている。
- 4、平行して二重になる場合がある。そのあいだは道あるいは境界である。水場状遺構付近の10号溝と10号溝の副は野間L区の畝地へ向かう道になっている。
- 5、掘り直しがあり、少しずつずれていく。平原E・F区の2・4・5号溝。
- 6、断面形態にはU字形と逆台形がある。
- 7、大区画と小区画があり、次第に分割されていく状況が認められる。東原B・C区、野間I区などで認められる。
- 8、斜面においては一部削平をおこない、段落ちが形成される。野間E区24号溝付近。

掘削の時期

18世紀から 出土する遺物から推定する以外にない。基本的には18世紀後半から1910年代のものまでである。17世紀の遺物をほとんど見ないことからすると、18世紀代に畝地境界溝が掘られた可能性は高い。

底面の高低差からみると掘削の時期は2時期にわたる。地形に一致するものが古く、地形と無関係に水平なものは新しい。別に畝地の耕作が進み水平化が進んだ段階に、畝がさらに最分割されていくようであるが、その時期は不明である。

第4節 まとめと課題—上野第1遺跡の奈良時代遺跡の性格—

最後に奈良時代の上野第1遺跡の全体像を検討しよう。

官舎ではない 豪族集落の規模と内部構造 奈良時代の遺構が郡衙や駅家あるいは群倉などの官舎施設そのものでないことは、個々の掘立柱建物や高床倉庫を比べた場合、その規模の小ささから明らかである。

豪族集落内部構造 それゆえ上野第1遺跡の奈良時代の建物群全体を豪族住宅を中心とした豪族集落とみたい。すでに触れたようにそれは大型掘立柱建物から構成される居宅地区と、高床倉庫とその管理施設および住居からなる倉庫地区を中核に、時には祭祀地区と「客館」的施設を置き、道路さえ引き込んでいる。さらに周囲に豪族の家政に仕えるかと推定される従者の「宅地」を点々と配置している。

正方位 余体を豪族集落と考えるのは居宅地区や倉庫地区のみならず、上野2・3期には建物の方向を一致させる正方位の磁場が「宅地」にさえ及ぶようになるからである。その規制は掘立柱建物のみならず竪穴建物にも及んでいる。その正方位の磁場の及ぶ範囲は、最大で東原地区と野間地区の東西250mにわたる。調査区外の北側にも当然遺跡は広がると推定されるので、上野台地東半には方二

方二町超 町をこえる規模の、建物の方向を統一的に規制した空間が存在していたと考えられる。しかも全面

的な建て替えがおこなわれた際には、東西両端の建物まで一斉に建て替えられている。このように遺跡全体に及ぶ統制があったと考えられる。規制を発する中心はおそらく居宅地区であり、その移動にともなって倉庫地区や周囲の「宅地」が移転させられているのである。しかも「宅地」の移転先は正方位の磁場の及ぶ範囲であることが、住居の移動例からみて明らかである。つまり周辺の「宅地」は豪族集落全体の再編計画にもとづいて、割り替えられるのである。恐らく上野2期に遺跡全体に正方位プランが設定された時に、その中に「宅地」の範囲と位置が決定されたものと推定される。このように規制された空間全体を豪族集落と考えたい。それは、全体として豪族居館と考えることもできる。しかしなお個々の施設や「宅地」を分割する明確な溝や横列などは存在しないので、豪族の「館」とは呼べないし、「宅地」の居宅への従属性からみて単なる集落とも都市的な空間とも呼べない。古代豪族の「宅」のイメージに近いと考えられる。

豪族集落立地の特殊性 どうしてこのような大規模な豪族集落が、上野台地に建設されるのであろうか。旧石器時代から現代にわたる遺跡全体の変遷をみても明らかのように、上野台地のなかで集落が立地したのは弥生時代の台地北端部のみで、上野第1遺跡の立地する台地南部に、集落はいかなる時代にも存在しない。遺跡が存在するのは奈良時代のみであるといっても過言ではない。この奈良時代に遺跡についての特記すべき特徴をまず考えねばならない。

日田市内では、水田耕作不能の台地上に立地する奈良時代の遺跡として、小迫辻原遺跡が知られているが、そこは大型建物群がL字型に配置され、明らかに班田農民の集落とは異なった豪族の拠点である(註1)。上野第1遺跡もまったく同様な立地である。このように日田盆地でのそのような奈良時代の大規模遺跡の台地への進出は、郡司級の豪族の権力による背景が必要であったと思われる。しかしそれだけで上野台地に進出するだろうか。

駅路の存在 この遺跡が官衛施設そのものではないことは先に指摘した。「豊馬豊馬」銘の刻書石製品の出土から古代の日田郡に所在した石井駅ではないかという説も退けられる。

しかし上野台地上が中近世の三隈川南岸の主要交通路にあたる点と、古代の日田郡に所在した石井駅が三隈川南岸を領域とする石井郷のなかに存在する点からみて、石井駅に達する古代の駅路がこの上野台地上を通過していたことは、石井駅を三隈川北岸に想定しないかぎり、ほぼ間違いない。そう考えると上野第1遺跡の方二町をこえる範囲に広がる豪族集落は、その駅路に接して建設されていたと想定される。道路状遺構は駅路から直線的に湧水に向かって造成された可能性さえ指摘できるのである。

駅家との関係 ところで豪族集落が建設された720年前後は、諸国は郷里制で編成されていた。「豊後風土記」によれば、その頃の日田郡は5郷14里1駅家であり、1郷3里の原則からして、駅家の置かれた郷は2郷からなる小郷と、独立した行政区画としての駅家からなることが指摘されている(註2)。そうすると日田郡の場合、石井郷は2里の小郷で、石井駅家がひとつの里に対応する行政単位であったことになる。その石井駅を中心施設を、最も可能性の高い場所である高瀬糸里の広がる高瀬中段段丘上に考えた場合、上野第1遺跡はその1km以内の近至に存在する。おそらく郷里制の施行されていた715~740年ころの上野第1遺跡は、行政区画としての石井駅家の範囲に含まれていた可能性が高いことを指摘しておきたい。

以上から、上野第1遺跡の豪族集落は、建設される前提として駅路の存在があり、また石井駅家と関係の深い郡司級の豪族が、石井駅家の領域の中に建設したものと考えられる。

〈註および参考文献〉

註1. 土居和幸・行時志郎『小迫辻原遺跡発掘調査概報』1990 日田市教育委員会

註2. 関和彦『風土記と古代社会』塙書房 1984

参考文献. 日野尚志『日田周辺における古代の歴史地理学的研究』九州文化史研究所紀要116 九州大学文学部

「宅地」割替

集落不連続

小迫辻原例

豪族権力

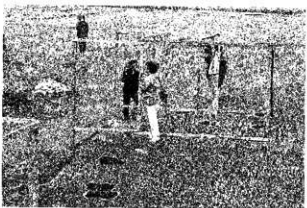
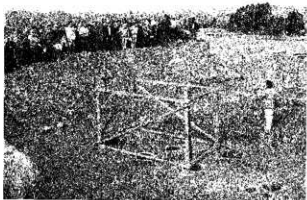
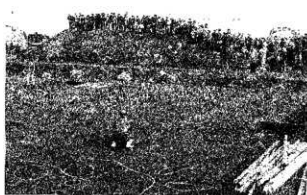
駅路の存在

郷里制
石井郷と
石井駅家

1993（平成5）年1月24日、日曜日上野第1遺跡の現地説明会を催した。日田市教育委員会と建設省の協力のもと、埋め戻された東原地区を駐車場に、盛り上げた表土の山をならして展望台にして、野間地区の奈良時代集落の跡を見てもらった。当日は真冬にも関わらず好天にめぐまれ、参集した人は200人を超え、1988（昭和63）年1月の小迫辻原遺跡の現地説明会以来の人数と噂された。ちなみに小迫辻原遺跡の現地説明会は気温零下降雪のなかであった。

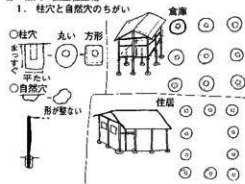
右の写真でもわかるように、掘立柱建物をイメージしてもらうために、木材を実際の柱穴に立て柱を組んでみた。この木材は冬の現場の必需品である焚火のためもってきた、廃材一軒分の一部である。説明は遺構を巡りながら、下の絵を大きくしたパネルを持っておこなった。田圃と畑以外なかった台地に、かつて奈良時代のいつとき村があり建物が連なっていたことにみんな驚いていた。

右の写真は、諸岡郁氏から提供していただいた。

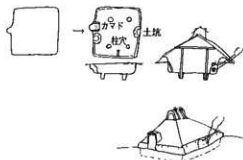


① 柱穴＝掘立柱建物

1. 柱穴と自然穴のちがい



② 竪穴住居



遺構一覽表
遺物觀察表

第1表 上野第1遺跡孤立柱建物跡および柱穴一覧表

遺構名	調査区	規模(東西×南北)	新行(遺構)方向と方位角	桁行(建物)長(m)(中心距離)	築間(建物)長(m)(中心距離)	築間(遺構)長(m)(中心距離)	位置(遺構)長(m)(中心距離)	規模	単位(坪×30)	分類	時期	備考
1号孤立柱建物跡	東原A区	1以上×3	東西横 94°	695	200以上	200以上	14.0以上	大塚?	231×200	B-IIa類	奈良時代	北平調査区外。
2号孤立柱建物跡	東原A区	2?×1以上	南北横? 352°	240以上	397	397	9.6以上	中塚?	240×199	B-IIa類	奈良時代	北平調査区外。
3号孤立柱建物跡	東原A区	2×3	東西横 105°	577~587(682)	395~402(399)	395~402(399)	23.3	中塚	199×199	C-I類	奈良時代	—
4号孤立柱建物跡	東原B区	2×2(礎柱)	南北横 4°	314~322(316)	256~268(262)	256~268(262)	8.4	倉小塚	159×131	B-IIa類	奈良時代	—
5号孤立柱建物跡	東原C区	2×3	東西横 97°	418~431(425)	304~315(310)	304~315(310)	13.1	小塚	141×154	B-IIb類	奈良時代	—
6号孤立柱建物跡	東原C区	2×3	南北横 12°	480~508(494)	322~342(332)	322~342(332)	16.8	中塚	164×166	B-I類	奈良時代	—
7号孤立柱建物跡	東原C区	2×3	東西横 98°	600~602(601)	348~352(350)	348~352(350)	21.1	中塚	200×175	B-IIa類	奈良時代	2、3型穴を埋めて置てる。
8号孤立柱建物跡	東原C区	2×2(礎柱)	南北横 7°	302~328(315)	255~210(283)	255~210(283)	8.9	倉小塚	157×142	B-IIa類	奈良時代	10土に切られる。
9号孤立柱建物跡	東原C区	2×2(礎柱)	南北横 8°	415~430(423)	293~310(301)	293~310(301)	13.4	倉中塚	211×150	C-IIa類	奈良時代	—
10号孤立柱建物跡	東原C区	3×5	南北横 4°	950	453	453	(43.0)	特大塚	190×151	A-IIa類	奈良時代	8柱12礎を切る。
11号孤立柱建物跡	東原C区	?×2以上	東西横 92°	327以上	?	?	?	—	164×?	C類?	奈良時代	人平は調査区外。
12号孤立柱建物跡	東原C区	2×3	南北横 7.5°	464	337	337	(14.0)	小塚	154×168	B-IIb類	奈良時代	10礎に切られる。 15より型石が出土。
13号孤立柱建物跡	東原C区	1以上×2以上(礎柱)	南北横? 2°	378以上	171以上	171以上	8以上	倉中塚	189×171	A-II?類	奈良時代	一部の穴埋止。
14号孤立柱建物跡	東原C区	?×2以上?	南北横? 7.5°	371以上	—	—	—	—	186×?	A類	奈良時代	13礎物を切り、15礎物に切られる。
15号孤立柱建物跡	東原C区	?×3	南北横 5°	469	—	—	?	倉小塚	156×?	B類	奈良時代	13、14柱礎を切る。
16号孤立柱建物跡	新開F区	2×2(礎柱)	南北横 2°	330~332(331)	286~272(269)	286~272(269)	8.9	倉小塚	166×135	BまたはC-IIa類	奈良時代	—
17号孤立柱建物跡	新開F区	2×2(礎柱)	南北横 12°	326~347(337)	255~285(271)	255~285(271)	9.1	倉小塚	169×136	BまたはC-IIa類	奈良時代	—
18号孤立柱建物跡	新開F区	2×1以上	東西横 110°	—	378	378	—	—	?×189	B類	奈良時代	大平を調査。
20号孤立柱建物跡	新開H区	1以上×3	南北横 10°	640×658(649)	475~476(476)	475~476(476)	30.9	大塚	216×238(238)	A-IIb類	奈良時代	礎柱をきつ。
21号孤立柱建物跡	新開I区 (灰ひきし付?)	2×1以上	南北横 15°	411~568	—	—	—	大塚?	206×?	B類	奈良時代?	北は大塚が調査区外。
23号孤立柱建物跡	新開I区	3×4	東西横 102°	724~758(740)	410~448(429)	410~448(429)	31.8	大塚	185×143	B-IIa類	奈良時代	風雨が降まされている。
24号孤立柱建物跡	新開I区	2×3	東西横 98°	401~415(408)	310~335(329)	310~335(329)	13.1	小塚	136×161	B-I類	奈良時代	25礎物を切る。
25号孤立柱建物跡	新開I区	1×2	南北横 11°	405~418(412)	288~272(270)	288~272(270)	11.1	小塚	206×270	B-I類	奈良時代	24礎物に切られる。
26号孤立柱建物跡	新開E区	2×3(礎柱)	東西横 100°	416~426(421)	312~329(321)	312~329(321)	13.7	倉中塚	140×160	Aor B-II類	奈良時代	西部を調査される。 14礎穴を切る。
27号孤立柱建物跡	新開E区	2×3	南北横 0°	600	365	365	(21.6)	中塚	200×183	A-IIa類	奈良時代	西北部を調査。 14礎穴は全て方形。

※築間を2分した数値

29号獨立柱建物跡	野間B区	2×3	南北棟 11°	481~492(487)	338	16.5	小型	162×169	B-I類	奈良時代	東生原を一般埋葬、 14墓穴を切る。
29号孤立柱建物跡	野間E区 (北十西9号7号?)	3×?	南北棟? 105°	435~562	—	—	大塚	145×?	C類	奈良時代	南は大生山遺跡区外、 上55と重複。
30号獨立柱建物跡	野間J区	2×3	東西棟 100°	614~615(615)	394~402(398)	24.4	中型	205×199	A-I類	奈良時代	9墓穴を切り、8・15墓穴 に切られる。
32号獨立柱建物跡	野間I区	2×1以上	東西棟 104°	220以上	318	7以上	小型?	218×159	C-IIa類	奈良時代	西端を埋平されている。 33建物と重複。
33号獨立柱建物跡	野間I区	2×3	東西棟 108°	467~469(468)	304~305(304)	14.2	小型	156×152	B-I類	奈良時代	西端を埋平されている。 32建物と重複。
51号獨立柱建物跡	平原A区	2×3	南北棟 26°	648	412	(25.3)	中型	216×206	A-I類	奈良時代	—
52号獨立柱建物跡	平原A区	2×2?	東西棟? 66°	382	310~312(311)	11.9	小型	191×156	B-IIa類	奈良時代	59建物と重複。 北生山遺跡区外に 北2・6は埋平されている。
53号獨立柱建物跡	平原A区	2×2以上	南北棟 33°	372以上	440	13以上	大塚?	186×220	A-IIIb類	奈良時代	北生山遺跡区外に 北2・6は埋平されている。
54号獨立柱建物跡	平原A区	1以上×3	東西棟 71°	485	—	—	小型	161×?	C類	奈良時代	北生山遺跡区外に 51部に切られている。
遺構名	調査区	須藤(須藤×須行)	新行(須藤)方向と 方位角	長さ(cm) (中心距離)	築造(埋込)深(cm) (中心距離)	片断積(㎡) ()は推定	—	平均	分類	時期	備考
1号柱穴列	調査区	3間(4本柱穴)	南北 4°	400	—	—	—	133	B類	奈良時代	—
2号柱穴列	東原D区	3間以上(4本柱穴)	東西 105°	288	—	—	—	96	C類	奈良時代	—
3号柱穴列	野間H区	3間(4本柱穴)	南北 356°	365	—	—	—	122	C類	奈良時代	高麗建物の付属施設。

第2表 上野第1遺跡竪穴建物跡一覧表

遺構名	調査区	平面形状	長さ(m)	短辺長(m)	長辺方向	深さ(m)	柱脚寸法(中心距離)	主柱穴数	分類	カド等	内部土坑	床面	カド埋配	時期	備考
1号竪穴建物跡	東區B区	長方形	330	280	東西 96.5°	8.3 (小型)	—	0	B	地床層 (東區B)	東北1ヶ所	ふみしめ	なし?	奈良時代	周溝あり。自然露出。
2号竪穴建物跡	東區C区	方形	465	465	南北 11°	21.0 (中型)	175×160	4	A1	カドB1~B3 (北區中央) (つくりなおしあり)	東北2ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	一部周溝あり。 床下七柱の跡あり。 カドが新築後遺立。→7建跡に 切られる。
3号竪穴建物跡	東區C区	方形?	480	480	南北? 0°	18以上 (中型)	—	0	B	—	内周南1ヶ所	掘り床	不明	奈良時代	一部周溝あり。 人集りに関心立てられている。 →7建跡に切られる。
4号竪穴建物跡	野區I区	方形	492	480	東西 104°	22.0 (中型)	180	2	A2	カドB2 (北區中央)	カド北周1ヶ所 東側周1ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	一部周溝あり。 →7建跡により再設。
5号竪穴建物跡	野區G区	長方形	480	410	南北 6°	18.0 (中型)	380	0~2	B~C	カドC カドB1 (東區中央)	東側周2ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	カドが新築後すぐに再設。 (ゴミ穴範囲)
6号竪穴建物跡	野區G区	方形	340	330	南北 353°	9.0 (小型)	—	0	B	カドB1B2 (北區中央)	カド北1ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	周溝あり。カドが新築後遺立。 →自然露出。(ゴミ穴範囲)
7号竪穴建物跡	野區G区	長方形	390	390	南北 9°	10.0 (小型)	—	0	B	カドB1 (東區中央)	カド北1ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	周溝建物を含む。 自然露出。(ゴミ穴範囲)
8号竪穴建物跡	野區I区	方形	600	(560)	南北 —	30.0 (大型)	—	0	B	カドB3 (北區中央)	カド東1ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	9型穴と30建跡を含む。自然露 出。(ゴミ穴範囲)→、15型穴に切 られる。
9号竪穴建物跡	野區I区	長方形	480~490	400~410	東西 119°	18.0 (中型)	—	0	B	カドA (北區中央)	西側周1ヶ所 東側周1ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	一部周溝あり。 自然露出。(ゴミ穴範囲)→30建 跡に切られる。
10号竪穴建物跡	野區I区	長方形	380	320~360	南北 15°	12.0 (小型)	—	0	B	カドA (西區中央)	カド南1ヶ所 東側周1ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	一部周溝あり。 カドが新築後に掘め直し。
11号竪穴建物跡	野區I区	長方形	370~390	330~350	東西 102°	12.0 (小型)	300	2	C	カドB2 (北區中央)	なし	ふみしめ	あり	奈良時代	12型穴を含む。
12号竪穴建物跡	野區I区	長方形	500~510	380	東西 101°	19.0 (中型)	—	0	B	カドA (北區中央)	カド周囲3ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	11型穴に切られる。 カドが新築後掘め直し敷地。
13号竪穴建物跡	野區E区	方形?	420	300以上	南北 16°	12以上	—	0	B	カドB2 (西區中央)	海内周1ヶ所 東側周1ヶ所 (54±)	不明	あり	奈良時代	大半を削平されている。 大半を削平される。 人集りに関心立てられている。→28建跡 に切られる。
14号竪穴建物跡	野區B区	長方形	480以上	(420)	南北 8°	(20.0) (小型)	—	0?	R	カド (西區中央)	—	ふみしめ	—	奈良時代	9・8型穴と30建跡を含む。 自然露出。(ゴミ穴範囲)
15号竪穴建物跡	野區I区	長方形	390	(320)	東西 103°	11.7 (小型)	—	0	B	カドB3 (北區中央)	カド東1ヶ所	掘り床	あり	奈良時代	

第3表 上野第1遺跡土坑一覽表

調査区	遺構名	形状 (平面・断面)	分類	規模(m)		時期	用途	遺構構築・埋没状況	備考
				長さ	高さ				
東原A区	1号土坑	長方形一凹状	B1	224	128	奈良時代	竊土坑	条溝から、土層・竊土などを収蔵。	3建物の付設。
東原A区	2号土坑	不定形一凹凸	E3	395以上	180~210	近世	不明	近世・近世の陶器を含む。	1・2・3層と同一時期。
東原A区	A号土坑	円形?一柱穴状	A?	100	36以上	近世	不明	焼土・灰層が互層となる。近世陶器を含む。	—
東原B区	3号土坑	長方形一凹状	C4	195	136	奈良時代	土取り?	西側より竊土・掘削跡(2層)	遺物は、4斗形と2層穴の片土層層と混合する破片あり。竊土・掘削方位角91°
東原B区	4号土坑	長方形一凹状	B1	300	180以上	奈良時代	竊土坑	南側から竊土・掘削跡が短距離に露出されている。	上平はかきなり、水田造成時に南平さされている。
東原B区	5号土坑	長方形一凹状	C4	145	130	近世	—	—	上平はかきなり、水田造成時に南平さされている。竊土方位角15°→近世溝の方向と一致する。
東原B区	7号土坑	方形一平皿	G2	173	163	近世	—	—	3層にとりつきように露出している。竊土方位角105°
東原C区	8号土坑	不定形一凹凸	E3	285	100~150	奈良時代	—	—	7建物の柱穴に切られる。
東原C区	9号土坑	長方形一凹状	B1	238(185)	120(90)	奈良時代	不明	5層にわかれ、F・中層に竊土・灰・土層の片を含む。	竊土坑。
東原C区	10号土坑	長方形一凹状	B4	294	188	奈良時代	土取り	6層にわかれ、2層と4・5層に2回の掘削跡がみられる。	8建物を切る。7建物の1層。
東原C区	11号土坑	奇曲した船底形一皿状	D1	373	186	縄文時代	不明	車輪(如山土のプロックと土層片を含む)。	2層穴に大半が埋没されている。
東原C区	12号土坑	長方形一凹状	B1	145	105	近世	—	竊削跡のプロックを多く含む。無遺物。	7層に切られる。
東原C区	13号土坑	長方形一凹凸	B3	144	118	奈良時代	土取り?	竊土・灰化	7取り目的の穴か。一方所が深くなっている。
東原C区	14号土坑	不定形一凹凸	E3	520	250~300	奈良時代	竊土坑	2層に分かれ、下層・掘削跡のちのち灰化	3層穴と一致。
東原D区	15号土坑	長方形一皿状	B1	104以上	121	奈良時代	竊土坑	竊土・灰化	(足跡と竊土層の片が付く用か)
東原C区	16号土坑	円形?一皿状	A1?	103	56以上	近世	—	—	—
東原G区	19号土坑	長方形一平皿	B2	450	440	奈良時代	不明	1層と下層の2層層の一部露出がある。	川内町第一ゴミ処理場、5層穴と一致。
東原G区	20号土坑	長方形一平皿	B2	107	83	奈良時代	不明	竊土層に竊土・灰を多量に含む。→発掘調査物を収蔵。	1層掘土層層(No.1)は遺構伏連層の上1層と一致
東原G区	22号土坑	不定形一平皿	E2	220	175	奈良時代	竊土坑	竊土・灰等か多量に露出。	—
東原G区	23号土坑	円形一凹凸	A3	193	171	奈良時代	自然土坑	—	底面に径5~10cmの小ピットが多数。木の株の可能性高い。

調査区	遺構名	形状 (平面・直観)	分類	規格(m)		時期	用途	遺構概要・埋没状況	備考
				長さ	幅				
野南G区	24号土坑	長円形-平皿	B2	67	10	奈良時代	不明	—	—
野南G区	25号土坑	長円形-皿状	B1	115	23	奈良時代	不明	—	—
野南H区	26号土坑	長円形-皿状	B1	85	15	奈良時代	不明	灰土ブロックを多く含む。→型穴を1方向に用いる?	カマド銅片が、11区7カマドF2と接合。
野南G区	28号土坑	扇形-皿状	D1	172	20	奈良時代	不明	—	—
野南G区	30号土坑	長円形-平皿	C2	435	10	奈良時代	不明	灰土・土忍片などが集中する部分が2ヶ所ありその周上から掘りこみがある。	カマド廻付の破片が3点含む。型穴破片も数点
野南H区	31号土坑	扇形-皿状	D1	416	132	奈良時代	不明	中層に一箇瓦葺。	5型穴と黒瓦葺建物と接合。
野南H区	34号土坑	長円形-平皿	B2	164	55以上	近世	不明	—	10溝の基壇に掘りこまれている。
野南H区	B母土坑	長円形-平皿	C2	150	125	近世	肥田用	灰色の有機物堆積。	16溝と一室の施設、野外糞所とも考えられる。
野南J区	38号土坑	長方形-扇状	B4	263	195	奈良時代	土盛り?	—	十取り穴をゴミ跡で穴に掘削したものが。
野南J区	39号土坑	不定形-半皿状 (くずれた円形)	A?2	140	130	縄文時代	貯蔵穴?	深層の大型破片が底層に出る。	—
野南L区	40号土坑	長円形-平皿	C2	170	130	奈良時代	貯	灰化材質が下層に広がり、破土・破片が少量にすまられている。	側面の四周が埋没している。
野南L区	44号土坑	不定形-皿状	F1	236	182	奈良時代	埋蔵坑	底面に破砕された須磨新磨の破片が定冠。	階層上坑。
野南J区	45号土坑	不定形-凹凸	F3	307	233	奈良時代	粘土埋蔵坑	黄褐色粘土層で、タコ豆状の焼片を四方に隔る。→濃灰土灰化	5型穴と4型穴と接合。
野南I区	102号土坑	長円形-扇状	B4	170	136	奈良時代	土盛り?	自然崩壊(土面片は少ない)。	一旦少泥層にみえるが、3つの土坑が重なっている可能性高い。中又は階層上坑。
野南E区	52号土坑	長円形?-平皿	B2	350	193	奈良時代	不明	階層上灰化して埋没。	—
野南E区	53号土坑	長円形-皿状	B1	145	52	奈良時代	—	土層は少ないが焼土・炭・漆を含む。濃灰土灰化して埋没。	—
野南E区	54号土坑	長円形-凹凸	B3	170	99	奈良時代	不明	濃灰土灰化して埋没。	1ヶ所小ピットがある。
野南E区	55号土坑	不定形-平皿	E2	230	160以上	奈良時代	不明	濃灰土灰化しているが本末の層目階不明。	13型穴の付属施設か? 29埋蔵と重複。
野南F区	17号土坑	円形-平皿	A2	130	118	不明	不明	中央にピットがあり、その土に破土みかぶる。	—
野南G区	60号土坑	長円形-皿状	B1	100	63	奈良時代	不明	底層に粘土ブロックを多く含む。	—
野南G区	61号土坑	長円形-平皿	B2	93	80	奈良時代	不明	灰・張土・土面片を一箇埋蔵。	19土坑と接合。

野間G区	62号土坑	船塚形-皿状	D1	200以上	38	10	奈良時代	不明			
野間M区	301号土坑	円形-平皿	A2	77	75	43	奈良時代	不明			水田下で検出。
野間M区	302号土坑	真円形-平皿	B2	141	96	23	奈良時代	不明	大型磁器片集中		水田下で検出。
野間M区	303号土坑	円形-平皿	A2	83	67	45	奈良時代	不明			水田下で検出。 304土坑を切る。
野間M区	304号土坑	円形-皿状	A1	168	153	37	奈良時代	不明	層が多く崩壊されている。		水田下で検出。 303土坑に切られる。
野間M区	305号土坑	不定形-平皿	E2	210	100	18	奈良時代	不明			水田下で検出。
野間M区	308号土坑	真円形-平皿	E2	142	95	15	奈良時代	不明			水田下で検出。
野間M区	307号土坑	不定形-皿状	E4	170	121	30	奈良時代	不明			水田下で検出。 318土坑を切る。
野間M区	308号土坑	真円形-皿状	B4	105	70	25	奈良時代	不明			水田下で検出。
野間M区	309号土坑	不定形-平皿	E2	179以上	132	10	奈良時代	不明	大酒甕を多数に含む。		水田D-19区出土遺物と接合。 水田下で検出。 3つないし4つの上段が噴出した可能性高い。
野間M区	310号土坑	不定形-平皿	E2	234	228	25	奈良時代	不明	角楕を多数に含む。		水田下で検出。
野間M区	311号土坑	不定形-平皿	E2	287	163	10~15	奈良時代	不明			水田下で検出。
野間M区	312号土坑	溝状-皿状	F1	580	20~40	20	奈良時代	不明			水田下で検出。
野間M区	314号土坑	不定形-皿状	E1	111	102	10	奈良時代	不明			水田下で検出。
野間M区	315号土坑	真円形-皿状	B1	104	77	5	奈良時代	不明			水田下で検出。
野間M区	316号土坑	不定形-皿状	E1	121	76	10	奈良時代	不明			水田下で検出。
野間M区	317号土坑	真円形-皿状	B1	92	62	23	奈良時代	不明			水田下で検出。
野間M区	318号土坑	方形-平皿	C2	130	107	18	奈良時代	不明			水田下で検出。 308土坑に切られる。
平塚A区	201号土坑	不定形-皿状	F1	370以上	210~280	30	奈良時代	不明	流石十瓦化(坂から崩落されている)。		51建物に近接。
平塚B区	203号土坑	真円形-皿状	B1	310	190	25	奈良時代	不明	自然変成		陶器土瓦化していない。 四角の罫は切離し、底部に片片の堆積。長軸方位35°
平塚D区	204号土坑	方角形-平皿	C2	270	200	20~25	不明	穿?			
平塚E区	211号土坑	真円形-平皿	B1	172	133	8	縄文時代	不明			
平塚E区	212号土坑	不定形-平皿	E2	380	200以上	5~15	縄文時代	不明			
平塚E区	213号土坑	不定形-皿状	E1	143	74	33	縄文時代	穿?	横けた罫と片片が出土。		底部の一部が埋納。
野間D区	1号掘土坑	真円形-皿状	B1	82	40	13	奈良時代?	不明			底面が崩壊し、掘土が埋納する。

第4表 上野第1遺跡溝一覽表

遺跡名	調査区	断面形態	長さ(m)	最大幅(m)	最小幅(m)	方向と方位角	断面勾配	時期	備考
1号溝	東原A区	U字形	21.5以上	0.6	0.5	東西 103°	東から西へ低くなる	近世～近代	白土層界溝。 2溝に並行し、土層物を切る。
2a号溝	東原A区	U字形	23.0以上	1.7以上	1.1	東西 103°	東から西へ低くなる	近世～近代	黒地層界溝→1910年代に埋没。 1溝に並行し、土坑を切る。
2b号溝	東原A区	U字形	6.5以上	0.5	0.4	東西 103°	東から西へ低くなる	近世～近代	白土層界溝。 1溝に並行。
3号溝	東原B区	U字形	42.5以上	2.15	0.8	--	東から西へ低くなる	近世～近代	白土層界溝。 ゆるく傾斜。
4号溝	東原B区	逆字形	10.1以上	1.15	0.8	南北 14°	南から北へ低くなる	近世～近代	黒地層界溝。 3溝と6溝に交叉し、6溝から派生。 6溝を切る。
5号溝	東原B区	U字形	14.8以上	0.4	0.35	東西 119°	東から西へ低くなる	近世	4溝・6溝・5土坑に切られる。
6号溝	東原B区	U字形	35.5以上	2.5以上	--	東西 103°	東から西へ低くなり、 西半分は平坦	近世～近代	白土層界溝。 3溝と並行。 5溝・4土坑を切る
7号溝	東原C区	U字形	25.0以上	2.5	1.0	東西 110°	東から西へ低くなる	近世～近代	白土層界溝。 8溝と並行。 12土坑と並走。(前後不明)
8号溝	東原C区	U字形	6.5以上	1.4	0.9	南北 20°	南から北へ低くなる	近世～近代	黒地層界溝。 7溝と並走。 多量の礫が混入されている。
9号溝	野原F区	U字形	30.0以上	1.8	1.1	南北 20°	ほとんど水平	近世～近代	白土層界溝。
10号溝	野原H区	U字形	南北29.0以上 東西14.0	1.5	1.0	南北 --	北から南へ低くなる 西から東へ低くなる	近世～近代	J字形の黒地層界溝。 逆図状遺構と水痕状遺構を切る。
12号溝	野原H区	U字形	21.0以上	2.0	1.3	逆J字形 --	南から北へ傾斜水点に 所かつて低くなる	近世～近代	黒地層界溝。 水痕状遺構を切る。 10溝と向かいあう。
13号溝	野原G区	U字形	22.0	1.2	0.8	東西 110°	東から西へ低くなる	近世～近代	白土層界溝。 10溝と並走。→1910年代に埋没。
14号溝	野原I区	逆字形	11.0以上	1.5	1.4	南北 --	北から南へ低くなる	近世～近代	黒地層界溝。 39土坑と15溝を切る。
15号溝	野原I区	U字形	11.8以上	2.4	1.9	南北 --	北から南へ低くなる	近世～近代	黒地層界溝。 溝14に切られる。
16号溝	野原H区	逆字形	8.0	0.6	0.3	逆J字形 --	水点直に向かつて低く なる	近世～近代	B土坑(埋納め)と連絡する

19号溝	野間J1区	U字形	21.0以上	4.7	0.8	南北	—	南北	—	北から南へ低くなる	奈良時代	45土坑を切り、44土坑と連続。谷におりる道。
20号溝	野間L区	W字形	24.0以上	1.1と1.6	1.0と1.3	西北	→南	西北	→南	東から西へ低くなる	近世～近代	一本で、溝。鳥辺原溝。
22号溝	野間I区	造台形	10.8以上	2.0	1.1	廻り	字形	—	—	水平	中世	西端は埋平。10型穴と25土坑を切る。
24号溝	野間E区	U字形	31.0以上	1.0	0.7	南北	—	南北	—	北から南へ低くなる (途中はとんど水平)	近世～近代	鳥辺原溝溝。
25号溝	野間E区	U字形	9.2以上	1.0	0.5	東西	107°	東西	107°	東から西へ低くなる	近世～近代	鳥辺原溝溝→1910年代の出水化時に上層を削平。
30号溝	野間M区	U字形	7.3以上	1.1	0.6	南北	—	南北	—	北から南へ低くなる	近世～近代	鳥辺原溝溝。
31号溝	野間M区	U字形	33.0以上	1.8	0.5	東西	—	東西	—	東から西へ低くなる	近世～近代	鳥辺原溝溝。
32号溝	野間M区	U字形	40.0以上	0.8	0.5	東西	—	東西	—	東から西へ低くなる	奈良時代	水田跡溝。33溝を切る。
33号溝	野間M区	U字形	40.0以上	1.0	0.5	東西	—	東西	—	東から西へ低くなる	奈良時代	水田跡溝。32溝に切られる。
51号溝	平原A区	U字形	3.1以上	1.5	—	南北	—	南北	—	南から北へ低くなる	近世～近代	鳥辺原溝溝→1910年代に溝設。54埋物を切る。
1号溝	平原E区	U字形	13.0以上	1.0	0.5	南北	—	南北	—	南から北へ低くなる	近世～近代	鳥辺原溝溝。3溝と連続。
2号溝	平原E上区	U字形	25.0以上	2.0	1.0	東西	—	東西	—	東から西へ低くなる	近世～近代	鳥辺原溝溝。5溝に切られる。
3号溝	平原E区	U字形	9.0以上	1.5	—	東西	—	東西	—	東から西へ低くなる	近世～近代	鳥辺原溝溝。1・6溝と連続。4溝に切られる。
4号溝	平原E区	U字形	21.0以上	1.2	0.7	東西	→南	東西	→南	東から西へ低くなる	近世～近代	鳥辺原溝溝。1・3溝を切る。
5号溝	平原E区	U字形	19.0以上	2.5	1.5	東西	→南	東西	→南	東から西へ低くなる	近世～近代	鳥辺原溝溝。4溝を切る。
6号溝	平原E区	U字形	8.0以上	0.3	0.2	南北	—	南北	—	南から北へ低くなる	近世～近代	鳥辺原溝溝。3溝に連続。

第5表 東原地区出土遺物観察表
東原A区一試掘1・2トレンチ

4章3図P32

NO	出土遺物・遺構	種別	石材	（1）土器は厚さ・高さ(cm)		重量 (単位)	備考				
				長さ	幅		長さ	厚さ			
1	1トレンチ・3.4層中	四方打瓦片	灰黒片竹	6.0	6.8	1.2	外周のみ				
NO	出土遺物・遺構	種別	器種	胎土	成形	重量 (単位)	外周	内周	色調	使用部	備考
							胎土	成形	重量	外周	内周
2	2トレンチ・3.4層中	円形器	片青	—	—	—	胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない

東原A区一3号独立柱建物跡

4章7図P35

NO	出土遺物・遺構	種別	器種	胎土		成形	重量 (単位)	備考			
				高さ	幅			外周	内周		
1	1号穴	原形器	瓦	—	—	—	胎土少ない 片青含む	胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない

東原A区一1号土坑

4章9図P36

NO	出土遺物・遺構	種別	器種	胎土		成形	重量 (単位)	備考			
				高さ	幅			外周	内周		
1	2号第一号	灰器	杯蓋	2.0	16.0	—	—	胎土少ない 胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない
2	1号第一号	灰器	片蓋	—	—	—	—	胎土少ない 胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない
3	2号第一号	原形器	原形器	—	—	—	—	胎土少ない 胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない
4	2号第二号	土器	片蓋	—	—	—	—	胎土少ない 胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない
5	2号	土器	片蓋	—	—	—	—	胎土少ない 胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない
6	2号	土器	片蓋	—	—	—	—	胎土少ない 胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない
7	2号	土器	片蓋	—	—	—	—	胎土少ない 胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない
8	2号	土器	片蓋	—	—	—	—	胎土少ない 胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない
9	2号	土器	片蓋	—	—	—	—	胎土少ない 胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない

東原A区一2号土坑

4章11図P37

NO	出土遺物・遺構	種別	器種	胎土		成形	重量 (単位)	備考			
				高さ	幅			外周	内周		
1	1号土坑	灰文土器	碗鉢	—	—	—	—	胎土少ない 長柄	胎土少ない	胎土少ない	胎土少ない

東原A区-1号棟

4章13図P38

NO	出土位置・遺構	種別	時期	断面(1/20)の埋没深さ(m)		土質	底形	外周		内周	色調	使用痕	備考
				高さ	口徑			外周	内周				
1	1層	灰土層	縄文時代	—	—	砂粒多い 粘土	—	タテハシ	ナシ	—	—	灰土層(厚さ5.0m) 富士(黒土)の瓦・角多しい 江戸時代(埋没11.0m)	
2	2層	灰土層	縄文時代	—	—	—	ロクロ成形	白磁ココナテ(裏) 黒赤切り	埋没したホケメ	—	—	—	
NO	出土位置・遺構	種別	時期	断面(1/20)の埋没深さ(m)		土質	底形	外周		内周	色調	使用痕	備考
3	3層	灰土層	縄文時代	11.0	5.0	3.3	(252.B)	—	—	—	—	—	—

東原A区-2号棟

4章14図P38

NO	出土位置・遺構	種別	時期	断面(1/20)の埋没深さ(m)		土質	底形	外周		内周	色調	使用痕	備考
				高さ	口徑			外周	内周				
1	1層1/2	埋没土層	縄文時代	—	—	—	—	—	—	—	—	—	縄文・1810-1900年代

東原B区-1号高塚墓

4章17図P41

NO	出土位置・遺構	種別	時期	断面(1/20)の埋没深さ(m)		土質	底形	外周		内周	色調	使用痕	備考
				高さ	口徑			外周	内周				
1	3-4層	灰土層	縄文時代	—	—	砂粒少ない	横上げ	白磁ココナテ	—	—	—	—	—
2	2層	灰土層	縄文時代	—	—	砂粒少ない 灰土	ロクロ成形	白磁ココナテ 白磁ココナテ-四角ヘウケスリ	—	—	淡褐色	—	跡1-2m次の行跡多い
3	3-4層	灰土層	縄文時代	—	—	砂粒少ない 灰土	横上げ	白磁ココナテ	—	—	淡褐色	—	灰層
4	3-6層	灰土層	縄文時代	—	—	砂粒少ない 灰土	ロクロ成形	白磁ココナテ	—	—	黒色	—	土層跡

東原B区-1号土器棺

4章19図P41

NO	出土位置・遺構	種別	時期	断面(1/20)の埋没深さ(m)		土質	底形	外周		内周	色調	使用痕	備考
				高さ	口徑			外周	内周				
1	1層	土器棺	縄文時代	—	—	砂粒多い 灰土	—	ナシ	—	—	—	—	記述は埋没中にナシ

東原B区-4号竪立柱建物跡

4章21図P42

NO	出土位置・遺構	種別	時期	断面(1/20)の埋没深さ(m)		土質	底形	外周		内周	色調	使用痕	備考
				高さ	口徑			外周	内周				
1	1層7/8	灰土層	縄文時代	—	—	砂粒少ない 灰土	ロクロ成形	白磁ココナテ	—	—	淡褐色	—	跡1-1.5m跡多い
2	1層15-2層	灰土層	縄文時代	—	—	砂粒少ない 灰土	横上げ	白磁ココナテ	—	—	淡褐色	—	—
3	1層7/2-2層	土器跡	縄文時代	—	—	砂粒少ない 灰土	横上げ ロクロ成形	白磁ココナテ	ヘウケスリ	—	淡褐色	—	—
4	1層7/7	灰土層	縄文時代	—	—	砂粒少ない 灰土	横上げ	白磁ココナテ	—	—	淡褐色	—	平断面
5	1層7/5	灰土層	縄文時代	—	—	砂粒少ない 灰土	手づくは	白磁ココナテ	—	—	暗褐色	—	2次埋没にナシ 5分要

東原B区-1号型穴墓物群

4章23図P43

NO	出土位置・遺構	遺物	石材	長さ		重量	備考
				()	()		
1	南側土上	鉄釘	刀了	0.8~0.1	0.2~0.4	—	刀部長径(2.8cm)がややつらい。溝が浅く、滑りやすい。表面と裏面は丸味

東原B区-3号土坑

4章25図P44

NO	出土位置・遺構	層別	形状	土質	形状	高さ		色調	使用部	備考
						高さ	口径			
1	1号土層	土層部	楕円形	楕円土人	楕円形	—	—	淡褐色	—	—
2	2号土層	土層部	楕円形	楕円土人	楕円形	—	—	淡褐色	—	—
3	2号土層	土層部	楕円形	楕円土人	楕円形	—	—	淡褐色	—	—

東原B区-4号土坑

4章26図P44

NO	出土位置・遺構	層別	形状	土質	形状	高さ		色調	使用部	備考
						高さ	口径			
1	1号土層	土層部	楕円形	楕円土人	楕円形	—	—	淡褐色	—	—
2	2号土層	土層部	楕円形	楕円土人	楕円形	—	—	淡褐色	—	—
3	2号土層	土層部	楕円形	楕円土人	楕円形	—	—	淡褐色	—	—
4	2号土層	土層部	楕円形	楕円土人	楕円形	—	—	淡褐色	—	—
5	1号土層	土層部	楕円形	楕円土人	楕円形	—	—	淡褐色	—	—
6	2号土層	土層部	楕円形	楕円土人	楕円形	—	—	淡褐色	—	—
7	2号土層	土層部	楕円形	楕円土人	楕円形	—	—	淡褐色	—	—
8	2号土層	土層部	楕円形	楕円土人	楕円形	—	—	淡褐色	—	—
9	2号土層	土層部	楕円形	楕円土人	楕円形	—	—	淡褐色	—	—

東原B区-各ピット

4章29図P46

NO	出土位置・遺構	層別	形状	土質	形状	高さ		色調	使用部	備考
						高さ	口径			
1	ピット2	土層部	楕円形	楕円土人	楕円形	—	—	淡褐色	—	—
2	ピット2	土層部	楕円形	楕円土人	楕円形	—	—	淡褐色	—	—
3	ピット3	土層部	楕円形	楕円土人	楕円形	—	—	淡褐色	—	—

東原B区-3号溝

4番31図P47

NO	出土位置・遺構	種類	器種	口径		胎土	成形	外壁		内壁		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外壁	内壁					
1	1層	灰土層	浮鉢底部	-	-	砂粒多い 白地	-	ナテ	-	-	粉白色	-	高度(9.0m) 遺跡中層	
2	埋土中	灰土層	坏身	-	-	灰土多い 黒入	風上げ ロタロ成形	内彩ヨコナテ(縦)へう切 リ	加彩ヨコナテ・ロタロナテ	加彩ヨコナテ・ロタロナテ	赤褐色	-	-	
3	埋土中	瓦牛蓋室	新瓦本 (1607年初期)	径2.1	-	-	-	-	-	-	-	-	4.1m5m	
4	埋土中	肥前田原焼村	灰	4.6	(10.0)	-	-	-	-	-	-	-	高度(4.2m) 標高6.1750-7.904代	

東原B区-6号溝

4番36図P49

NO	出土位置・遺構	種類	器種	口径		胎土	成形	外壁		内壁		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外壁	内壁					
1	埋土中	磁器	肥前焼付焼	-	-	-	ロタロ成形	-	加彩(横)は 6.5m付近	-	粉白色	-	15世紀後半 高度(4.5m)	
2	埋土中	陶器	甕	-	-	-	筒り出し成形	條輪	-	-	赤褐色 黒褐色	-	内彩に地上140.3m所あり 高度(4.2m)	
3	埋土中	陶器	甕(深筒)	-	-	-	筒り出し成形	條輪	-	-	黒褐色	-	高度(4.2m)	

東原C・D区-1範囲採査

4番38図P50

NO	出土位置・遺構	種別	器種	口径		胎土	成形	外壁		内壁		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外壁	内壁					
1	D区3層	赤土層	洗鉢	-	-	砂粒多い	横上げ	?	條輪	-	淡赤褐色 黒色	-	灰吹山段 口縁部	
2	D区3層	赤土層	坏身	-	-	砂粒少ない	横上げ ロタロ成形	加彩ヨコナテ一回線へう カズリ	加彩ヨコナテ	加彩ヨコナテ	赤褐色	-	よりりすつく	
3	D区3層	灰土層	坏身	-	-	砂粒少ない	横上げ ロタロ成形	加彩ヨコナテ	加彩ヨコナテ	加彩ヨコナテ	淡灰色	-	-	
4	D区3層	赤土層	坏身	-	-	砂粒少ない	横上げ ロタロ成形	加彩ヨコナテ	加彩ヨコナテ	加彩ヨコナテ	淡灰色	-	底蓋(8.4cm)	
5	D区3層	赤土層	坏身	-	-	砂粒少ない	横上げ ロタロ成形	加彩ヨコナテ	加彩ヨコナテ	加彩ヨコナテ	淡灰色	-	底蓋(7.2cm)	
6	D区3層	赤土層	坏身	-	-	砂粒少ない	横上げ ロタロ成形	加彩ヨコナテ	加彩ヨコナテ	加彩ヨコナテ	赤褐色	-	底蓋(7.5-8.0cm) 削付縁部	
7	D区3層	赤土層	坏身	-	-	砂粒少ない	横上げ ロタロ成形	加彩ヨコナテ	加彩ヨコナテ	加彩ヨコナテ	赤褐色 淡灰色	-	-	
NO	出土位置・遺構	種別	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考						
8	D区3層	赤土中	材質目	4.1	-	高さ1.0	-	割れの部分も出ている						
9	D区3層	埋土中	赤土層	2.8	2.0	0.7	2.9							
10	D区3層	赤土中	赤土層	7.2	3.8	3.4	76.8	90%自然風乾す						

東原C区-6号獨立柱建築物

4章44図P55

NO	出土位置・遺構	種別	部 類	材 質	高 さ	幅 口 径	土 質	成 形	外 面	内 面	色 調	使用層	備 考
1	1号穴	深部部	外壁	—	—	—	砂粒少ない 礫多量	横上げ ロタロ成形	白磁ココナ	—	白灰色	—	階11～2階人の石室多し、
2	2号穴	浅部部	外壁	—	—	—	砂粒少ない	横上げ ロタロ成形	白磁ココナ	—	淡青灰色	—	—
3	3号穴	浅部部	外壁	—	—	—	砂粒少ない	横上げ ロタロ成形	白磁ココナ	—	淡青灰色	—	—
4	4号穴	浅部部	外壁	—	—	—	砂粒少ない	横上げ ロタロ成形	白磁ココナ	—	淡青灰色	—	—
5	5号穴	浅部部	壁	—	—	—	砂粒少ない 瓦多量	横上げ	白磁ココナ	ヘタケズリ	明褐色	—	階11～2階人の石室多し、 —階物10～11柱穴と整合
6	6号穴	浅部部	柱	—	—	—	砂粒少ない 花輪	横上げ	白磁ココナ	白磁ココナ	淡褐色	—	—

東原C区-7号獨立柱建築物

4章47図P57

NO	出土位置・遺構	種別	部 類	材 質	高 さ	幅 口 径	土 質	成 形	外 面	内 面	色 調	使用層	備 考
1	1号穴	浅部部	杯形	—	5.1	14.8	砂粒少ない 礫入	横上げ ロタロ成形	白磁ココナ	白磁ココナ	淡青灰色	—	—

東原C区-8号獨立柱建築物

4章49図P58

NO	出土位置・遺構	種別	部 類	材 質	高 さ	幅 口 径	土 質	成 形	外 面	内 面	色 調	使用層	備 考
1	1号穴	浅部部	杯形	—	—	—	砂粒少ない 礫入	横上げ タタキ成形	タタキ	白磁ココナ	淡青灰色 淡褐色 (階)茶色	—	—

東原C区-9号獨立柱建築物

4章51図P58

NO	出土位置・遺構	種別	部 類	材 質	高 さ	幅 口 径	土 質	成 形	外 面	内 面	色 調	使用層	備 考
1	1号穴	浅部部	杯形	—	—	—	砂粒少ない	横上げ ロタロ成形	白磁ココナ	白磁ココナ	淡青灰色	—	—

東原C区-10号獨立柱建築物

4章53図P60

NO	出土位置・遺構	種別	部 類	材 質	高 さ	幅 口 径	土 質	成 形	外 面	内 面	色 調	使用層	備 考
1	1号穴	浅部部	杯形	—	—	—	砂粒少ない 礫入	横上げ ロタロ成形	白磁ココナ	白磁ココナ	淡青灰色	—	—
2	2号穴	浅部部	壁	—	—	—	砂粒少ない 瓦多量	横上げ タタキ成形	白磁ココナ	白磁ココナ	淡褐色 (階)茶色	—	—
3	3号穴	浅部部	柱	—	—	—	砂粒少ない 瓦多量	横上げ	白磁ココナ	白磁ココナ	淡褐色	—	—
4	4号穴	浅部部	土階部	—	5.0～5.5	—	砂粒少ない 礫多量	手づくね	白磁ココナ	白磁ココナ	淡褐色	—	—

東原C区-2号型穴窯跡物

4第67-68図P1・72

NO	出土位置・遺構	遺物	数量	重量(1/100g以下)	口徑	出土	成形	外装	内面	色	使用痕
1	1号穴内・焼成内	片	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ ロタロ成形	白磁ココナ	—	白色 生半片	—
2	2号土・井筒土上	片身	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ コナロ成形	白磁ココナ	—	淡青灰色 生半片	—
3	3号土層底 土層底(2)	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	タテハク集まりが半量コナ	—	淡青色	—
4	4号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	ナナ	—	淡青色	—
5	5号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
6	6号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
7	7号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
8	8号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
9	9号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
10	10号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
11	11号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
12	12号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
13	13号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
14	14号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
15	15号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
16	16号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
17	17号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
18	18号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
19	19号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
20	20号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
21	21号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
22	22号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
23	23号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—
24	24号土層底	片断	—	—	—	砂粒少ない 石灰質多い	横上げ	手前へハクナナ	—	淡青色	—

25	耐火煉土中	土質部	耐火煉土	—	—	煉煉土 平均多量	焼上げ	ココナ	明褐色 茶褐色	—	口煉部
26	3層	土質部	耐火煉土	—	(12.0)	煉煉土 平均多量	焼上げ	ココナ・海層	明褐色	—	口煉部
27	3層	土質部	耐火煉土	—	(14.0)	煉煉土 平均多量	焼上げ	ココナ・椰子・手付へ ココナ	明褐色	—	口煉部
28	3層	土質部	耐火煉土	—	(15.0)	煉煉土 平均多量	焼上げ	ココナ	淡褐色	—	口煉部
29	3層	土質部	耐火煉土	—	—	煉煉土 平均多量	焼上げ	椰子(椰子)100→ココ ナ	茶褐色	—	口煉部
30	3層	土質部	小型煉土	—	—	煉煉土 少量	焼上げ	ココナ・椰子	淡褐色	—	口煉部
31	煉土	耐火煉土	煉土	—	—	煉煉土 少量	焼上げ	4枚海層	淡褐色	—	口煉部
32	煉土	耐火煉土	煉土	—	—	煉煉土 少量	焼上げ	煉煉土	淡褐色	—	口煉部

兼原C区-3号耐火煉土

4号70図P73

NO	出土位置・地層	種別	特徴	層厚	層厚(平均)±標準偏差(mm)	耐火煉土	底層	外層	内層	色調	焼成度	備考
1	耐火煉土中	煉土部	耐火煉土	—	—	煉煉土 少量	焼上げ ロクロ成形	ココナ	ココナ	淡褐色	—	—
2	1層 煉土部	煉土部	耐火煉土	—	—	煉煉土 少量	焼上げ ロクロ成形	ココナ	ココナ	淡褐色	—	—
3	耐火煉土中	煉土部	耐火煉土	—	—	煉煉土 少量	焼上げ ロクロ成形	ココナ	ココナ	淡褐色	—	—
4	1層 コーナの煉土	煉土部	耐火煉土	—	(14.0)	煉煉土 少量	焼上げ ロクロ成形	ココナ	ココナ	淡褐色	—	—
5	耐火煉土中	煉土部	耐火煉土	—	—	煉煉土 少量	焼上げ ロクロ成形	ココナ	ココナ	淡褐色	—	—
6	耐火煉土中	煉土部	耐火煉土	—	(29.4)	煉煉土 少量	焼上げ ロクロ成形	ココナ	ココナ	淡褐色	—	—
7	2層 煉土部	煉土部	耐火煉土	—	—	煉煉土 少量	焼上げ ロクロ成形	ココナ	ココナ	淡褐色	—	—
8	1層	土質部	耐火煉土	—	(25.0)	煉煉土 少量	焼上げ ロクロ成形	ココナ	ココナ	淡褐色	—	—
9	1層	土質部	耐火煉土	—	(24.2)	煉煉土 少量	焼上げ ロクロ成形	ココナ	ココナ	淡褐色	—	—
10	耐火煉土中	煉土部	耐火煉土	—	(20.4)	煉煉土 少量	焼上げ ロクロ成形	ココナ	ココナ	淡褐色	—	—
NO	出土位置・地層	種別	特徴	層厚	層厚(平均)±標準偏差(mm)	耐火煉土	底層	外層	内層	色調	焼成度	備考
11	2層	耐火煉土	耐火煉土	—	—	煉煉土 少量	焼上げ ロクロ成形	ココナ	ココナ	淡褐色	—	—
12	耐火煉土中	煉土部	耐火煉土	—	—	煉煉土 少量	焼上げ ロクロ成形	ココナ	ココナ	淡褐色	—	—
13	耐火煉土中	煉土部	耐火煉土	—	—	煉煉土 少量	焼上げ ロクロ成形	ココナ	ココナ	淡褐色	—	—

栗原D区-2号柱穴例

4章73図P74

NO	出土位置・時期	初期	器種	器高	口径	土質	底形	外 観		色 調	使用痕	備 考
								外 観	内 観			
1	柱穴1	前期後葉	甕	—	—	砂粒少ない 黒八	多量な底形	種子多量	同心円文	淡褐色	—	甕 黒土に石多量。

栗原C区-8号土坑

4章75図P75

NO	出土位置・時期	器種	器高	口径	土質	底形	外 観		色 調	使用痕	備 考
							外 観	内 観			
1	土坑西端	甕	—	—	砂粒少ない 黒八	多量な底形	種子多量	同心円文	黒褐色	—	甕 黒土に石多量。

栗原C区-10号土坑

4章78図P77

NO	出土位置・時期	器種	器高	口径	土質	底形	外 観		色 調	使用痕	備 考
							外 観	内 観			
1	1.1層 下層後葉	坏	—	—	砂粒少ない 黒八	瓊上げ ロクロ成形	白磁ヨコナテ	—	淡褐色	—	黒土に黒穴の石多量。
2	4.5層 下層後葉	坏	—	—	砂粒少ない	瓊上げ ロクロ成形	白磁ヨコナテ	—	淡褐色	—	—
3	4.5層 下層後葉	坏	—	—	砂粒少ない	瓊上げ ロクロ成形	白磁ヨコナテ	—	淡褐色	—	—
4	5層 下層後葉	坏	—	—	砂粒少ない	瓊上げ ロクロ成形	白磁ヨコナテ→白磁へう ケズリ	白磁ヨコナテ	淡褐色	—	—
5	5層 下層後葉	坏	—	—	砂粒少ない	瓊上げ ロクロ成形	白磁ヨコナテ	—	白色	—	—
6	5層 下層後葉	坏	—	(17.8)	砂粒少ない 黒八	瓊上げ ロクロ成形	白磁ヨコナテ→白磁へう ケズリ	白磁ヨコナテ	褐色	—	—
7	4層 下層後葉	坏	—	(12.8)	砂粒少ない 黒八	瓊上げ ロクロ成形	白磁ヨコナテ→白磁へう ケズリ	白磁ヨコナテ	淡褐色	—	—
8	1+5層 下層後葉	坏	—	4.5	砂粒少ない 黒八	瓊上げ ロクロ成形	白磁ヨコナテ→白磁へう ケズリ	白磁ヨコナテ	淡褐色	—	—
9	5層 下層後葉	坏	—	(13.2)	砂粒少ない 黒八	瓊上げ ロクロ成形	白磁ヨコナテ	—	淡褐色	—	—
10	3+4+5層 下層後葉	坏	—	5.4	砂粒少ない 黒八	瓊上げ ロクロ成形	白磁ヨコナテ→白磁へう ケズリ	白磁ヨコナテ	淡褐色	—	—
11	5層 下層後葉	坏	—	—	砂粒少ない 黒八	瓊上げ ロクロ成形	白磁ヨコナテ	—	淡褐色	—	—
12	4+5層 下層後葉	坏	—	6.5	砂粒少ない 黒八	瓊上げ ロクロ成形	白磁ヨコナテ	—	白色	—	—
13	5層 下層後葉	坏	—	—	砂粒少ない 黒八	瓊上げ ロクロ成形	白磁ヨコナテ→白磁へう ケズリ	白磁ヨコナテ	淡褐色	—	—
14	3+5層 下層後葉	土器	—	(13.6)	砂粒少ない 黒八	瓊上げ ロクロ成形	白磁ヨコナテ	—	淡褐色	—	—
15	5層 下層後葉	土器	—	(18.2)	砂粒少ない 黒八	瓊上げ ロクロ成形	白磁ヨコナテ	—	明褐色	—	—

東原C区-14号土坑

4第B2図P80

NO	出土位置・名称	種別	品名	品高	口径	重量(口内重量)単位(g)	胎土	成形	外装	装	内装	色	保存	備考
1	2層	灰皿	片蓋	—	(16.4)	—	砂粒少ない 黒土	横上げ コケロ成形	同底コナナ	同底コナナ	同底コナナ	黄褐色 赤褐色 黒褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
2	2層	灰皿	杯身	—	—	—	砂粒少ない 黒土	横上げ コケロ成形	同底コナナ	同底コナナ	同底コナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
3	2層	灰皿	杯身	—	—	—	砂粒少ない 黒土	横上げ コケロ成形	同底コナナ	同底コナナ	同底コナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
4	2層	灰皿	片身	—	—	—	砂粒少ない 黒土	横上げ コケロ成形	同底コナナ	同底コナナ	同底コナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
5	2層	灰皿	杯身	—	—	—	砂粒少ない 黒土	横上げ コケロ成形	同底コナナ	同底コナナ	同底コナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
6	2層	灰皿	杯身	—	—	—	砂粒少ない 黒土	横上げ コケロ成形	同底コナナ	同底コナナ	同底コナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
7	2層	灰皿	杯	—	—	—	砂粒少ない 黒土	横上げ コケロ成形	同底コナナ	同底コナナ	同底コナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
8	2層	土師器	杯	—	(21.0)	—	砂粒多い 心土	横上げ	ナナ(口)コナナ	ヘタケズリ	ヘタケズリ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
9	2層	土師器	杯	—	(15.8)	—	砂粒多い 心土	横上げ	ナナ(口)コナナ	ヘタケズリ	ヘタケズリ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
10	2層	土師器	杯	—	—	—	砂粒多い 黒土	横上げ	ナナ	ナナ	ナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
11	2層	灰皿	杯蓋	—	(2.0)	(15.4)	砂粒少ない 黒土	横上げ コケロ成形	同底コナナ	同底コナナ	同底コナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
12	2層	灰皿	杯蓋	—	—	—	砂粒多い 黒土	横上げ コケロ成形	同底コナナ	同底コナナ	同底コナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
13	2層	灰皿	杯身	—	—	—	砂粒少ない 黒土	横上げ コケロ成形	同底コナナ	同底コナナ	同底コナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
14	2層	灰皿	杯身	—	—	—	砂粒少ない 黒土	横上げ コケロ成形	同底コナナ	同底コナナ	同底コナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
15	2層	灰皿	杯	—	—	—	砂粒少ない 黒土	横上げ コケロ成形	同底コナナ	同底コナナ	同底コナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
16	2層	土師器	杯	—	—	—	砂粒少ない 黒土	横上げ	ナナ	ナナ	ナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
17	2層	土師器	杯	—	—	—	砂粒少ない 黒土	横上げ	ナナ	ナナ	ナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
18	2層	土師器	杯	—	—	—	砂粒少ない 黒土	横上げ	ナナ	ナナ	ナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
19	2層	土師器	杯	—	—	—	砂粒少ない 黒土	横上げ	ナナ	ナナ	ナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
20	2層	土師器	杯	—	(15.0)	—	砂粒少ない 黒土	横上げ	ナナ	ナナ	ナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
21	2層	土師器	杯	—	—	—	砂粒少ない 黒土	横上げ	ナナ	ナナ	ナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
22	2層	土師器	杯	—	—	—	砂粒少ない 黒土	横上げ	ナナ	ナナ	ナナ	黄褐色	—	胎土1~2mmの片蓋多い。 胎土1~3mmの片蓋多い。 口縁部
NO	出土位置・名称	種別	品名	品高	口径	重量	胎土	成形	外装	装	内装	色	保存	備考
NO	出土位置・名称	種別	品名	品高	口径	重量	胎土	成形	外装	装	内装	色	保存	備考

東原C区-15号土坑

4章94図P81

NO	出土位置・遺構	種類	器種	器高	口径	器底(フチ)径(単位:cm)	重量	形状	外周	内周	色調	使用痕	備考
1	土層	土器片	横板片	—	—	砂粒多い 厚板面のみ	—	横上げ	手持ちヘラケスリ・ナテ?	ナテ	黒褐色	—	口縁部
2	土層	土器器	甕	—	(22.4)	砂粒多い 底面	—	横上げ	ヨコナテ・ナテ	(11)ヨコナテ→ヘラケスリ	茶褐色 黒褐色	—	口縁部

東原C区-7号溝

4章88図P83

NO	出土位置・遺構	種類	器種	器高	口径	器底(フチ)径(単位:cm)	重量	形状	外周	内周	色調	使用痕	備考
1	溝7中	角形穴行跡	原山原遺構跡	3.5	1.7	1.1	5.1	原形、焼遺産物	—	—	—	—	—
2	溝7中	閉跡	サスキイト	7.0	3.3	0.65	17.3	焼遺産物	—	—	—	—	—
3	溝7中	行跡	原山原遺構跡	(2.1)	(1.4)	0.35	(1.0)	下半穴掘、焼遺産物	—	—	—	—	—

東原C区-8号溝

4章90図P83

NO	出土位置・遺構	種類	器種	器高	口径	器底(フチ)径(単位:cm)	重量	形状	外周	内周	色調	使用痕	備考
1	溝上中	深器部	円形	—	—	砂粒少ない 器底	—	横上げ ロクロ成形	ヨコナテ・ヘラケスリ米袋	ロクロナテ→原形ヨコナテ	焼褐色	—	器底(11.0.4cm)、焼遺産物
2	溝上中	深器部	円形	—	—	砂粒少ない	—	横上げ ロクロ成形	原形ヨコナテ	原形ヨコナテ	茶褐色	—	焼遺産物
3	溝上中	中深器部	狭口直	—	—	—	—	—	—	—	—	—	原形ヨコナテ 分厚縁高1.5cmナテ→1.8cm直 コナテ、共器(2.8cm)、焼遺産物
4	溝上中	深器部	狭口直	—	—	—	—	—	—	—	—	—	原形(4.3cm) 1750-1760年代
5	溝上中	深器部	狭口直	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.8cm直ナテ

東原C区-7ピット

4章91図P84

NO	出土位置・遺構	種類	器種	器高	口径	器底(フチ)径(単位:cm)	重量	形状	外周	内周	色調	使用痕	備考
1	1.1NK-ピット111	深器部	円形	—	—	砂粒多い 底面	—	横上げ	ナテ	ナテ	茶褐色	—	原形(10.4cm)
2	1.1NK-ピット118	深器部	円形	—	—	砂粒少ない	—	ロクロ成形	ヨコナテ	ヨコナテ	焼褐色	—	—

第6表 野間地区出土遺物観察表

野間地区一表面調査

5第2図P87

NO	種別	器種	形状(口径)		出土位置	出土	成形	調整(内)(外)	色調	使用痕	備考
			口径	高さ							
1	須臾器	杯蓋	—	—	砂粒少ない層	横上げ	凹底コナア	淡青灰色	—	胎土に2mm程度の含む、白色粒	
NO	種別	石材	形状(口径)		出土位置	出土	成形	調整	色調	使用痕	備考
			口径	高さ							
		黒曜石	5.4	2.7	1.3	20.9	二次加工あり				

野間 E・F 区 表面調査

5第3図P88

NO	出土位置	器種	石材	形状(口径)		出土位置	出土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				口径	高さ								
1	1K1-3層	燧石片(他)	燧石片	—	9.5±α	6.3	—	刃先に使用痕あり					
NO	出土位置	種別	器種	形状(口径)		出土位置	出土 <td rowspan="2">成形</td> <td rowspan="2">調整</td> <td rowspan="2">焼成</td> <td rowspan="2">色調</td> <td rowspan="2">使用痕</td> <td rowspan="2">備考</td>	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				口径	高さ								
		2B1トレンチ1~3層	土師器	—	—	—	—	砂粒多い在地	横上げ	—	茶褐色	—	口縁部片
		3F区3層3トレンチ	中洲原磁器片	—	—	—	—	磁器胎土	—	—	—	—	底付片

野間 E 区-26号掘立柱建物跡

5第9図P92

NO	出土位置	種別	器種	形状(口径)		出土位置	出土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				口径	高さ								
1	柱穴8	須臾器	杯蓋	1.5	(13.4)	—	—	砂粒少ない層	横上げ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm程度の石炭多い、口縁部片
2	柱穴11	須臾器	杯身	3.4	(11.4)	—	(18.6)	砂粒少ない層	横上げ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm程度の石炭多い、口縁部片
3	柱穴6	土師器	精緻杯	—	—	—	—	砂粒多い層	横上げ	—	淡褐色	—	口縁部片 内外面

野間 E 区-27号掘立柱建物跡

5第12図P94

NO	出土位置	種別	器種	形状(口径)		出土位置	出土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				口径	高さ								
1	柱穴4	須臾器	杯蓋	—	—	—	—	砂粒少ない層	横上げ	—	淡青灰色	—	胎土に2~3mm程度の石炭多い、口縁部片
2	柱穴3	須臾器	杯身	—	—	—	—	砂粒少ない層	横上げ	—	淡褐色	—	胎土に小石炭と微細炭が多い、口縁部片
3	柱穴3	土師器	精緻杯	—	—	—	—	砂粒多い層	横上げ	—	淡褐色	—	胎土に小石炭と微細炭が多い、口縁部片
4	柱穴3	土師器	燧	—	—	—	—	砂粒多い層	横上げ	—	淡褐色	—	口縁部片

17	渚土中	須磨器	坏身	4.0 (11.8)	—	(7.6)	砂粒少ない 器人	横上げ ワロロ成形	(外・口)同軸ヨコナテ タ切り (内)同軸ナテ	(口)凹陥へ	淡青灰色	—	胎土に1~2mm大の石夾多い。
18	渚土中	須磨器	坏身	4.3 (11.6)	—	(7.2)	砂粒少ない 器人	横上げ ワロロ成形	(外・口)同軸ヨコナテ タ切り (内)同軸ナテ	(口)凹陥へ	淡青灰色	—	胎土に1~3mm大の石夾多い。
19	渚土中	須磨器	坏身	—	—	7.8	砂粒少ない 器人	横上げ ワロロ成形	(外)同軸ヨコナテ タ切り (内)同軸ナテ	(口)凹陥へ	淡青灰色	—	胎土に1~2mm大の石夾多い。
20	渚土中	須磨器	坏身	—	—	—	砂粒少ない 器人	横上げ ワロロ成形	(外)同軸ヨコナテ (内)同軸ナテ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm大の石夾多い。
21	渚土中	須磨器	瓦割巻	(12.4)	—	—	砂粒少ない 器人	横上げ ワロロ成形	同軸ヨコナテ	胎土に1mm大の石夾含む。	胎土に1mm大の石夾含む。	—	胎土に1~4mm大の石夾多い。
22	渚土中	須磨器	瓦割巻	—	—	—	砂粒少ない 器人	横上げ ワロロ成形	(外)同軸ヨコナテ (内)同軸ナテ	胎土に1mm大の石夾含む。	胎土に1mm大の石夾含む。	—	胎土に1~4mm大の石夾多い。
23	渚土中	須磨器	蓋	—	—	—	砂粒少ない 器人	横上げ ワロロ成形	同軸ナテ(内・外)	胎土に1mm大の石夾含む。	胎土に1mm大の石夾含む。	—	胎土に1~2mm大の石夾多い。
24	渚土中	須磨器	蓋	—	—	—	砂粒少ない 器人	横上げ ワロロ成形	(外)水平窪付タタキ (内)同心口文	胎土に1mm大の石夾含む。	淡青灰色	—	胎土に1~2mm大の石夾多い。
25	渚土中	土師器	器割巻	(18.8)	—	—	胎土に1mm大の石夾含む。	横上げ	(外)胎土ヨコナテ (内)ナテ?	淡青褐色	—	胎土に1~2mm大の石夾多い。	
26	渚土中	土師器	器割巻	—	—	—	胎土に1mm大の石夾含む。	横上げ	不明?	淡青褐色	—	胎土に1~2mm大の石夾多い。	
27	渚土中	土師器	器割巻	—	—	—	胎土に1mm大の石夾含む。	横上げ	不明?	淡青褐色	—	胎土に1~2mm大の石夾多い。	
28	渚土中	土師器	器割杯	(13.2)	—	—	胎土に1mm大の石夾含む。	横上げ	(外)手持ちヘラケスリ? (内)ナテ (山)ヨコナテ	明褐色	—	胎土に1mm大の石夾含む。	
29	渚土中	土師器	器割杯	(13.4)	—	—	胎土に1mm大の石夾含む。	横上げ	ヨコナテ	淡青褐色	—	胎土に1mm大の石夾含む。	
30	渚土中	土師器	器割杯	(13.0)	—	—	胎土に1mm大の石夾含む。	横上げ	(外・口)ヨコナテ+手持ちヘラケスリ?	淡青褐色	—	胎土に1mm大の石夾含む。	
31	渚土中	土師器	器割杯	—	—	—	胎土に1mm大の石夾含む。	横上げ	ヨコナテ	淡青褐色	—	胎土に1mm大の石夾含む。	
32	渚土中	土師器	器割杯	—	—	—	胎土に1mm大の石夾含む。	横上げ	(外・山)ヨコナテ+手持ちヘラケスリ?	淡青褐色	—	胎土に1mm大の石夾含む。	
33	渚土中	土師器	器割杯 の蓋	(18.8)	—	—	胎土に1mm大の石夾含む。	横上げ	(外・山)ナテ? (口)ヨコナテ	淡青褐色	—	胎土に1mm大の石夾含む。	
34	渚土中	土師器	器割杯 の把手	—	—	—	胎土に1mm大の石夾含む。	横上げ	(外)横ナテ (内)ナテ	明褐色	—	胎土に1mm大の石夾含む。	
35	渚土中	土師器	器割杯 の把手	—	—	—	胎土に1mm大の石夾含む。	横上げ	(外)ヨコナテ (内)ナテ	淡褐色	—	胎土に2mm大の石夾含む。	
36	渚土中	土師器	器割杯	—	—	(12.9)	胎土に1mm大の石夾含む。	横上げ	(外)ヨコナテ (内)同軸ナテ	明褐色	—	胎土に1mm大の石夾含む。	
37	渚土中	土師器	杯	—	—	—	砂粒少ない 器人	横上げ	不明?	明褐色	—	胎土に1mm大の石夾含む。	
38	渚土中	土師器	器割杯	3.7 14.8	—	—	胎土に1mm大の石夾含む。	横上げ	(外・口)ヨコナテ+手持ちヘラケスリ?	明褐色	—	胎土に1mm大の石夾含む。	
39	渚土中	土師器	大器蓋	—	—	—	砂粒多い 花風	横上げ	(外)ナテ (内)ヘラケスリ (山)ヨコナテ	明褐色	—	胎土に1mm大の石夾含む。	
40	渚土中	土師器	蓋	—	—	(16.6)	砂粒多い 花風	横上げ	(外)ナテ (内)ヘラケスリ (山)ヨコナテ	淡褐色 (内)淡青褐色	—	胎土に1mm大の石夾含む。	

NO	出土位置	種別	器種	形状(○)つぼみ深さ・単位(cm)	口径	底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
41	埋土中	土師器	罎	(15.2)	—	—	砂粒多い 本地	横上げ	(外)ナナ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部
42	床面直上	土師器	鉢	—	—	—	砂粒多い 花地	横上げ	(口)ヨコナテ (内)ヘラケズリ	—	茶褐色 (外)淡褐色	一次加熱	口縁部 内面黒変
43	埋土中	土師器	小壺鉢	—	—	—	砂粒多い 花地	横上げ	(口)ヘラケズリ	—	淡褐色	—	口縁部
44	埋土中	土師器	頸短十草	—	—	—	砂粒多い 埋入	手づくね	不明	—	明褐色 白褐色	一次加熱	胴部 製造十草特有のオレ ンク色に着色
NO	出土位置	種別	器種	形状(○)つぼみ深さ・単位(cm)	口径	底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
45	埋土直上	土師器	鉢	足0.4 径0.25	—	(3.4)	茶黒少	—	—	—	—	—	—

野間E区-13号型穴建物跡

5号23回P103

NO	出土位置	種別	器種	形状(○)つぼみ深さ・単位(cm)	口径	底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	カマド架前一桁	土師器	磨光坪	—	—	—	精製胎土 埋入	横上げ	ヨコナテ	—	淡褐色	—	胎土に1mm程度の石英含む。

野間E区-54号土坑

5号23回P103

NO	出土位置	種別	器種	形状(○)つぼみ深さ・単位(cm)	口径	底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	埋土中	土師器	罎	—	—	—	砂粒多い 本地	横上げ	(外)ナナ? (内)ヘラケズリ (口)ヨコナテ	—	淡褐色	—	—

野間E区-14号型穴建物跡

5号25回P104

NO	出土位置	種別	器種	形状(○)つぼみ深さ・単位(cm)	口径	底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	埋土中	土師器	罎	—	—	—	砂粒多い 花地	横上げ	ヨコナテ	—	淡褐色	—	—

野間E区-52号土坑

5号27回P106

NO	出土位置	種別	器種	形状(○)つぼみ深さ・単位(cm)	口径	底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	土層	須恵器	坏表	2.9 15.0	—	—	砂粒少ない 口内口成形	横上げ	四転ヨコナテ・屈転ヘラケズリ	—	淡白灰色	—	つまみ径 2.8cm
2	土層	須恵器	坏表	—	—	—	砂粒少ない 埋入	横上げ 口内口成形	四転ヨコナテ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm程度の石英多い。 口縁部欠片
3	土層	土師器	精光坪	(117.0)	—	—	精製胎土	横上げ	(外)埋いナナ (内)丁架ナナ	—	明褐色	—	口縁部 1/4片
4	土層	土師器	精光坪	—	—	—	精製胎土	横上げ	(口)ヘラケズリ・手持ちヘラケズリ?	—	淡褐色	—	口縁部 5×4cm片
5	土層	土師器	竹付罎	—	—	13.4	精製胎土	横上げ	(外)四転ヨコナテ (内)ヨコナテ	—	淡褐色	—	底部 1/4 削付痕行

6	土師器	壺	—	—	—	砂粒多い 土師	横上げ	ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部片
7	土師器	鉢	—	—	—	砂粒多い 花地	横上げ	(外)ナテ (内)ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部片
NO	出土位置	種別	形状 口径	高さ	口縁 高さ	形状(○)つばは復元寸法・単位(cm) 口径 高さ	出土位置	形状	焼成	色調	使用痕	
8	埋土中	鉄器	刀片	0.7~ 0.9	—	刃部 長さ	つかみ具 幅1.1cm 長さ0.3~0.4cm					

5章30図P107

野間E区-55号土坑

NO	出土位置	種別	形状 口径	高さ	口縁 高さ	形状(○)つばは復元寸法・単位(cm) 口径 高さ	出土位置	形状	焼成	色調	使用痕	備考	
1	埋土中	土師器	壺	—	(16.2)	—	砂粒多い 花地	横上げ	(外)ナテ (内)ヘラクナテ (口)ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部

5章32図P107

野間E・F区-各ピット

NO	出土位置	種別	形状 口径	高さ	口縁 高さ	形状(○)つばは復元寸法・単位(cm) 口径 高さ	出土位置	形状	焼成	色調	使用痕	備考	
1	E区-ピット1	土師器	杯蓋皿	—	—	—	砂粒少ない 花地	横上げ	ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部片 4×4cm
2	E区-ピット9	須臾器	杯身	—	—	—	砂粒少ない 花地	横上げ ロクロ成形	可動ヨコナテ	—	淡褐色	—	—
3	E区-ピット11	土師器	壺	—	—	—	砂粒多い 花地	横上げ	(内)ヘラクナテ (口)ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部片 4×4cm
4	F区-ピット3	須臾器	杯蓋	—	—	—	砂粒少ない 花地	横上げ ロクロ成形	ヨコナテナテ	—	中褐色	—	つまみ径 2.8cm

野間E区-24号溝

5章33図P108

NO	出土位置	種別	形状 口径	高さ	口縁 高さ	形状(○)つばは復元寸法・単位(cm) 口径 高さ	出土位置	形状	焼成	色調	使用痕	備考	
1	埋土中	近世陶器 (17世紀後半)	附鉢(器 前)	—	—	—	6.8	ロクロ成形	(外)灰地 (内)配の目録はぎ	—	淡茶色	—	底部 船上の色(淡褐色)

野間E区-25号溝

5章33図P108

NO	出土位置	種別	形状 口径	高さ	口縁 高さ	形状(○)つばは復元寸法・単位(cm) 口径 高さ	出土位置	形状	焼成	色調	使用痕	備考	
1	埋土中	須臾器	高杯	—	—	—	—	横上げ ロクロ成形	ナテ(内)ヘラクナテ (口)ヨコナテ	—	淡黄灰色	—	船上に1m×2の石炭多い。 須臾器
2	埋土中	近世陶器 (17世紀後半)	鉢	—	—	—	—	ロクロ成形 目録不明	(外)可動ヨコナテ (内)配の目録はぎ(器)須臾	—	灰褐色	—	底部 台座(17世紀後半)

野間G・H区一表面採集

5集39・40期P114-115

NO	出土位置	種別	器種	器高 (cm)	口径	口径/器高	重量(g)	土質	成形	調整	用途	色調	使用痕	備考
1	D-8	縄文土器	鉢?	—	—	—	砂粒多い 黒人	土	横上げ	(内)ヨコナナ?	蓋	赤褐色	—	甌に石炭多い。 口縁部
2	上1~3層	縄文土器	深鉢	—	—	(10.4)	砂粒多い 黒地	土	横上げ	(外・内)ナナ?	—	赤褐色	—	底部 1/4片
3	6トレンチ	須恵器	坏蓋	—	—	—	砂粒少ない 黒人	土	横上げ ロクロ成形	(山)回転ヨコナナ	—	赤褐色	—	—
4	6トレンチD	須恵器	坏蓋	—	—	—	砂粒少ない 黒人	土	横上げ ロクロ成形	(山)回転ヨコナナ	—	赤褐色	—	—
5	1~3層	須恵器	坏身	4.0	(11.0)	—	砂粒少ない 黒人	土	横上げ ロクロ成形	不明(←表面保存不良)	生やけ	白灰色	—	蓋上に1~2mm火の行差多い。
6	6トレンチA	須恵器	坏身	—	—	—	砂粒少ない 黒人	土	横上げ ロクロ成形	(外・山)回転ヨコナナ・ヘラ切り (内)回転ナナ	—	赤褐色 青灰色	—	蓋上に1~2mm火の石炭食ひ。
7	6トレンチB	須恵器	坏身	—	—	—	砂粒少ない 黒人	土	横上げ ロクロ成形	(山)回転ヨコナナ	—	赤褐色	—	口縁部
8	—	須恵器	坏身	—	—	8.2	砂粒少ない 黒人	土	横上げ ロクロ成形	(外)回転ヨコナナ・回転ヘラ切り	生やけ	白灰色	—	蓋部
9	—	須恵器	坏身	—	—	9.0	砂粒多い 黒人	土	横上げ ロクロ成形	(外)回転ヨコナナ・ヘラ切り (内)回転ナナ	—	赤褐色	—	蓋部
10	6トレンチC	須恵器	坏身	—	—	—	砂粒少ない 黒人	土	横上げ ロクロ成形	(外)回転ヨコナナ (内)回転ナナ	—	赤褐色	—	蓋部 蓋付
11	1~3層	須恵器	鉢	(15.4)	—	—	砂粒少ない 黒人	土	横上げ	(外・ロ)ヨコナナ (内)ヘラナナ	—	赤褐色 青灰色	—	口縁部
12	土器集中	土器	精製蓋	—	—	—	精製土 黒人	土	横上げ	ナナ?	—	赤褐色	—	蓋部
13	1~3層	土器	精製蓋	(30.4)	—	—	精製土 黒人	土	横上げ	ヨコナナ?	—	赤褐色	—	口縁部 1/8片
14	H区 A地点	土器	精製外	(14.2)	—	—	精製土 黒人	土	横上げ	(外・ロ)ヨコナナ・手持ちヘラナナ	—	赤褐色	—	口縁部
15	H区 A地点	土器	精製外	—	—	—	精製土 黒人	土	横上げ	(外・ロ)ヨコナナ	—	赤褐色	—	口縁部 5×5.4cm片
16	1~3層	土器	精製取 把手	—	—	—	精製土 黒人	土	横上げ	箱ナナ	—	赤褐色	—	—
17	1~3層	土器	精製取 把手	—	—	—	精製土 黒人	土	手づくね	箱ナナ	—	赤褐色	—	—
18	出土中	土器	精製取 把手	—	—	—	精製土 黒人	土	手づくね	箱ナナ	—	赤褐色	—	—
19	1~3層	土器	精製蓋	—	—	—	精製土 黒人	土	横上げ	箱ナナ	—	赤褐色	—	—
20	1~3層	土器	精製坏身	(10.4)	—	—	精製土 黒人	土	横上げ ロクロ成形	(外)回転ヨコナナ (内)回転ナナ	—	赤褐色	—	口縁部 1/8片
21	1~3層	土器	精製坏身	(14.2)	—	—	精製土 黒人	土	横上げ ロクロ成形	(外)ヨコナナ (内)回転ナナ	—	赤褐色	—	底部 1/4片
22	土器集中	土器	精製坏身	—	—	—	精製土 黒人	土	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナナ	—	赤褐色	—	底部 1/8片
23	1~3層	土器	精製皿	(16.8)	—	—	精製土 黒人	土	横上げ	ナナ・ヨコナナ	—	赤褐色	—	底部 5×3cm片 口縁部 1/5片

NO	出土位置	種別	石材	規格(寸法は標準寸法・単位はmm)	重量(単位)	砂粒多い 左地	横上げ	形状	用途	調製	完成	色調	使用値	備考
24	5トレンチ	土師器	灰	(23.2)	(21.8)	—	砂粒多い 左地	横上げ	(外)ヨナナ (内)ヘラケズリ	—	茶褐色	茶褐色	スズ付蓋 二次加熱	口縁部
25	上層集中	土師器	灰	(18.0)	—	砂粒多い 左地	(内)短蓋付 横上げ	ロクロ成形	(外)ナナ (内)ヘラケズリ	—	茶褐色	茶褐色	茶色に青帯 二次加熱	口縁部 7×6cm片
26	土下1~3層	土師器	灰	(13.6)	—	砂粒多い 左地	横上げ	(内)短蓋付 横上げ	(外)ナナ (内)ヘラケズリ	—	淡褐色	淡褐色	黒帯 二次加熱	口縁部 1/8片
27	—	土師器	灰	—	—	砂粒多い 左地	横上げ	(内)ヨナナ 横上げ	(内)ヨナナ (内)ヘラケズリ	—	茶褐色	茶褐色	—	口縁部 4×3cm片
28	4地点	土師器	灰	—	—	砂粒多い 左地	横上げ	(内)ヨナナ 横上げ	(内)ヨナナ	—	淡褐色	淡褐色	—	口縁部 4×4cm片
29	1~3層	土師器	灰	—	—	砂粒多い 左地	横上げ	手づくね 横上げ	ナナ	—	淡褐色	淡褐色	—	—
30	14トレンチ	貯器	灰	—	(8.6)	—	—	ロクロ成形	出瓶ヨコナナ	—	灰白色	灰白色	—	胴部
31	7 村近	中国製白磁	皿	—	—	—	—	ロクロ成形	(口)輪 連弁?	—	淡緑白色	淡緑白色	—	口縁部
32	5トレンチ	土師器 (貯器)	灰	—	—	砂粒多い 左地	横上げ	ロクロ成形 出瓶系切り	ナナ (内)短蓋付	—	淡褐色	淡褐色	—	底部
NO	出土位置	種別	石材	規格(寸法は標準寸法・単位はmm)	重量(単位)	砂粒多い 左地	横上げ	形状	用途	調製	完成	色調	使用値	備考
33	層13トレンチ	行儀	滑石	—	—	—	—	—	タテお上りヨコ方向の磨削痕、口縁部	—	—	—	—	—
34	1~3層	ナイフ形石器	磨石	2.95	1.4	(2.6)	—	手研れ	—	—	—	—	—	—
35	—	石鏡	板石	2.2	1.35	0.35	0.80	完成、平砥	—	—	—	—	—	—
36	層4トレンチ	打製石斧	火山岩	(5.8)	9.00	1.40	(98.6)	先頭部の磨削が著しい	—	—	—	—	—	—

5 家49-44型P120-121

野間H区一層遺物 (H区-20号独立柱建物跡・周溝・3号穴式列)

NO	出土位置	種別	石材	規格(寸法は標準寸法・単位はmm)	重量(単位)	砂粒多い 左地	横上げ	形状	用途	調製	完成	色調	使用値	備考
1	柱穴3+周溝	須恵器	灰	(13.8)	—	砂粒少ない 左地	横上げ	ロクロ成形	(外)右回転ヘラケズリ (内)同転ナナ	—	淡青灰色	淡青灰色	—	胎土に1~2mm大の石莖多い、 3×2cm片
2	柱穴3	須恵器	灰	—	—	砂粒少ない 左地	横上げ	ロクロ成形	同転ヨコナナ	—	生やけ	赤褐色	—	—
3	柱穴3+周溝	須恵器	灰	(9.2)	—	砂粒少ない 左地	横上げ	ロクロ成形	(外)同転ヨコナナ (内)同転ヘラケズリ	—	—	淡青灰色	—	胎土に1mm大の石莖多い、
4	柱穴3	土師器	灰	—	—	砂粒多い 左地	横上げ	手づくね 横上げ	(内)ヨコナナ (外)ヨコナナ	—	—	淡褐色	—	胎土に1mm大の石莖多い、 小片
5	柱穴2	土師器	板石	—	—	砂粒少ない 左地	横上げ	手づくね 横上げ	和正儀	—	—	淡褐色	—	二次加熱あり 注跡形
6	ピット3	土師器	灰	—	—	砂粒少ない 左地	横上げ	手づくね 横上げ	(外)同転ナナ (内)ヘラケズリ (外)ヨコナナ方面のヘラケズリ	—	—	淡褐色	—	胎土に1~3mm大の石莖多い 磨削土師器
7	内層十成 層+周溝内	須恵器	灰	1.3	13.6	—	砂粒少ない 左地	横上げ	(外)同転ヘラケズリ (内)同転ナナ (外)同転ヨコナナ	—	—	淡青灰色	—	胎土に1~3mm大の石莖多い、
8	内層十成C層 床下1cm	土師器	灰	(14.4)	—	砂粒少ない 左地	横上げ	手づくね 横上げ	(外)同転ナナ (内)ヨコナナ	—	—	淡褐色	—	—

野間G区-5号穴6種地物

NO	出土位置	種別	数量	規格(寸法)	重量(単位:g)	出土	成形	調査	焼成	色調	検用種	備考
1	1号穴出土中	土師器	環	—	—	砂粒多い 花地	横上げ	(内)へラケズリ (口)同軸ヨコナテ	—	赤褐色	—	口縁部 1/8片
2	2号穴出土中	土師器	小型環	—	—	砂粒多い 花地	横上げ	(内)タテヨコナテ(6名/1cm) (口)へラケズリ (山)ヨコナテ	—	赤褐色	赤茶 二次加熱	腹部平坦部 1/3片
3	3号穴	土師器	精緻環	(17.0)	—	精緻土A 素人	横上げ	(内)平帯ちへラケズリ (口)ヨコナテ (口)ヨコナテ	—	赤褐色	—	口縁部 1/3片
4	4号穴	土師器	精緻環	(12.8)	—	精緻土A 素人	横上げ	(内)平帯ちへラケズリ (口)ヨコナテ(2名/1cm)→タテヨコナテ	—	赤褐色	—	口縁部 1/4片
5	5号穴	土師器	精緻環	(13.6)	—	精緻土B 素人	横上げ	ヨコナテ	—	赤褐色	—	口縁部 1/4片
6	6号穴	土師器	精緻環	—	—	精緻土A 素人	横上げ	(内)タテハナ(5名/1cm)→タテヨコナテ	—	赤褐色 (内)赤色	赤茶 二次加熱	口縁部 1/5片
7	7号穴	土師器	小型環	(16.0)	—	砂粒多い 花地	横上げ	(内)タテハナ? (山)ヨコナテ	—	赤褐色 (内)赤色	赤茶 二次加熱	腹部上半 1/5片
8	8号穴	土師器	小型環	(16.2)	—	砂粒多い 花地	横上げ	ヨコナテ	—	赤褐色	—	—
9	9号穴	土師器	精緻小室蓋	—	—	精緻土A 素人	横上げ	(外)ヨコナテ (内)直いナテ	—	赤褐色	—	胎土に1mm人の石が多い。
10	10号穴	土師器	精緻碗	—	—	精緻土A 素人	横上げ	ヨコナテ	—	赤褐色	—	胎土に1mm人の石が多い。
11	11号穴	土師器	精緻環	—	—	精緻土A 素人	横上げ	ヨコナテ	—	赤褐色	—	胎土に1mm人の石が多い。
12	12号+17号2	土師器	精緻鉢	(20.2)	(19.6)	精緻土A 素人	横上げ	(内)手跡ちへラケズリ?→ナテ	—	赤褐色	—	胎土に1mm人の石が多い。
13	13号+17号2	土師器	環	(22.9)	(25.0)	砂粒多い 花地	横上げ	(内)タテハナナテ (口)同軸ヨコナテ	—	赤褐色	—	胎土に1mm人の石が多い。
14	14号(総合資料①)	須恵器	環蓋	—	—	砂粒少ない 素人	縦上げ	(内)有筋ちへラケズリ (口)同軸ヨコナテ	—	黒灰色	スズ付蓋 二次加熱	胎土に1mm人の石が多い。
15	15号	須恵器	環蓋	—	—	砂粒少ない 素人	縦上げ	(内)有筋ちへラケズリ (口)ヨコナテ	—	黒灰色	—	胎土に1mm人の石が多い。
16	16号	須恵器	環蓋	—	—	砂粒少ない 素人	縦上げ	同軸ヨコナテ	—	灰白色	—	胎土に1~2mm人の石が多い。
17	17号	須恵器	環蓋	—	—	砂粒少ない 素人	縦上げ	同軸ヨコナテ	—	赤褐色	—	胎土に1~3mm人の石が多い。
18	18号	須恵器	環身	—	(11.2)	砂粒少ない 素人	縦上げ	(外)同軸ナテ (蓋)不明 (口)同軸ヨコナテ	—	灰白色	—	胎土に1mm人の石が多い。
19	19号	須恵器	環	(17.0)	—	砂粒少ない 素人	縦上げ	同軸ヨコナテ	—	黒色	—	胎土に1mm人の石が多い。
20	20号(総合資料②)	須恵器	大型蓋	—	—	砂粒少ない 素人	横上げ	(内)平帯ちへラケズリ (内)同心向文	—	赤褐色 (内)赤褐色 (内)青灰色	赤茶 二次加熱	胎土に20粒以上の石が多い。 45.1cm×19.0cm出土片と報告
21	21号	須恵器	環	—	—	砂粒少ない 素人	横上げ	(外)平帯ちへラケズリ (内)有筋ちへラケズリ	—	赤褐色 (内)青灰色	赤茶 二次加熱	胎土に1mm人の石が多い。 小片化している。
22	22号(総合資料③)	須恵器	鉢	(11.0)	(20.6)	砂粒少ない 素人	横上げ	(外)ナテ (口)同軸ヨコナテ	—	赤褐色	—	胎土に1mm人の石が多い。 19.1cm×下唇と報告。

NO	出土位置	種別	略称	規格(寸法)は縦×横×高さ(単位:cm)	出土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
5	上層	土師器	鉢	—	—	横上げ	(外)ナナズリ(内)ヘラケズリ(石きき) (ロ)ヨコナナ	—	淡褐色	—	口縁部
6	出土中	土師器	鉢	(20.0)	—	横上げ	(外)ナナズリ (内)ヘラケズリ	—	淡褐色	赤茶→二次加熱	口縁部 1/8片
7	上層	土師器	鉢	—	—	横上げ	(内)ヘラケズリ(ロ)ヨコナナ	—	明褐色	二次加熱あり	口縁部
NO	出土位置	種別	石材	規格(寸法)は縦×横×高さ(単位:cm)	重量	—	—	—	—	—	—
8	出土中	カマド基石	火山岩	30.8	21.0	4.3	—	—	—	—	—

接合面を全体に被蝕している。→再利用の可能性あり。

5章58図P133

野間地区-7号竪穴建物跡

NO	出土位置	種別	略称	規格(寸法)は縦×横×高さ(単位:cm)	出土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	カマド内層中	土師器	鉢	(26.6)	—	横上げ	(外)ナナズリ(5本/1cm) (内)ヨコナナ	—	茶褐色	—	口縁部 3/4片
2	出土中(床下)	須置器	坏蓋つまみ	(2.9)	—	横上げ	(外)ナナズリ (内)ヘラケズリ	—	淡青灰色	—	地上に1mmの石置き。表面に1mmの石置き。裏面に1mmの石置き。20箇所→柱に接合
3	出土中	須置器	坏蓋	(15.8)	—	横上げ	(外)ナナズリ (内)ヘラケズリ	生掛け	白灰色	—	—
4	出土中	土師器	轆轤坏	3.3 15.4	—	横上げ	(外)ナナズリ(内)ヘラケズリ→ハナエ具装 (ロ)ヨコナナ	—	茶褐色	スス付着	底部外面にスス付着
5	出土中	土師器	轆轤坏	—	—	横上げ	(内)ヨコナナ	—	茶褐色	—	口縁部
6	出土中	土師器	人型甕	(26.8)	—	横上げ	(外)ナナズリ(石きき?) (ロ)ヨコナナ	—	茶褐色	赤茶→二次加熱	口縁部 1/3片
7	出土中	土師器	鉢	—	—	横上げ	(外)ヘラケズリ(内)ヨコナナ	—	茶褐色	赤茶→二次加熱	口縁部 6×3cm片
8	出土中	土師器	小型鉢	(16.6)	(15.6)	横上げ	(外)ナナズリ(内)ヨコナナ	—	淡褐色	赤茶→二次加熱	口縁部 1/3片
9	竪穴付近	須置器	坏蓋	2.2 12.8	—	横上げ	(外)ナナズリ(石きき) (内)ヨコナナ	—	淡青灰色	—	地上に1mmの石置き。つまみ径 3.2cm
10	竪穴付近	須置器	坏身	—	—	横上げ	(外)ヘラケズリ(内)ヨコナナ	—	黒色(N)濃灰色	—	C区ピット31と接合
11	竪穴付近	須置器	坏身	—	—	横上げ	(外)ヘラケズリ(内)ヨコナナ	—	淡青灰色	—	底面
12	竪穴付近	須置器	坏身	—	8.6	横上げ	(外)ヘラケズリ(内)ヨコナナ	—	淡青灰色(黄)	—	地上に1mmの石置き。
13	竪穴付近	土師器	甕	(16.6)	—	横上げ	(外)ナナズリ(石きき) (内)ヨコナナ	—	茶褐色	赤茶→二次加熱	口縁部 1/7片

野間G区-19号土坑

5号60図P136

NO	出土位置	種別	器種	規格()つちびり()単位()		出土	成形	調整	焼成	色調	使用種	備考			
				高さ	口径								口径	径	
1	下層	須恵器	杯蓋	3.1	(14.6)	砂粒少ない 聚人	横上げ ロクロ成形 (右側部) ヨコナテ	(外) 口縁へラケズリ・ヨコナテ (内) 口縁ヨコナテ	-	濃青灰色	-	底土に1~2個大の石夾多い。			
2	下層	須恵器	壺	-	-	砂粒少ない 聚人	横上げ タタキ成形	(外) 厚肉 (内) 厚肉 (外) 厚肉 (内) 厚肉 (外) 厚肉 (内) 厚肉 (外) 厚肉 (内) 厚肉	-	灰白色 (内) 灰白色	-	胴部			
3	下層	七脚器	樽蓋	-	(21.6)	相変態上A 聚人	横上げ (内) 相変態	(外) 口縁ヨコナテ (内) 口縁ヨコナテ	-	淡褐色	-	口縁部 1/6片			
4	下層	上層器	樽蓋	-	(20.0)	相変態上A 聚人	横上げ	(外) 口縁ヨコナテ (内) 口縁ヨコナテ	-	明褐色	-	口縁部 1/3片			
5	下層	上層器	樽蓋	-	(17.0)	相変態上A 聚人	横上げ	(外) 口縁ヨコナテ (内) 口縁ヨコナテ	-	淡褐色	-	口縁部 1/5片			
6	下層	上層器	樽蓋	-	(15.8)	相変態上A 聚人	横上げ	(外) 口縁ヨコナテ (内) 口縁ヨコナテ	-	淡褐色	-	口縁部 1/4片			
7	下層	七脚器	蓋	-	-	砂粒多い 左側	横上げ (内) 相変態	(外) 口縁ヨコナテ (内) 口縁ヨコナテ	-	茶褐色	灰変 スス 一次焼成	口縁部 7×5cm片			
8	上層	須恵器	杯身	-	(8.0)	砂粒少ない 聚人	横上げ ロクロ成形 (右側部)	(外) 口縁ヨコナテ (内) 口縁ヨコナテ	-	淡青灰色 (内) 淡青灰色	-	底土(外) 白炭粉			
9	上層	須恵器	杯身	-	(8.8)	砂粒少ない 聚人	横上げ ロクロ成形	(外) 口縁ヨコナテ (内) 口縁ヨコナテ	-	濃青灰色	-	底土			
10	上層	須恵器	蓋	-	-	砂粒少ない 聚人	横上げ タタキ成形	(外) 口縁ヨコナテ (内) 口縁ヨコナテ	-	褐色 (内) 濃青灰色	-	胴部			
11	上層上坑外 1, 2, 3層	上層器	樽蓋	-	-	相変態上A 聚人	横上げ タタキ成形	(外) 口縁ヨコナテ (内) 口縁ヨコナテ	-	淡褐色	-	口縁部			
12	上層	七脚器	樽蓋	-	-	相変態上A 聚人	横上げ タタキ成形	(外) 口縁ヨコナテ (内) 口縁ヨコナテ	-	淡褐色	-	口縁部			
13	中層上中	須恵器	杯蓋	-	-	相変態上A 聚人	横上げ タタキ成形	(外) 口縁ヨコナテ (内) 口縁ヨコナテ	-	淡褐色	-	-			
14	中層(西側)	須恵器	蓋	-	(15.0)	砂粒少ない 左側	横上げ ロクロ成形	(外) 口縁ヨコナテ (内) 口縁ヨコナテ	-	淡褐色 ~ 淡青灰色	-	-			
NO	出土位置	種別	器種	規格()つちびり()単位()	高さ	口径	口径	径	出土	成形	調整	焼成	色調	使用種	備考
15	中層中	サヌカイ土	石環	4.8	2.4	3.3	28.3	野間G区-19号土坑	-	淡褐色	-	-	淡褐色	-	胴部 1/7片

野間G区-20号土坑

5号62図P137

NO	出土位置	種別	器種	規格()つちびり()単位()		出土	成形	調整	焼成	色調	使用種	備考
				高さ	口径							
1	1層 1層合衆土(2)	須恵器	壺	-	(21.6)	砂粒少ない	横上げ タタキ成形	(内) 口縁ヨコナテ (外) 口縁ヨコナテ	-	濃褐色 ~ 茶褐色	-	1層部 道筋成器 上坑17と結合

5章65図P138

野間G区-25号土坑

NO	出土位置	種別	器種	形状	土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	堀上中	須恵器	坏身	—	砂粒少ない	堀上げ 口ワ成形成	回転ココナテ	—	紫褐色	—	—

5章66図P139

野間G区-25号土坑

NO	出土位置	種別	器種	形状	土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	堀上中	上須恵器	須恵州製俵土 器A	—	砂粒多い 器A	すづくね	(外)直立直 (内)ナテ	—	淡褐色	二次加焼あり	須恵はげく、褐色に着色 器部 6×4cm

5章72図P141

野間G区-30号土坑

NO	出土位置	種別	器種	形状	土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	堀中A	土須恵器	精製坏	—	精製土A 器A	堀上げ	(外)ラケズリ (内)コナテ (内)ココナテ	原班 (外-内)	淡褐色	—	—
2	堀中A	土須恵器	精製坏	—	精製土A 器A	堀上げ	(外)ナテ (内)コナテ	—	淡褐色	—	口縁部 6×4cm片
3	堀中B	土須恵器	器	(21.8)	砂粒多い 器部	堀上げ	(外)ラケズリ (内)ココナテ	原班	淡褐色	二次加焼?	—
4	堀中B	土須恵器	器	—	砂粒多い 器部	堀上げ	(外)ココナテ (内)ラケズリ	—	淡褐色	—	底面 1/8片
NO	出土位置	種別	器種	形状	土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
5	高瀬	ナイフ形石器	石片	—	(450) 厚さ (単位φ)	—	—	—	—	—	—

5章74図P143

野間G区-31号土坑

NO	出土位置	種別	器種	形状	土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	堀上中	須恵器	長頸部	—	砂粒少ない 器A	堀上げ 口ワ成形成	(外)回転へら切り一回転ココナテ	—	淡褐色 (口部前)	—	堀上に1~3mm大の石英含む 水痕
2	堀上中	須恵器	坏蓋	—	砂粒少ない 器A	堀上げ 口ワ成形成	(外)回転へらケズリ (内)回転ココナテ	—	淡褐色	—	5mm穴縁上と縁合
3	堀上中	須恵器	坏蓋	—	砂粒少ない 器A	堀上げ 口ワ成形成	(外)回転へらケズリ (内)回転ココナテ	—	淡褐色	—	堀上に1~3mm大の石英多い、 7mm穴縁上と縁合 堀上に1~2mm大の石英多い、
4	堀上中	須恵器	坏身	—	砂粒少ない 器A	堀上げ 口ワ成形成	(外-内)回転へらケズリ一回転ココナテ (内)直ナテ	—	淡褐色	—	—
5	堀上中	須恵器	坏身	—	砂粒少ない 器A	堀上げ 口ワ成形成	(外-内)回転へらケズリ一回転ココナテ (内)直ナテ	—	淡褐色	—	—
6	堀上中	土須恵器	精製?	—	精製土A 器A	堀上げ	(内)ココナテ	—	明褐色	—	口縁部 6×7cm片
7	堀上中	土須恵器	器製成	—	精製土A 器A	堀上げ	(口)ココナテ	—	明褐色	—	口縁部 7×4cm片

NO	出土位置	種別	器種	規格()つは単位()単位()単位()	高さ()つは単位()単位()単位()	底径	出土位置	形状	土質	成形	調製	施装	色調	使用痕	備考
8	Ⅷ土中	埴輪	埴輪環	—	(14.6)	—	高野田土 肥田土	横上げ	—	淡褐色	—	—	—	—	—
9	Ⅷ土中	土師器	埴輪環	—	(17.2)	—	高野田土 肥田土	横上げ	—	淡褐色	—	—	—	—	山縁部 1/3片
10	Ⅷ土中	土師器	埴輪環	—	—	—	高野田土 肥田土	横上げ	—	淡褐色	—	—	—	—	—
11	Ⅷ土中	土師器	埴輪	—	(20.6)	—	砂粒多い 埴土	横上げ	—	淡褐色	—	—	—	—	口縁部 1/8片
12	Ⅷ土中	土師器	埴輪	—	—	—	砂粒多い 埴土	横上げ	—	淡褐色	—	—	—	—	口縁部 6×7cm片
13	Ⅷ土中	土師器	埴輪	—	(19.4)	—	砂粒多い 埴土	横上げ	—	淡褐色	—	—	—	—	口縁部 1/3片
14	Ⅷ土中	土師器	埴輪	—	(22.4)	—	砂粒多い 埴土	横上げ	—	淡褐色	—	—	—	—	口縁部 1/6片
15	Ⅷ土中	土師器	高坪	—	—	—	砂粒多い 埴土	横上げ	—	淡褐色	—	—	—	—	—
16	Ⅷ土中	土師器	埴輪(逆形)	—	—	—	砂粒多い 埴土	手づくね	—	淡褐色	—	—	—	—	—
17	Ⅷ土中	土師器	埴輪(逆形)	—	—	—	砂粒多い 埴土	不明	—	淡褐色	—	—	—	—	—
NO	出土位置	種別	石材	規格()つは単位()単位()単位()	長さ	幅	重量	備考							
18	Ⅷ土中	埴輪	埴輪片	(長)4.3 (幅)4.4	0.8~0.9	1.1	—	全周部(か)のり部分は表裏二面に剥離している							
19	Ⅷ土中	埴輪	片	—	9.1	3.3	(81)	平分におかれ、表裏二面に剥離							

野間G区-61号土坑

5章76図P144

NO	出土位置	種別	器種	規格()つは単位()単位()単位()	高さ	底径	出土位置	形状	土質	成形	調製	施装	色調	使用痕	備考
1	Ⅷ土中	土師器	小皿	—	(12.6)	—	砂粒多い 埴土	横上げ	—	淡褐色	—	—	—	—	口内面とも茶色剥離はげしい。 二次加飾あり 1/3片
2	Ⅷ土中	土師器	小皿	—	—	—	砂粒多い 埴土	横上げ	—	茶褐色	—	—	—	—	裏面 5×3cm片

野間G.H区一番ピット

5章78図P145

NO	出土位置	種別	器種	規格()つは単位()単位()単位()	高さ	底径	出土位置	形状	土質	成形	調製	施装	色調	使用痕	備考
1 Pit 1	Ⅷ土中	土師器	埴輪(逆形)	—	—	—	砂粒多い 埴土	横上げ	—	淡褐色	—	—	—	—	口縁部 5.5×4.5cm
2 Pit 2	Ⅷ土中	土師器	埴輪	(14.4)	—	—	砂粒少ない 埴土	横上げ	—	淡褐色	—	—	—	—	粘土に1~2mm大の石が多い。
3 Pit 3	Ⅷ土中	土師器	埴輪	—	—	—	砂粒少ない 埴土	横上げ	—	淡褐色	—	—	—	—	粘土に1mm大の石が多い。
4 Pit 4	Ⅷ土中	土師器	埴輪	—	—	—	砂粒少ない 埴土	横上げ	—	淡褐色	—	—	—	—	口縁部

NO	出土位置	種別	種類	形状(寸法は最大寸法・単位(mm))	胎土	成形	調査	焼成	色調	使用痕	備考
5	Plt 5	須恵器	外身	— (12.0)	—	横上げ ロクロ成形	(L) 凹底ヨコナテ	—	淡青灰色	—	胎土に1~3mm程度の石が多い。
6	Plt 6	須恵器	内身	— (6.0)	—	横上げ少ない ロクロ成形	(外) 凹底へう切り (内) 凹底ヨコナテ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm程度の石が多い。
7	Plt 7	須恵器	外身	— (9.7)	—	横上げ少ない ロクロ成形	(1) 凹底ヨコナテ (内) 凹ナテ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm程度の石が多い。
8	Plt 8	土師器	胴部	— (24.6)	—	横上げ	(外) ナテ (内) ナテ (内) ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部 1/4片
9	Plt 9	土師器	胴部	—	—	横上げ	(L) ナテ?	—	淡褐色	—	口縁部
10	Plt 10	土師器	胴部	—	—	横上げ	(L) ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部 5×4cm片
11	Plt 11	土師器	胴部	—	—	横上げ	(1) ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部 7×3cm片
12	Plt 12	土師器	胴部	—	—	横上げ	(外) 凹ナテ	—	淡褐色	—	—
13	Plt 13	土師器	胴部	— (15.6)	—	横上げ	(内) へうタズリ (L) ヨコナテ	—	淡褐色	—	胎土に石が多い。
14	Plt 14	土師器	胴部	—	—	横上げ	(外) ナテ (内) へうタズリ (内) ヨコナテ	—	茶褐色	—	口縁部 6×4cm片
15	Plt 15	土師器	胴部	—	—	横上げ	(外) へうタズリ (内) ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部 1/6片
16	Plt 16	土師器	胴部	—	—	横上げ	(内) へうタズリ (内) ヨコナテ	—	茶褐色	—	口縁部 3×3cm片
17	Plt 17	土師器	胴部	—	—	横上げ	(内) へうタズリ (内) ヨコナテ	—	茶褐色	—	口縁部 4×2cm片
18	Plt 18	土師器	胴部	—	—	横上げ	(外) 凹ナテ (内) 凹ナテ	—	丹灰色	—	口縁部
NO	出土位置	種別	石材	形状(寸法は最大寸法・単位(mm))	厚さ	厚さ	厚さ	厚さ	厚さ	厚さ	備考
19	Plt 19	石蔵	腰刀座高麗石	(2.0)	(1.7)	0.4	1.0	先細はか火痕	—	—	—

野間G.H区-13号溝

5号80図P146

NO	出土位置	種別	種類	形状(寸法は最大寸法・単位(mm))	胎土	成形	調査	焼成	色調	使用痕	備考
1	同上	中国製青磁	碗	— (5.8)	淡青色	ロクロ成形	凹入、削り出し	—	淡緑色	—	胎土に石が多い。

野間H区-1号路状遺構-土坑列

5号86図P152

NO	出土位置	種別	種類	形状(寸法は最大寸法・単位(mm))	胎土	成形	調査	焼成	色調	使用痕	備考
1	土坑7	須恵器	胴部	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	凹底ヨコナテ	—	淡青灰色	—	—
2	土坑10	須恵器	外身	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	凹底ヨコナテ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm程度の石が多い。
3	土坑13	須恵器	胴部	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	凹底ヨコナテ	—	淡青灰色	—	二条沈殿

NO	出上位置	須置	環身	石 材	規格() 高さ 厚さ	質量 単位(重量) 容積(体積)	形状	取土 位置	土 質	形状	調 査	塗 装	色 調	使 用 法	備 考
4	上杭14	須置	環身												
		出上位置	須 置	石 材	規格() 高さ 厚さ	質量 容積(体積)	形状	取土 位置	土 質	形状	調 査	塗 装	色 調	使 用 法	備 考
5	上杭21	巴石		安山岩	14.9 8.9	2.4 408.0									
6	上杭24	階段石帯		鉄筋片石	[10.6] 3.8	1.8 [143.2]									

野間H区一本場次遺構

NO	出上位置	須置	石 材	規格() 高さ 厚さ	質量 容積(体積)	形状	取土 位置	土 質	形状	調 査	塗 装	色 調	使 用 法	備 考	
		出上位置	須 置	石 材	規格() 高さ 厚さ	質量 容積(体積)	形状	取土 位置	土 質	形状	調 査	塗 装	色 調	使 用 法	備 考
1	1-2層	須置	環身												
2	1-2層	須置	環身												
3	1-2層	須置	環身												
4	1-2層	須置	環身												
		出上位置	須 置	石 材	規格() 高さ 厚さ	質量 容積(体積)	形状	取土 位置	土 質	形状	調 査	塗 装	色 調	使 用 法	備 考
5	上中	石帯		セメント コンクリート	6.1 5.1	1.5 38.1									

野間H区-10号溝

NO	出上位置	須置	石 材	規格() 高さ 厚さ	質量 容積(体積)	形状	取土 位置	土 質	形状	調 査	塗 装	色 調	使 用 法	備 考	
		出上位置	須 置	石 材	規格() 高さ 厚さ	質量 容積(体積)	形状	取土 位置	土 質	形状	調 査	塗 装	色 調	使 用 法	備 考
1	上中	上脚		特製磁 子丁											

野間H区-12号溝

NO	出上位置	須置	石 材	規格() 高さ 厚さ	質量 容積(体積)	形状	取土 位置	土 質	形状	調 査	塗 装	色 調	使 用 法	備 考	
		出上位置	須 置	石 材	規格() 高さ 厚さ	質量 容積(体積)	形状	取土 位置	土 質	形状	調 査	塗 装	色 調	使 用 法	備 考
1	上中	瓦葺													
2	上中	内側													

野間1・J・L区一帯面録表

5第97図P164

NO	出土位置・遺構	種類	器種	器高	口径	器口徑	胎土	成形	外 面	内 面	色 調	使用痕	備 考
1	1区1~3層	須恵器	坏蓋	—	(11.4)	—	砂粒少ない 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ→面取ヘ ヨコナテ(口上り)	面取ヨコナテ	緑灰色	—	胴上1~3cm次の行葉、散在黒色粒子 多い。
2	2区1~3層	須恵器	坏蓋	—	—	—	砂粒少ない 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ	面取ヨコナテ	淡青灰色	—	—
3	3区1~3層	須恵器	坏蓋	—	—	—	砂粒少ない 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ	面取ヨコナテ	淡青灰色 (内)淡褐色	—	—
4	3区8トレンチ	須恵器	坏身	(5.1)	(12.8)	—	砂粒少ない 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ	面取ヨコナテ+拵 ナテ	淡褐色 (内)淡褐色	—	—
5	3区8トレンチ	須恵器	坏身	(4.7)	(13.8)	—	砂粒少ない 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ	面取ナテ→面取ヨ コナテ	淡青灰色	—	—
6	3区8トレンチ	須恵器	蓋	—	—	—	砂粒少ない 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ	—	(黄)灰白色	—	—
7	1区1~3層	土師器	特製轆轤手	—	—	—	砂粒少ない 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ	ナテ	白灰色	—	—
8	1区1~3層	土師器	轆轤手	—	(12.4)	—	砂粒少ない 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ	面取ヨコナテ	淡褐色	—	—
9	3区8トレンチ 1区1~3層	土師器	蓋	—	—	—	砂粒多い 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ	面取ナテ→ヘラケ スリ	淡褐色	—	—
10	1区1~3層	土師器	蓋	—	—	—	砂粒多い 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ	面取ナテ→ヘラケ スリ	淡褐色	—	—
11	1区1~3層	土師器	蓋	—	—	—	砂粒多い 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ	面取ナテ→ヘラケ スリ	淡褐色	—	—
12	1区1~3層	土師器	蓋	—	—	—	砂粒多い 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ	面取ナテ→ヘラケ スリ	淡褐色	—	—
13	1区1~3層	土師器	蓋	—	—	—	砂粒多い 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ	面取ナテ→ヘラケ スリ	淡褐色	—	—
14	1区1~3層	土師器	蓋	—	—	—	砂粒多い 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ	面取ナテ→ヘラケ スリ	淡褐色	—	—
15	3区8トレンチ 1~3層	土師器	蓋	—	—	—	砂粒多い 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ	面取ナテ→ヘラケ スリ	淡褐色	—	—
16	1区1~3層	土師器	蓋	—	—	—	砂粒多い 胎土	胴上げ 口上り成形	面取ヨコナテ	面取ナテ→ヘラケ スリ	淡褐色	—	—

野間J区-39号土坑

5第98図P165

NO	出土位置・遺構	種類	器種	器高	口径	器口徑	胎土	成形	外 面	内 面	色 調	使用痕	備 考
1	1下層	須恵器	深鉢	—	—	—	砂粒多い 胎土	胴上げ	ナテ?	(不明)	(外)褐色 (内)褐色	—	20×15cm片
2	2区土中	須恵器	深鉢	—	—	—	砂粒多い 胎土	胴上げ	(不明)	(不明)	(外)褐色 (内)褐色	—	4×4cm片 保存不良
3	3区土中	須恵器	深鉢	—	—	—	砂粒多い 胎土	胴上げ	ヨコ方向の表取?	(不明)	(外)褐色 (内)褐色	—	7×6cm片 保存不良

4	出土中	陶文土器	深鉢底部	—	—	砂粒多い 在場	焼上げ	(不明)	(不明)	淡褐色	—	底径8.0cm
---	-----	------	------	---	---	------------	-----	------	------	-----	---	---------

野間1区-23号獨立柱建物跡

5.遺103図P168

NO	出土位置・遺構	種別	器種	高さ 器高	口径 口径	胎土 胎土	成形 成形	外面 外面	内面 内面	色調 色調	使用痕 使用痕	備考 備考
1	柱穴4	乳色器	坏身	—	—	砂粒少ない 在場	焼上げ ロウロ成形	白磁ヨコナテ	白磁ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土石灰(1~2mm大)が多い
2	柱穴4	土師器	精製坏	—	—	—	焼上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	赤褐色	—	胎土黒磁器母片,多い。
3	柱穴4	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在場	焼上げ	ヨコナテ	ヘラケズリ	淡茶褐色	—	胎土に1~2mm大の灰,青赤褐色片 4×5cm片
4	柱穴6	土師器	甕	—	—	砂粒少ない 在場	焼上げ	ヨコナテ	ヘラケズリ	淡褐色	—	胎土に~1mm大の灰,青石或赤白色 粒多い。5×3cm片

野間1区-24号獨立柱建物跡

5.遺105図P169

NO	出土位置・遺構	種別	器種	高さ 器高	口径 口径	胎土 胎土	成形 成形	外面 外面	内面 内面	色調 色調	使用痕 使用痕	備考 備考
1	柱穴6	土師器	精製坏	—	14.4	—	焼上げ	ヨコナテ 焼丁付もへラケズリ	ナテ	淡褐色	—	胎土黒磁器母片~1mm大の石灰赤白色 粒多い。1/3片

野間1区-30号獨立柱建物跡

5.遺107図P172

NO	出土位置・遺構	種別	石材 材質 (地層)	長さ 長さ	厚さ 厚さ	重量 重量
1	柱穴1	石版	片麻石 (地層)	2.3	1.5	0.35 (0.80)

野間1区-9号竪穴建物跡

5.遺114図P177

NO	出土位置・遺構	種別	器種	高さ 器高	口径 口径	胎土 胎土	成形 成形	外面 外面	内面 内面	色調 色調	使用痕 使用痕	備考 備考
1	土坑2	土師器	精製坏	—	(15.4)	精製土A 在場	焼上げ	ヨコナテ (焼丁付もへラケズリ)	ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土白,赤褐色片~2mm大の石灰多い, 1/3片
2	土坑2	土師器	精製坏	—	14.0	精製土A 在場	焼上げ	ヨコナテ,ナテ (焼丁付もへラケズリ)	ナテ	淡褐色	—	胎土1~2mm大の石灰,黒小片,粒多い, 1/2片
3	土坑2+土坑3+ 穴	土師器	甕	—	—	精製土A 在場	焼上げ	ヨコナテ,ナテ (焼丁付もへラケズリ)	ヘラケズリ	茶褐色	—	胎土1~2mm大の灰,青,赤,白色粒多 い,1/2片
4	床面直上	土師器	甕	—	—	砂粒少ない 在場	焼上げ	平打タタキ	同心円文	淡青灰色	—	外一付煎煎
5	床面直上	土師器	精製坏	—	12.6	精製土A 在場	焼上げ	手持ちへラケズリ,ヨ コナテ	ヨコナテ,ナテ	淡褐色	—	胎土赤,黒褐色片が多い,1/3片
6	土坑1	土師器	甕	—	19.2	砂粒多い 在場	焼上げ	ヨコナテ,ナテ	ヘラケズリ	茶褐色	—	胎土~2mm大の灰,赤,白色粒多い, 1/5片
7	土坑1	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在場	焼上げ	ヨコナテ	ヘラケズリ	茶褐色	—	胎土1~2mm大の灰,青,赤,白色粒多 い,1/5片
8	土坑1	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない 在場	焼上げ	白磁ヨコナテ	白磁ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土に1mm大の石灰あり。

9	床面直上	土割部	精製环	—	—	横上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡褐色	—	粘土塊小長・角多い、赤・白色居多い、5×3cm ²
10	床面直上	土割部	要	—	—	横上げ	ヨコナテ→ナテ	ヨコナテ→ナテ	淡褐色	—	粘土に1mmの長・角・赤、白色居多い、
11	床面直上	土割部	鉄	—	—	横上げ	ヨコナテ→ナテ	ヨコナテ→ナテ	茶褐色	—	粘土に1~2mmの長・角・赤、白色居多い、
NO.	出土位置・遺構	種別	石	長さ	()つちり単位(cm)	厚さ	重量	形状	色調	備考	
	1床下	石蔵	チャート	3.3	—	0.45	3.0	完形・原文時代早期、既詳遺物			

5層117箇P181

野間1区-8号竪穴遺物表

NO.	出土位置・遺構	種別	器種	器高	口径	器口徑	器底()つちり単位(cm)	重量	形状	土質	成形	外観	断面	内面	色調	使用痕	備考
1	床面直上	須臾器	坏産	3.1	17.0	—	—	—	横上げ ロクロ成形	砂粒少ない 素人	横上げ ロクロ成形	同型ヨコナテ・凹縁 ヨコナテ	同型ナテ	同型ナテ	青灰色	—	転用説 つちり径 3.2cm 胎土に1mmの長・白色粒多い、
2	埋土中	須臾器	坏産	—	(15.0)	—	—	—	横上げ ロクロ成形	砂粒少ない 素人	横上げ ロクロ成形	同型ヨコナテ	同型ナテ	同型ナテ	暗茶褐色	—	胎土に1mmの長・角・赤、白色粒多い、
3	埋土中	須臾器	坏産	—	—	—	—	—	横上げ ロクロ成形	砂粒少ない 素人	横上げ ロクロ成形	同型ヨコナテ (外)凹縁ヨコナテ (内)凹縁ヨコナテ	同型ナテ 凹縁ヨコナテ	同型ナテ	淡青灰色	—	高台胎付 胎土に4mmの長・角・赤、白色粒多い、
4	埋土中	須臾器	坏産	—	—	—	—	—	横上げ ロクロ成形	砂粒少ない 素人	横上げ ロクロ成形	同型ヨコナテ・凹縁へ ラ切り	同型ナテ	同型ナテ	淡青灰色	—	高台胎付 胎土に4mmの長・角・赤、白色粒多い、
5	埋土中	須臾器	坏産	—	—	—	—	—	横上げ ロクロ成形	砂粒少ない 素人	横上げ ロクロ成形	同型ヨコナテ・凹縁へ ラ切り	同型ナテ	同型ナテ	淡青灰色	—	高台胎付 胎土に4mmの長・角・赤、白色粒多い、
6	埋土中	土割部	精製坏	—	(16.6)	—	—	—	横上げ ロクロ成形	砂粒少ない 素人	横上げ ロクロ成形	同型ヨコナテ・凹縁へ ラ切り	同型ナテ	同型ナテ	淡褐色	—	高台胎付 胎土に4mmの長・角・赤、白色粒多い、
7	埋土中	土割部	精製坏	—	—	—	—	—	横上げ ロクロ成形	砂粒少ない 素人	横上げ ロクロ成形	同型ヨコナテ・凹縁へ ラ切り	同型ナテ	同型ナテ	淡褐色	—	高台胎付 胎土に4mmの長・角・赤、白色粒多い、
8	埋土中	土割部	精製坏	—	—	—	—	—	横上げ ロクロ成形	砂粒少ない 素人	横上げ ロクロ成形	同型ヨコナテ・凹縁へ ラ切り	同型ナテ	同型ナテ	淡褐色	—	高台胎付 胎土に4mmの長・角・赤、白色粒多い、
9	埋土中	土割部	要	—	(24.4)	—	—	—	横上げ ロクロ成形	砂粒多い 化境	横上げ ロクロ成形	同型ヨコナテ	同型ナテ	同型ナテ	淡褐色	—	高台胎付 胎土に4mmの長・角・赤、白色粒多い、
10	埋土中	土割部	鉢	—	—	—	—	—	横上げ ロクロ成形	砂粒多い 化境	横上げ ロクロ成形	同型ヨコナテ	同型ナテ	同型ナテ	茶褐色	—	高台胎付 胎土に4mmの長・角・赤、白色粒多い、
11	埋土中	土割部	要	—	—	—	—	—	横上げ ロクロ成形	砂粒多い 化境	横上げ ロクロ成形	同型ヨコナテ	同型ナテ	同型ナテ	淡褐色	—	高台胎付 胎土に4mmの長・角・赤、白色粒多い、
12	カマド・支	土割部	小型甕	—	(12.6)	—	—	—	横上げ ロクロ成形	砂粒多い 化境	横上げ ロクロ成形	同型ヨコナテ	同型ナテ	同型ナテ	茶褐色	—	高台胎付 胎土に4mmの長・角・赤、白色粒多い、
13	カマド内・3-4層	土割部	小型甕	—	—	—	—	—	横上げ ロクロ成形	砂粒多い 化境	横上げ ロクロ成形	同型ヨコナテ	同型ナテ	同型ナテ	茶褐色	—	高台胎付 胎土に4mmの長・角・赤、白色粒多い、
14	埋土中	須臾器	坏産	—	—	—	—	—	横上げ ロクロ成形	砂粒少ない 素人	横上げ ロクロ成形	同型ヨコナテ	同型ナテ	同型ナテ	明褐色	—	高台胎付 胎土に4mmの長・角・赤、白色粒多い、
15	床下	灰生土層 部へ中閉	甕・底部	—	—	—	—	—	横上げ ロクロ成形	砂粒多い 砂地	横上げ ロクロ成形	同型ヨコナテ	同型ナテ	同型ナテ	淡青灰色	—	高台胎付 胎土に4mmの長・角・赤、白色粒多い、

野間1区-15号型穴窯跡跡

5章120-121図P184-185

NO	出土位置・遺構	種別	器種	形状(口縁部を除く)	口径	高さ	胎土	成形	外面	内面	色	使用痕	備考
1	土坑1	子母器	精緻坏	環状	16.4	—	精緻胎土A 素人	横上げ	ヨコナナア→手持ちヘラ	ナナ	紺褐色	—	胎土細小粒、赤・白色粒多い、 3/4片
2	土坑1	土師器	精緻坏	環状	—	—	精緻胎土A 素人	横上げ	ナナリ	ナナ	淡褐色	—	胎土1mm大石、赤・白色粒、微細 葉片 6×5cm片
3	カマド内+灰皿	土師器	甕	平底	(22.4)	—	砂粒多い 素人	横上げ	タカアア(8.5cm) ヨコナナア	ヘラクレスリ	茶褐色	—	胎土1~3mm大の長角、白赤粒多く各 角、1/2~1/3片、副産物厚24.4cm
4	土坑1	製瓶土器A	焼酎用逆甕形	—	—	—	胎土精良 素人	横上げ	指圧	ナナ	紺褐色	—	胎土1~1mm大石、赤、赤色粒多い、 ロク石石屑
5	灰土中	須恵器	坏	環状	1.5	(13.2)	砂粒少ない 素人	横上げ ロク石成形	ヨコナナア→同転へ	同転ヨコナナ	白灰色	—	胎土1~2mm大の石多、 胎土1色粒多い、
6	灰土中	須恵器	坏	環状	—	(13.4)	砂粒少ない 素人	横上げ ロク石成形	ヨコナナア→同転へ	同転ヨコナナ	(内)茶褐色 (外)黄褐色	—	胎土1~2mm大の石多、 胎土1色粒多い、
7	灰土中	須恵器	坏	環状	—	(14.0)	砂粒少ない 素人	横上げ ロク石成形	ヨコナナア→同転へ	同転ヨコナナ	(内)黒色	—	胎土1~1mm大の石多、 胎土1色粒多い、
8	灰土中	須恵器	坏	環状	—	—	砂粒少ない 素人	横上げ ロク石成形	ヨコナナ	同転ヨコナナ	淡青灰色	—	胎土1~1mm大の石多、 胎土1色粒多い、
9	灰土中	須恵器	坏	環状	—	—	砂粒少ない 素人	横上げ ロク石成形	ヨコナナ	同転ヨコナナ	淡青灰色	—	胎土1mm大の石多、 胎土1色粒多い、
10	灰土中	須恵器	坏	環状	4.9	(12.8)	砂粒少ない 素人	横上げ ロク石成形	ヨコナナ	同転ヨコナナ	淡青灰色	—	胎土1mm大の石多、 胎土1色粒多い、
11	灰土中	須恵器	坏	環状	—	(8.4)	砂粒少ない 素人	横上げ ロク石成形	ヨコナナ	同転ヨコナナ	淡青灰色	—	胎土1mm大の石多、 胎土1色粒多い、
12	灰土中	須恵器	坏	環状	—	—	砂粒少ない 素人	横上げ ロク石成形	ヨコナナ	同転ヨコナナ	淡青灰色	—	胎土1mm大の石多、 胎土1色粒多い、
13	灰土中 鎌倉合葬料(砂)	須恵器	甕	平底	(20.0)	—	砂粒少ない 素人	横上げ タタキ成形	ヨコナナ	同転ヨコナナ	黒灰色	—	自然焼 M区水田中層と層内、 胎土1色粒多い、
14	灰土中	土師器	精緻甕	—	(21.6)	—	精緻胎土A 素人	横上げ	ヨコナナ	ヨコナナ	赤褐色	—	胎土1~1mm大の微細葉片、 1/8片
15	灰土中	土師器	精緻甕	—	—	—	精緻胎土A 素人	横上げ	ヨコナナ	ヨコナナ	赤褐色	—	胎土赤・白色粒、極小片、多、 胎土微細葉片多、
16	灰土中	土師器	精緻甕	—	—	—	精緻胎土A 素人	横上げ	ヨコナナ	ヨコナナ	淡褐色	—	胎土微細葉片多、
17	灰土中	土師器	精緻甕	—	—	—	精緻胎土A 素人	横上げ	ヨコナナ	ヨコナナ	淡褐色	—	胎土1mm大の石、赤、白、赤色粒多い、 胎土微細葉片多、
18	灰土中	土師器	精緻甕	—	—	—	精緻胎土A 素人	横上げ	ヨコナナ	ヨコナナ	淡褐色	—	胎土1mm大の石、赤、白、赤色粒 胎土微細葉片多、
19	灰土中	土師器	精緻甕	—	(19.4)	—	砂粒多い 在産	横上げ	ヨコナナ	ヘラクレスリ	赤褐色	—	胎土1~2mm大の長角、赤・白色粒 胎土微細葉片多、
20	灰土中	土師器	把持手	—	(20.6)	—	砂粒多い 在産	横上げ (内)傾接合)	ヨコナナア→ナナ	ヘラクレスリ	赤褐色	—	胎土1~3mm大の長角、赤・白色粒 胎土微細葉片多、
21	灰土中	土師器	甕	—	—	—	砂粒多い 在産	横上げ	ヨコナナ	ヘラクレスリ	茶褐色	—	胎土1~3mm大の長角、赤・白色粒多 い、1/8片
22	灰土中	土師器	甕	—	—	—	砂粒多い 在産	横上げ	ヨコナナ	ヘラクレスリ	茶褐色	—	胎土1~2mm大の長角、白色粒多い、 胎土1色粒多い、
23	灰土中	土師器	甕	—	—	—	砂粒多い 在産	横上げ (内)傾接合)	ヨコナナア→ナナ	ヘラクレスリ	淡褐色	—	胎土1~2mm大の長角、赤・白色粒多 い、1/8片

NO	出土位置・遺構	種別	器種	器口径	器高(口縁部を除く)	容量	土質	成形	外面	内面	色調	使用感	備考
24	堀土中	土師器	小型罎	—	(12.4)	—	砂粒多い 在池	横上げ	ヨコナテ・ナテ	ヘラケズリ	淡茶褐色	二次加熱あり	胎土1mm長・角・赤・白色程多い。 1/6片
25	堀土中(須賀遺物)	赤土器	罎	—	—	—	砂粒多い 在池	横上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡褐色	—	胎土1mm長・角・赤・白色程多い。 養生中層
NO	出土位置・遺構	種別	石材	長さ	幅	厚さ	重量	重量	備考				
26	堀土中(須賀遺物)	ナイフ形磨	厚板原瓜磨片	3.0	1.4	0.35	1.40	—	—				
27	堀土中(須賀遺物)	石核	メノウ	4.2	3.1	0.2	25.40	—	—				

野間I区-10号穴建物跡

NO	出土位置・遺構	種別	器種	器口径	器高(口縁部を除く)	容量	土質	成形	外面	内面	色調	使用感	備考
1	堀土1	土師器	樽形杯	(3.0)	16.0	—	胎土多量 在池	横上げ	ヨコナテ・ナテ	ナテ	淡褐色	二次加熱あり	胎土1~3mm長の石灰、白色程、微細 葉片が多い。1/2片
2	床面直上	須賀器	杯	1.4	(14.6)	—	砂粒少ない 在池	横上げ ロケロ成形	ヨコナテ・ナテ	同胎ナテ	淡青灰色	—	ロケロ型四角 胎土1~3mm長の石灰多い。
3	床面直上	須賀器	杯	—	—	—	砂粒少ない 在池	横上げ ロケロ成形	同胎ヨコナテ・ナテ	同胎ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土白色粒約~3人の石灰多い。
4	床面直上	須賀器	杯	—	—	—	砂粒少ない 在池	横上げ ロケロ成形	同胎ヨコナテ・ナテ	同胎ヨコナテ	淡青灰色 (胎土多量)	—	外層白質胎 胎土1mm長の石灰多い。 底層(6.0cm)
5	床面直上	土師器	罎	—	—	—	砂粒多い 在池	横上げ	ヨコナテ・ナテ	ヨコナテ・ナテ	淡褐色	二次加熱あり	胎土1mm長・角・赤・白色粒多い。 6×4cm片
6	堀土中	土師器	樽形罎	—	(19.6)	—	胎土多量 在池	横上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡褐色	—	胎土多量細葉片多い。 1/10片
7	堀土中	土師器	樽形罎	—	—	—	胎土多量 在池	横上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡褐色	—	胎土多量細葉片多い。 3×3cm片
8	堀土中	土師器	樽形罎	—	—	—	胎土多量 在池	横上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡褐色	—	胎土多量細葉片多い。 4×3cm片
9	堀土中	土師器	樽形杯	—	—	—	胎土多量 在池	横上げ	ヨコナテ・ナテ	ナテ	淡青灰色	—	胎土1mm長の石灰、石灰、淡細葉片 片多量。4×4cm片
10	堀土中	土師器	樽形杯	—	—	—	胎土多量 在池	横上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡褐色	—	胎土1mm長の石灰、赤・白色 程多量。
11	堀土中	土師器	樽形杯	—	—	—	胎土多量 在池	横上げ	ヨコナテ	ナテ	淡褐色	—	胎土1~2mm長の石灰、1mm×5mm片、 赤・白色程多量。
12	堀土中	土師器	樽形杯	—	—	—	胎土多量 在池	横上げ	ヨコナテ	ナテ	淡褐色	—	胎土1~2mm長の石灰、赤・白色程、微 細葉片多量。
13	堀土中	土師器	樽形杯	—	—	—	胎土多量 在池	横上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	明褐色	—	胎土1mm石灰、赤・白色程多い。
14	堀土中	土師器	罎	(24.4)	—	—	砂粒多い 在池	横上げ	ヨコナテ・ナテ	ヨコナテ・ナテ	茶褐色	—	胎土1~2mm長・角・赤・白色程多い。 1/8片
15	堀土中	土師器	罎	—	—	—	砂粒多い 在池	横上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	暗茶褐色	—	胎土1mm長・角・赤・白色程多量。 8×4cm片
16	堀土中	土師器	罎	—	—	—	砂粒多い 在池	横上げ	ヨコナテ・ナテ	ヨコナテ・ナテ	淡褐色	二次加熱あり	胎土1~2mm長の石灰、赤・白色程多量。 胎土1mm長・角・赤・白色程多量。

野間1区-12号型穴建物除

NO	出土位置・遺構	種別	器種	口径(口縁部直径) (cm)	器高 (cm)	土質	成形	外面	内面	色調	使用痕	備考
1	カマド内+高壇 瓦上	土師器	精緻鉢	—	—	精緻土人 花壇?	器上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡褐色	—	胎土黒小/角、赤・白色居多い。 4.5cm 保存完好。 裏面の土、大の石灰赤、白色粒、微細 葉肉片多い。
2	カマド直上+カマ ド内+土壇上	土師器	精緻杯	3.2	14.5~15.0	精緻土人 裏人	器上げ	ヨコナテ→手持ちヘラ ケズリ	ナテ→ヨコナテ	淡褐色	—	
3	カマド内3層+ 高壇上	土師器	杯	—	(16.6)	砂粒多い 花壇	器上げ	タテハケ→ヨコナテ	ヨコナテ→ヘラケ ズリ	茶褐色	外周ズリ付着 り 二次加温あり	胎土1~2mmの長、角、赤・白色居多い。
4	カマド直上+中 壇上	土師器	埴	—	(20.8)	砂粒多い 花壇	器上げ	タテハケのナテ→ヨコ ナテ	ヨコナテ→ヘラケ ズリ	淡茶褐色	—	胎土1~2mmの長、角、赤・白色居多い。 きめの細かい、胎土層用(生地でも産 地異なる) 1/8片
5	カマド内+土壇上 七郎器	土師器	灰皿+土皿A	—	(18.8)	砂粒多い 花壇	器上げ	タテハケ→ヨコナテ	ヨコナテ→ヘラケ ズリ	茶褐色	内面凹家 外周ズリ多 り 一次加温あり	胎土1~1mmの長/角、赤・白色居多い、 1/4片
6	土壇上	土師器	灰皿+土皿A	—	—	砂粒少ない 裏人	器上げ	ナテ→横圧痕	ナテ	淡褐色	—	胎土1~1mmの赤・白色粒子、微小埴 多い。
7	壇上+中	須器器	杯皿	—	—	砂粒少ない	器上げ	同胎ヨコナテ	同胎ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土1~2mmの石灰赤い。
8	壇上+中	須器器	杯皿	—	(14.0)	砂粒少ない	器上げ	同胎ヨコナテ	同胎ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土1~1mmの石灰赤い。
9	壇上+中	土師器	精緻碗	—	—	精緻土人 裏人	器上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡褐色	—	胎土1~1mmの長、角、1~2mmの石 灰赤い。
10	壇上+中	土師器	盆	—	—	砂粒多い 花壇	器上げ	ナテ→ヨコナテ	ヨコナテ→ヘラケ ズリ	茶褐色	—	胎土1~2mmの赤・白色居多い。 5×5cm片
11	床間直上	土師器	盆	—	—	砂粒少ない 花壇	器上げ	ヨコナテ	ヨコナテ→ヘラケ ズリ	淡褐色	—	胎土1~2mmの長/角、赤・白色粒石 灰赤い。(産地の異なる花壇?)

野間1区-38号土坑

NO	出土位置・遺構	種別	器種	口径(口縁部直径) (cm)	器高 (cm)	土質	成形	外面	内面	色調	使用痕	備考
1	掘土中	須器器	杯皿	—	14.8	砂粒多い	器上げ	同胎ヨコナテ→ヘラケ ズリ→ヨコナテ	同胎ヨコナテ	灰褐色	—	つまみ紐2.6cm、胎合完形。
2	掘土中	須器器	杯皿	—	—	砂粒少ない	器上げ	同胎ヨコナテ	同胎ヨコナテ	(内)黒色	—	(外)自然痕
3	掘土中	須器器	杯皿	—	—	砂粒少ない 裏人	器上げ	同胎ヨコナテ→同胎ヘ ラケズリ→ヨコナテ	同胎ヨコナテ	器質灰色	—	胎土1~2mmの石灰、白色居多い、 ロク石凹痕
4	掘土中	須器器	杯皿	1.5	14.1	砂粒少ない	器上げ	同胎ヨコナテ→同胎ヘ ラケズリ→ヨコナテ	同胎ナテ→同胎ヨ コナテ	淡青白色	—	胎土1~1mmの石灰、白色居多い、 胎合完形。
5	掘土中	須器器	杯皿	—	4.3	砂粒少ない 裏人	器上げ	同胎ヨコナテ	同胎ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土1~1mmの石灰、白色居多い、 胎合完形。
6	掘土中	須器器	杯皿	—	—	砂粒少ない	器上げ	(不明)	(不明)	白灰色	—	胎土1~1mmの石灰、白色居多い、 底径(8.6cm)
7	掘土中	土師器	精緻杯	—	(17.0)	精緻土人 裏人	器上げ	ヨコナテ→手持ちヘラ ケズリ	ヨコナテ	淡褐色	—	胎土赤・白色粒、微細砂粒多い。 4/5片に胎合

NO.	出土位置・遺構	種別	石材	()つは破片・単位(m)		重量 (単位g)	備考
				長さ	幅		
4	1区埋土中	鉄帶	刀子	20.1	(1.1)	0.2~0.4	—

野間1区-44号土坑

5章141図P201

NO.	出土位置・遺構	種別	器種	破片()つは破片・単位(m)		胎土	成形	色調	使用痕	備考
				長さ	幅					
1	1区埋土中	須臾器	甕	37.0	21.6	砂粒多い 雜入	瓶上げ タタキ成形	濃青灰色	胎土に磁粉 散在している	1~3cm大の釘跡多い、1~2mm大の 白色磁粉多量、胎土雜入量 33.5cm

野間1区-22号溝

5章143図P202

NO.	出土位置・遺構	器種	破片()つは破片・単位(m)		胎土	成形	色調	使用痕	備考
			長さ	幅					
1	1区埋土中	中国製青磁甕	—	—	磁粉胎土	ロケロ成形	淡緑青色	—	胎土灰白色・同安瀾

野間1区-14号溝

5章145図P203

NO.	出土位置・遺構	種別	石材	()つは破片・単位(m)		重量 (単位g)	備考
				長さ	幅		
1	埋土中	鉄器	鋸7	4.1	4.6	0.2~0.4	—
2	埋土中	鉄器	鋸先・側部	(7.1)	—	—	用途不明

野間1区-15号溝

5章146図P203

NO.	出土位置・遺構	種別	器種	破片()つは破片・単位(m)		胎土	成形	色調	使用痕	備考
				長さ	幅					
1	埋土中(灰印遺物)	弥生土器	甕底部	—	—	砂粒多い 在胎	瓶上げ	ヨコナア	ヨコナア	底長(6.4cm) 胎土 1/3片
NO.	出土位置・遺構	種別	石材	長さ	幅	厚さ	重量 (単位g)	色調	使用痕	備考
2	埋土中	砥石	頁岩	(9.5)	(4.5)	3.5	(210.3)	—	一面に研磨面	—

野間1区-20号溝

5章148図P204

NO.	出土位置・遺構	種別	器種	破片()つは破片・単位(m)		胎土	成形	色調	使用痕	備考
				長さ	幅					
1	埋土中(灰印遺物)	土師器	甕底部	—	—	砂粒多い 在胎	瓶上げ	ナア	ナア	胎土1~2mm大の釘・角多量、磁粉あり。 胎土長(6.0cm) 底長約V様式某の底部
NO.	出土位置・遺構	種別	石材	長さ	幅	厚さ	重量 (単位g)	色調 <td>使用痕</td> <td>備考</td>	使用痕	備考
2	埋土中	鉄帶	鋸先片	(4.7)	(1.7~1.4)	0.2	—	—	—	—

野間1・J区一者ピット

5章149図P205

NO	出土位置・遺構	種別	器種	器高(○)つばは破片(単位cm)		胎土	成形	外面		内面		使用痕	備考
				長さ	幅			長さ	幅	長さ	幅		
1	ピット1	土器	精緻環	—	—	薄製土A 胎土	模上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	—	胎土顔面裏面片、小石灰、赤・白色程多い。4×2cm片	
2	ピット2	土器	精緻環	—	—	薄製土A 胎土	模上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	—	裏面裏面片多い。4×2cm片	
3	ピット3	土器	高杯?	—	—	砂粒多い 胎土	模上げ	不明(斜線濃しい)	不明	不明	—	胎土1cm火の長・角、白色程多い。	
4	ピット4	土器	環	—	—	砂粒多い 胎土	模上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	—	胎土1cm火の長・角・赤・白色程多い。4×3cm片	
NO	出土位置・遺構	種別	石材	長さ	幅	長さ	厚さ	備考					
5	ピット5	石蔵	国九州産 サヌカイト	1.75	1.75	0.3	0.60	完形					

野間地区一構文蔵倉区

5章151図P207

NO	出土位置・遺構	種別	石材	長さ		幅		厚さ	重量	備考
				(○)つばは破片	単位(cm)	長さ	幅			
1	A7区-①グリッド	内蔵状行跡	小国産黒曜石	(2.9)	—	(1.45)	1.4	(4.30)	—	基部欠失
2	A8区-①グリッド	行跡	金加産サヌカイト	2.4	—	1.5	0.3	1.30	—	完形
3	B7区-②グリッド	扁平打痕石片	安山岩	(6.9~7.0)	—	7.1	1.2	(121.9)	—	完形
4	A8区-②グリッド	凹み石	安山岩	11.4	—	9.9	4.9~4.2	—	—	完形
5	A7区-③グリッド	鼻上置	砂岩	10.6	—	8.2~8.4	5.2	546.4	—	破砕で(?)とどめられている。完形

野間M区一表土出土遺物エカ

5章152図P208

NO	出土位置・遺構	種別	器種	器高(○)つばは破片(単位cm)		胎土	成形	調整(内)(外)		色調	使用痕	備考
				長さ	幅			長さ	幅			
1	B16区IV層	埴文土器	双鉢(破開)	—	—	—	模上げ	(不明)	(不明)	黒褐色	—	胎土1cm火の長・角、小石灰多い。
NO	出土位置・遺構 <td>種別 <td>石材 <td>長さ</td> <td>幅 <td>長さ</td> <td>厚さ <td colspan="5">備考</td> </td></td></td></td>	種別 <td>石材 <td>長さ</td> <td>幅 <td>長さ</td> <td>厚さ <td colspan="5">備考</td> </td></td></td>	石材 <td>長さ</td> <td>幅 <td>長さ</td> <td>厚さ <td colspan="5">備考</td> </td></td>	長さ	幅 <td>長さ</td> <td>厚さ <td colspan="5">備考</td> </td>	長さ	厚さ <td colspan="5">備考</td>	備考				
2	B16区IV層	扁平打痕石片	砂岩片岩	12.1	—	5.8	0.8	86.7	—	完形	—	完形
3	B16区IV層	扁平打痕石片	砂岩片岩	10.3	—	2.7~4.5	1.0	63.8	—	完形	—	完形

野間M区-16トレンチ

5第157図P215

NO	出土位置・遺構	種別	遺種	器(口)径(口径)	口徑	胎土	成形	調 整 (内) (外)	色 調	使用痕	備 考
1	3~4層	灰生土忍	瓦	—	底径(5.0)	砂粒多い	横上げ	(内)・(外)ナテ	淡褐色	二次加焼あり	胎土1~2mm長・角、白色粒・黒硝石多い。1/5片
2	5層中	須磨器	甃	—	—	砂粒少ない	タタキ成形	(内)田舎瓦ヨコナテ (外)田舎瓦文ヨコナテ	(内)黒灰色 (外)自然黒	—	胎土微小白色粒、軟質黒色粒多い。
3	5層中	土師器	須磨器	—	—	須磨土人	横上げ	(内)・(外)丁寧なナテ	淡褐色	—	新十層小長・角、赤色粒多い。
4	3~4層	土師器	須磨土	—	—	須磨土人	横上げ	(内)・(外)ヨコナテ	淡褐色	—	胎土1~1mm角・長、白色粒多い。
5	3~4層	中国製青磁 (竜泉窯)	須磨土	—	—	須磨土上 (須磨器)	ロクロ成形	(外)ナテ 回転ヨコナテ・透明釉	暗褐色	—	文・阿波弁文

野間M区-17トレンチ

5第159図P218

NO	出土位置・遺構	種別	遺種	器(口)径(口径)	口徑	胎土	成形	調 整 (内) (外)	色 調	使用痕	備 考
1	1~2層(灰層)	灰生前期土 中層前期の上層	瓦	—	—	砂粒多い	横上げ	ヨコナテ	淡褐色	二次加焼あり	胎土1~2mm長・角、黒硝石多い。
2	1~2層(灰層)	灰生前期土師	瓦	—	底径(4.7)	砂粒多い 在胎	横上げ	(外)ヨコナテ (内)ナテ	(内)淡褐色 (外)淡褐色	二次加焼あり	胎土1~1mm長・角、黒硝石多い。
3	7層+7~2層	須磨器	長頸甃	—	—	砂粒あり	横上げ	(外)須磨器ヨコナテ	(内)淡褐色 (外)淡褐色	—	1/3片 文・生焼け
4	6層	須磨器	須磨器	—	底径(10.6)	砂粒少ない	横上げ	(外)回転ヨコナテ (内)回転ヨコナテ	暗褐色 (内)黒灰色 (外)黒灰色	—	胎土1mm長の石灰、微細黒多。
5	7層	須磨器	須磨器	—	つまみ足 (2.0)	砂粒少ない 胎土	横上げ (右回転) (右回転)	(外)田舎瓦ヨコナテ (内)田舎瓦ヨコナテ (外)田舎瓦ヨコナテ (内)田舎瓦ヨコナテ	淡褐色 (内)黒灰色 (外)黒灰色	二次加焼あり	胎土1mm長の石灰、微細黒多。
6	西側-5層	須磨器	須磨器	—	底径(6.2)	砂粒少ない 胎土	横上げ	(外)回転ヨコナテ (内)横ナテ	(内)暗褐色 (外)淡青灰色	—	胎土1~1mm長の石灰、微細黒多。
7	上・中層(灰層)	須磨器	須磨器	—	底径(7.0)	砂粒多い 胎土	横上げ	(内)・(外)ナテ	淡褐色	二次加焼あり	胎土1~1mm長の石灰、微細黒多。
8	上・中層	土師器	須磨土	—	(12.4)	須磨土人	横上げ	ヨコナテ	淡褐色	—	微細黒多片、赤色粒多い。
9	上・中層	土師器	須磨土	—	—	須磨土人	横上げ	(内)・(外)ヨコナテ ヨコナテ	淡褐色	—	胎土1~2mm長の石灰、赤・白色粒多い。
10	上・中層	中国製白磁	瓦	—	—	須磨土上 ロクロ成形	横上げ	回転ヨコナテ・透明釉	淡褐色	—	須磨土人
11	上・中層	中国製青磁	須磨土	—	—	須磨土上 ロクロ成形	横上げ	回転ヨコナテ・透明釉	淡灰白色	—	須磨土人
12	上・中層	中国製青磁	須磨土	—	底径6.0	須磨土人	横上げ	回転ヨコナテ・透明釉	淡褐色	—	須磨土人
13	上・中層	須磨器	須磨器	—	()つまみ足 長さ	砂粒少ない 胎土	横上げ	回転ヨコナテ (須磨器)	淡青灰色	—	須磨土人
14	上・中層	須磨器	須磨器	—	底径(4.0)	砂粒少ない 胎土	横上げ	回転ヨコナテ (須磨器)	淡褐色	—	須磨土人
15	上・中層 5~7層	中国製青磁	須磨土	—	2.95	須磨土人	横上げ	回転ヨコナテ・透明釉	淡褐色	—	須磨土人
16	上・中層 5~7層	石灰	小須磨土師	—	8.8	須磨土人	横上げ	回転ヨコナテ・透明釉	淡青灰色	—	須磨土人

野間M区一水田層

5. 窓160図P220

NO	出土位置・遺構	層別	発掘	遺構・口	遺土	成形	調整(内)外	色調	使用痕	備考
1	22階	須恵層	坏蓋	—	砂粒多い	胴上げ成形 ロクロ成形	回転ココナア	濃褐色	—	胎土白色粒多い。
2	23階	須恵層	坏蓋・つまみ	つまみ 2.6	砂粒少ない 器人	胴上げ成形 ロクロ成形	外)ココナア	淡褐色	—	胎土黒小片・赤・白色粒, 1〜2mm大の石片多い。
3	下層+32階	須恵層	坏蓋	(15.6)	砂粒少ない 器人	胴上げ成形 ロクロ成形	(1) 回転ココナア・外) 回転ココナア (内) 指ナア	淡褐色	—	胎土1〜2mm大の石・黒白色粒, 白色粒多い。
4	下層	須恵層	坏蓋	—	砂粒少ない 器人	胴上げ成形 ロクロ成形	回転ココナア	暗茶褐色	—	胎土1mm大の石・白色粒多い。
5	C-16区(5階)	須恵層	坏身	—	砂粒少ない 器人	胴上げ成形 ロクロ成形 (石回転)	回転ココナア・外) 指ナア (内) 回転ココナア	濃褐色	—	胎土1mm大の石・紫黒褐色器人多い。
6	下層	須恵層	片または皿	直径8.1	砂粒少ない 器人	胴上げ成形	回転ココナア	白色 (内) 淡褐色 (外) 濃褐色	—	胎土1〜2mm大の石片多い。 4x4cm
7	下層	須恵層	坏蓋	—	砂粒少ない 器人	胴上げ成形 ロクロ成形	回転ココナア	濃褐色	—	胎土1mm大の石・黒褐色器人多い。
8	中層下段	須恵層	坏蓋	—	砂粒少ない 器人	胴上げ成形 ロクロ成形	回転ココナア	濃褐色	—	胎土1mm大の石片多い。
9	C-16区 5層上層	須恵層	坏身	—	砂粒(8.0) 器人	胴上げ成形 ロクロ成形	回転ココナア	濃褐色	—	胎土1mm大の石・黒褐色器人多い。
10	C-16区 4層下段	須恵層	坏身	—	砂粒(9.4) 器人	胴上げ成形 ロクロ成形	回転ココナア・回転ココナア (内) 回転ココナア	濃褐色	—	胎土1mm大の石・黒褐色器人多い。
11	C-18区 中層下段	須恵層	坏蓋	—	砂粒少ない 器人	胴上げ成形	回転ココナア	濃褐色	—	胎土1mm大の石・黒褐色器人多い。
12	D-15区 中層下段	須恵層	坏蓋	(18.2)	砂粒(18.4) 器人	胴上げ成形	回転ココナア	濃褐色	—	胎土1mm大の石・黒褐色器人多い。
13	C-14区 5層上層	土師層	指環坏	—	砂粒少ない 器人	胴上げ成形	回転ココナア	濃褐色	—	胎土黒小片・濃茶褐色片多い。
14	C-18区 中層下段	中川層	鉢(低体型)	—	砂粒(8.1) 器人	胴上げ成形	回転ココナア	濃褐色	—	胎土黒小片・濃茶褐色片多い。
15	C-15区 中層	中川層	鉢(低体型)	(16.0)	砂粒(16.0) 器人	胴上げ成形	回転ココナア・透明焼 陶磁器 (内) 透明焼 陶磁器	濃褐色	—	胎土黒小片・濃茶褐色片多い。
16	C-17区 中層	中世陶器	指輪底蓋	—	砂粒(9.6) 器人	ロクロ成形	回転ココナア・外) 回転ココナア (内) 回転ココナア	濃褐色	—	胎土黒小片・濃茶褐色片多い。
17	C-18区-1 F層-5 F層上層中層	管状土師	—	—	砂粒(8.5) 器人	ロクロ成形 つまみ	指ナア	濃褐色	—	胎土黒小片・濃茶褐色片多い。

野間M区ーピット群

5. 窓161図P220

NO	出土位置・遺構	層別	石材	長さ	() 幅	高さ	遺構	備考
1	ピット4	G段	金山赤土スライト	4.2	4.7	0.5	8.60	光形・浅田器物

野間M区一水田下土坑群

5第180図P227

NO	出土位置・遺構	種類	器種	器名	口径	口径	出土	成形	調整(内)・(外)	色澤	使用痕	備考
1	302号土坑遺十中下部	埴輪	杯	杯	2.9	13.8	陶製粘土A 層入	横上げ	(A) 胎土(白)コナズ (外) 胎土(白)コナズ の工基でナゲている(ハケでない)	黄褐色	—	特別に注意 胎土層は胎土片がまぶすように 入る。
2	311号土坑遺十中	埴輪	杯	杯	—	—	砂粒多い 印地	横上げ	同胎コナズ	黄褐色	—	胎土1~2mm大の片、1mm大の片、 赤、小赤、白色粒子多い。 5×3cm片
3	315号土坑遺面	埴輪	杯	杯	—	—	砂粒多い 在場	横上げ	同胎コナズ (A)ヘラケズリ	黄褐色	二次加飾あり 一次受	胎土1~2mm大の片、赤、赤、白色粒 子多い。
4	309号土坑遺上中	埴輪	杯	杯	—	(19.6)	砂粒多い 在場	横上げ	(外)コナズナ (内)ヘラケズリ	黄褐色	二次加飾あり	胎土1~2mm大の片、赤、赤、白色粒 子多い、1/2片

第7表 平厩地区出土遺物観察表
平厩A区一英海探査

6章9図P232

NO	出土位置・遺構	種類	器種	口径	胴高(○)フチは器高・底径(m)	胎土	成形	断面		色調	使用層	備考
								外	内			
1	—	須恵器	坏身	—	灰白成床(1.1-4)	砂粒少ない 素人	コナロ成形 横上げ	回転ヨコナア 回転へう切り	回転ヨコナア 回転ヨコナア	暗	—	胎土1~2mmの石灰多い。

平厩A区-201号土坑

6章9図P235

NO	出土位置・遺構	種類	器種	口径	胴高(○)フチは器高・底径(m)	胎土	成形	断面		色調	使用層	備考
								外	内			
1	7層7中	須恵器	坏蓋	1.0	15.8	砂粒少ない 素人	横上げ コナロ成形	回転ヨコナア 回転へう切り	回転ヨコナア	出灰色	—	胎土・黒色土、白色土、小石灰 つぎみ約2.1cm
2	7層上中	須恵器	坏蓋	—	(17.3)	砂粒少ない 素人	横上げ コナロ成形	回転ヨコナア	回転ヨコナア	褐色灰色	—	胎土1~2mmの石灰、白色 土多い、1/8片
3	7層上中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 素人	横上げ コナロ成形	回転ヨコナア	回転ヨコナア	淡青灰色	—	胎土1~2mmの石灰、白色 5×6cm片
4	7層7中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 素人	横上げ コナロ成形	回転ヨコナア	回転ヨコナア	外側黄褐色 内側青灰色	—	胎土白色粒多い。
5	7層7中	須恵器	坏身	4.1	14.6	砂粒少ない 素人	横上げ コナロ成形 高台取付	回転ヨコナア・回転 へう切り	回転ヨコナア	青灰色	—	器種10.03 胎土1~2mmの石灰、微切 黒色粒多い、高台(内径14cm)
6	7層7中	須恵器	坏身	6.2	18.4	砂粒少ない 素人	横上げ コナロ成形 高台取付	回転ヨコナア 回転へう切り	回転ヨコナア	黄灰褐色~ 暗灰色	—	底厚12.9cm 胎土1~2mmの石灰、微切 黒色粒多い、高台(内径14cm)
7	7層上中	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない 素人	横上げ コナロ成形	回転ヨコナア	回転ヨコナア	褐色灰色	—	胎土1~2mmの石灰、微質性 黒色粒・白色粒多い。
8	7層7中	土師器	甕縁坏	—	—	胎土粗土A 素人	横上げ コナロ成形	ヨコナア	ヨコナア	淡褐色	—	胎土微細黒色粒多い。
9	7層7中	土師器	甕	—	22.4	砂粒少ない 花地	横上げ (内縁接合)	ナア→ヨコナア ヘラケズリ	ヨコナア ヘラケズリ	赤褐色	—	胎土1~2mmの石灰、赤・白 色土、黒色土、高台(内径14cm)多い、1/4片
10	7層7中	土師器	甕	—	—	砂粒多い 花地	横上げ (内縁接合)	タテハツ(内縁接合) →ヨコナア	ヨコナア ヘラケズリ	淡褐色	—	胎土1~2mmの黒・白・赤・白 色土、高台(内径14cm)の黒褐色石 含む、9×9cm
11	7層上中	土師器	甕	—	—	砂粒多い 花地	横上げ	ヨコナア	ヨコナア ヘラケズリ	淡褐色	—	胎土1~2mmの石灰、1mm大 の灰、白色粒多い。
12	7層7中	土師器	小甕鉢	—	14.6	砂粒多い 花地	横上げ	ヨコナア	ヨコナア ヘラケズリ	淡褐色	—	胎土1~2mmの石灰、赤・ 白色粒多い。
13	7層7中	土師器	甕(内縁式)	—	—	砂粒多い 素人	横上げ	甕正腹	粗い甕正腹	淡~茶褐色	—	胎土1~2mmの石灰、白色粒 二次加熱あり
14	7層上中	土師器	甕(内縁式)	—	—	砂粒多い 素人	横上げ	甕正腹	ナア	淡茶褐色	—	胎土1~2mmの黒・白・赤・ 白色粒多い。

平原B区-203号土坑

6章11図P236

NO	出土位置・遺構	種別	器種	遺構(○)のほば程度(単位:cm)	遺構口徑	土質	成形	断面		色調	使用層	備考
								外面	内面			
1	2~3層	須臾器	坏身	—	(12.6)	砂粒少ない 素土	磨上げ ロクロ成形 高台残存	同底ヨコナア→ 同底へノ切り	同底ヨコナア	淡青灰色	—	胎土~1mm六の長、右端、口色 が多い。
2	2~3層	須臾器	坏身	—	—	砂粒少ない	磨上げ ロクロ成形	同底ヨコナア	同底ヨコナア	淡青灰色	—	—
3	2~3層	須臾器	蓋	—	(18.6)	砂粒少ない 素土	磨上げ タタキ成形	同底ヨコナア	同底ヨコナア	灰褐色~ 青灰色	—	胎土裏面褐色色が多い。

平原B区-ビット

6章13図P237

NO	出土位置・遺構	種別	器種	遺構(○)のほば程度(単位:cm)	遺構口徑	土質	成形	断面		色調	使用層	備考
								外面	内面			
1	ビット4	須臾器	坏産	—	(15.4)	砂粒少ない 素土	磨上げ ロクロ成形	同底ヨコナア→ 同底へノ切り	同底ヨコナア	淡青灰色	—	胎土~1mm六の石葉多い。

平原D区-204号土坑

6章15図P239

NO	出土位置・遺構	種別	器種	遺構(○)のほば程度(単位:cm)	遺構口徑	土質	成形	断面		色調	使用層	備考
								外面	内面			
1	土土中(内面)	弥生前期	須臾器	—	縦径(5.2)	砂粒少ない 土塊	磨上げ	—	—	黒褐色	—	胎土1~2mm六の長、角、白色 粒多い。~1mm六の石葉多い。

平原E・F区-新面採集

6章16図P242

NO	出土位置・遺構	種別	器種	遺構(○)のほば程度(単位:cm)	遺構口徑	土質	成形	断面		色調	使用層	備考
								外面	内面			
1	F-1-2層	配前	須臾器 坏身	—	—	—	—	同軸文? 透明釉	—	—	—	くわらんかん、須付跡、区 継ぎ元
2	E-底層部2層	配前	須臾器 坏身	—	—	—	—	透明釉	—	—	—	18世紀代?
3	F-1-2層	配前	須臾器 坏身	—	—	—	—	透明釉	—	—	—	1850~1860? 海区域?
4	F-1-2層	配前	須臾器 坏身	—	—	—	—	須何字文 透明釉	—	—	—	1820~1860年代
5	E-底層部1-2層	配前	須臾器 (小砂の入り 多量)	—	—	—	—	格子文 透明釉	—	—	—	1820~1860年代
6	F-1-2層	配前?	須臾器 坏身	—	—	—	—	植物文 透明釉	—	—	—	明治以降 コバルト
7	F-1-2層	配前	須臾器 坏身	—	—	—	—	内面: 内行薄文 透明釉	—	—	—	18世紀後半
8	E-底層部1-2層	九州産?	陶器土器	—	—	—	—	—	—	黒褐色	—	18世紀後半以降

平原 E・F 区一試掘トレンチ

6 葉 19 図 P242

NO	出土位置・遺構	種別	器類	果核(○)・つばはばり(△)の位置		出土	形状	外 面		内 面		使用感	備考
				高さ	口径			器高	器口径	器高	器口径		
1	E-2トレンチ 3層	陶器皿	陶器皿	—	—	—	—	—	—	—	—	17世紀後半?	
2	E-3トレンチ 3層	彫刻	青磁碗	—	—	—	—	—	—	—	—	18世紀代	
3	E-3トレンチ 3層	彫刻	朱付磁器皿	—	—	—	—	—	—	—	—	18世紀代?	
4	E-3トレンチ 3層	彫刻	朱付磁器蓋	—	—	—	—	—	—	—	—	18世紀後半	
5	E-5トレンチ 3層	彫刻	白磁釘蓋	—	(7.0)	—	—	—	—	—	—	18世紀後半～19世紀中頃	
6	E-3トレンチ 3層	彫刻	朱付磁器 (小形の八角 鉢付)	(6.6)	—	—	—	—	—	—	—	1820～1860年代	
7	E-5トレンチ 3層	—	朱付磁器 器小片	(7.0)	—	—	—	—	—	—	—	明治～	
8	E-5トレンチ 3層	彫刻	彫刻	4.2	7.2	—	—	—	—	—	—	明治以降～ 昭和3.2cm	
9	E-5トレンチ 3層	彫刻	朱付磁器 皿	2.4	(13.3)	—	—	—	—	—	—	明治20年以降 底径(7.4cm)	
10	E-5トレンチ 3層	不明	白磁磁器	—	底径(8.8)	—	—	—	—	—	—	—	
11	E-5トレンチ 3層	不明	磁器碗	—	(6.6)	—	—	—	—	—	—	—	
12	E-1トレンチ 3層	彫刻	磁器皿?	—	(4.9)	—	—	—	—	—	—	—	
13	E-1トレンチ 3層	彫刻	朱付磁器 皿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
14	E-2トレンチ 3層	—	磁器皿	—	底径(4.2)	—	—	—	—	—	—	—	
15	E-5トレンチ 3層	—	磁器磁器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
16	E-3トレンチ 3層	彫刻	白磁小片?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
17	E-2トレンチ 3層	—	陶器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
18	E-2トレンチ 3層	—	陶器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
19	E-4トレンチ 3層	彫刻	陶器磁器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

平原 C 区一出土遺物

6 葉 20 図 P242

NO	出土位置・遺構	種別	器類	果核(○)・つばはばり(△)の位置		出土	形状	外 面		内 面		使用感	備考
				高さ	口径			器高	器口径	器高	器口径		
1	1 世末七	彫刻	朱付磁器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	18世紀後半

2 田表上	肥前	白磁缸皿	—	(6.2)	—	—	—	—	—	—	—	18世紀後半～19世紀中頃
3 田表上	肥前(志田統?)	染付磁器皿 (染付)	—	(10.4)	—	—	—	—	—	—	—	同左?
4 田表上	肥前(志田統?)	染付磁器皿 (染付)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	染付磁器
5 田表上	肥前(志田統?)	染付磁器皿 (染付)	5.0	(6.5)	—	—	—	—	—	—	—	染付磁器(仮定?)
6 田表上	肥前(志田統?)	陶器碗	—	直径3.9	—	—	—	—	—	—	—	染付磁器?
7 田表上	瀬口美濃?	磁器	—	(6.5)	—	—	—	—	—	—	—	—
8 田表上	瀬口美濃?	染付磁器皿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9 田表上	肥前	磁器皿	—	直径(6.7)	—	—	—	—	—	—	—	—
10 田表上	—	陶器碗	—	直径(3.7)	—	—	—	—	—	—	—	—

平原 E 区-2 号溝

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格() 口径	高さ	口径	容量() または最大容量(単位:cm)	土質		成形	表面		色調	使用痕	備考
								胎土	施土		外	内			
1 溝上中	肥前	染付磁器皿	—	直径(6.5)	—	—	—	砂粒少ない 灰濁	—	ロクロ成形 器の目形 明白	—	—	—	—	見込み松竹唐文、18世紀後半

6第26図P247

平原 E 区-4 号溝

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格() 口径	高さ	口径	容量() または最大容量(単位:cm)	土質		成形	表面		色調	使用痕	備考
								胎土	施土		外	内			
1 溝上中	七瀬貝土層	灰	—	—	—	—	—	砂粒少ない 灰濁	—	樋上げ ロクロ成形 糸切り?	同磁器コナア、同磁器コナア	—	—	—	胎上～胎下の長、内、彩色見 多い、4×4cm片

6第28図P247

平原 E 区-5 号溝

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格() 口径	高さ	口径	容量() または最大容量(単位:cm)	土質		成形	表面		色調	使用痕	備考
								胎土	施土		外	内			
1 溝上中	肥前	白磁缸皿	—	1.3	6.2	—	—	—	—	通打成形	タコ唐草文	—	—	—	直径4.5cm、器末～明治後半
2 溝上中	瀬戸赤?	陶器皿	—	直径(6.8)	—	—	—	—	—	ロクロ成形 煎川し高台	鉄梅	—	—	—	煎川し高台、見込みの部 分を円形に削へている。
3 溝上中	瀬戸赤?	陶器皿	—	直径(3.8)	—	—	—	—	—	ロクロ成形 煎川し高台	鉄梅	—	—	—	煎川 見込み円形に削へている。

6第30図P248

第8表 米田地区、上野第2遺跡出土遺物観察表
米田地区-A区

7章4節P252

NO	出土位置・遺構	種別	種類	規格()つぎの単位(単位:cm)		形状	表面		色調	使用痕	備考
				長さ	口径		外面	内面			
1	1~2層	肥前	染付磁器皿	---	---	---	---	---	---	---	18世紀後半
2	試掘1トレンチ 1~2層	肥前	染付磁器皿	---	(9.8)	---	植物文	---	---	---	くわらんか手 18世紀後半
3	試掘2トレンチ 1~2層	肥前	染付磁器皿	---	底径(6.2)	---	裏付露筋	---	---	---	18世紀後半?
4	1~2層	肥前	染付磁器皿 (復元)	---	---	---	---	---	---	---	幕末~明治初葉
5	1~2層	肥前	染付磁器皿	---	---	---	菊花	---	---	---	幕末~明治初葉
6	2トレンチ・中層 上・中層	肥前	陶器碗	---	底径(7.2)	---	露筋・裏付露筋	---	---	---	幕末~明治初葉 10年代

上野第2遺跡-B区

7章6節P254

NO	出土位置・遺構	種別	種類	規格()つぎの単位(単位:cm)		形状	表面		色調	使用痕	備考
				長さ	口径		外面	内面			
1	---	肥前	染付磁器皿	2.0~2.1	(10.4)	---	丸火 筒内側一手握輪	七五文・平文 内面互込み 丸文	---	---	山口酒所輪・裏付露筋 17世紀後半
2	---	肥前?	白磁小鉢	---	---	---	---	---	---	---	1890~18世紀前半
3	---	肥前	染付磁器皿	---	---	---	矢羽文・透明輪	---	---	---	18世紀後半
4	---	肥前	染付磁器皿	---	---	---	透明輪	---	---	---	18世紀後半
5	---	肥前	染付磁器皿	---	---	---	写像文・透明輪	---	---	---	18世紀後半
6	---	肥前	染付磁器皿	---	底径(7.2)	---	見込丸底の目能ハキ・格子文? 透明輪	---	---	---	18世紀後半
7	---	肥前	染付磁器皿	---	---	---	山本文? 透明輪	---	---	---	18世紀後半
8	---	肥前	染付磁器皿	---	---	---	透明輪	---	---	---	18世紀後半
9	---	瀬戸・美濃系	染付磁器小鉢	---	---	---	透明輪	---	---	---	19世紀後半~中頃
10	---	肥前系?	青磁碗	---	(5.0)	---	袋行露筋	---	---	---	明治前半、クローム青磁
11	---	肥前系?	磁器碗	---	(5.4)	---	内外露筋	---	---	---	---
12	---	肥前?	磁器瓶	---	---	---	---	---	---	---	---
13	---	瀬戸・美濃系?	染付磁器小鉢	---	---	---	透明輪	---	---	---	---
14	---	---	染付磁器?	---	---	---	透明輪	---	---	---	---
15	---	---	陶器鉢鉢	---	---	---	内面、カキ目	---	---	---	近世